

4247

特 11

640

勝 諺 藏 著 作
 脚 演 本 劇
 御 文 章 石 山 軍 記
 自 大 序 至 大 詰

088556-000-3

特11-640

御文章石山軍記

勝 諺藏/著

M28

DBJ-0215

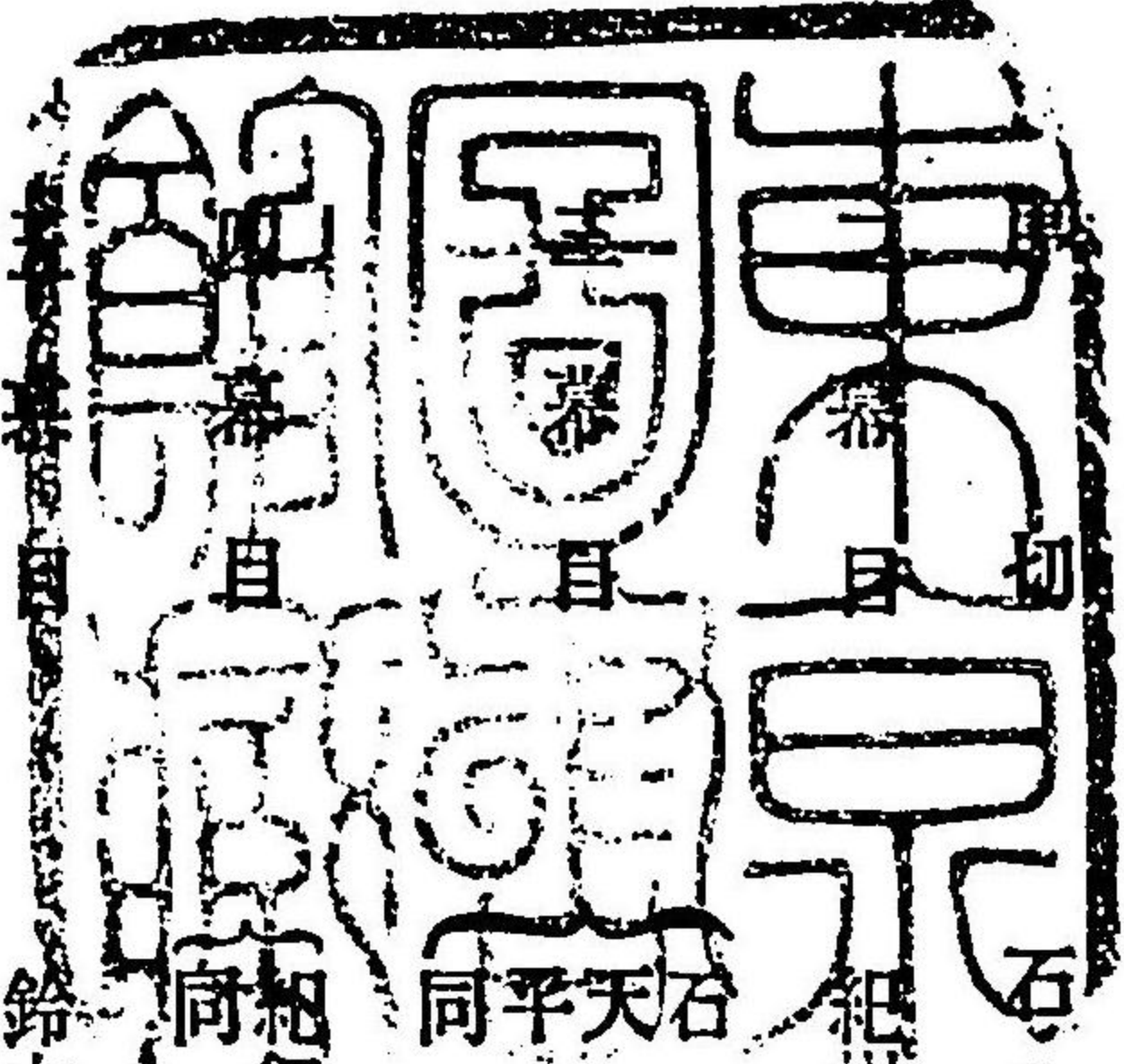


時11
640

演劇 御文章石山軍記

大 序 場

〔京都下加茂旅館内の場
同織田信長旅館の場



石山本願寺評定の場
〔紀州藤白山重幸閑居の場

石山本願寺惣攻の場
天王寺織田本陣の場
平野大念佛寺の場
同織田信長危難の場

相伊國鈴木孫市隠家の場
同磯間ヶ原の場
鈴木飛騨守最期別れの場

六 幕 目

大 詰

〔北野天満宮鳥居先の場
農民権四郎住家の場
紀州鷺の森御坊の場



演劇御文章石山軍記

大序 〔京都下加茂社内の同織田信長旅館の場〕

役名	大序	同織田信長旅館の場
一織田上總介信長	一荒木攝津守	
一阿圓の局	一池田筑後守	
一杉浦要人	一野村越中守	
一重幸妹雪の江	一蜂谷兵庫守	
一腰元お仲	一神職齋宮	
一村井民部	一奥女中若葉	
一下間法橋頼廉	一同	
一同少進仲之	一茶屋の亭主	
一丹羽五郎左衛門	一仕丁二人	
一瀧川左近將監	一供一人	

造物平舞臺上の方朱塗の鳥居是に續き朱塗の玉垣能所に葎篋張りの出茶屋上下織田家の紋付去幕張り床机を並べ空より若楓の釣枝都て京都下加茂葵祭りの模様仕丁二人竹箒と切手桶を持ち掃除して居る茶屋の亭主隨の下を焚付けて居る神樂にて幕明く 西入「ヨマヤシロ

○先づ是で役目は御代だ」と云ふ者じや 亭主「マア爰へ掛けて一服やらつしやり升せ。」「夫は尊けなす」上「再大床机に腰を掛ける」亭主「時に太郎又殿今日は葵祭りと云ひ殊に尾州から参りてしつた信長様の御参詣とやら其和郎はゑらい強い人じやないかいの。」「さいの元は信長の家から出た人」上「うな」亭主「今川義元を切平らげ齋藤武田を亡ぼし上洛被成れたは足利家の頼みに依り新將軍義昭公の後ろ主と成つて先將軍義輝公を弑せし三好を征伐せんどの思ひを強ひ計りでも下が迷惑する者じやわいの」上「上手より神職齋宮出て来り」齋宮「是はしたり下として上の取沙汰若しもお咎めある時には第一當社の迷惑其方共には立て〜」上「へい〜長り升てムり升る 亭主「そんならわしも水を一釣り汲んで来やうか」上「亭主は手桶を提げて橋掛りへ仕丁二人は上手へ這入る向ふにて」齋宮「御代参のお入り」上「向ふより阿圓の局襠形り腰元若葉初花跡より村井民部麻上下の拵らへ草履取りの仲間一人付添ひ出て来

り」阿國「思ふこと見あれの注連に引鈴の叶はずば鐘も鳴らしとの頼みを加茂のみづ垣に
 若葉玉依姫の其昔別慶槌の御神を御産の紐の安らかに 初花「あやめる爲に月毎の忍び参り
 に引替へて今日は曠なるお同様の 民部「其介添として君の御武運長久を祈りの爲の御代参先
 づ阿園殿にはあれなる床机へ 阿「左様致すでムリ升せう」ト舞臺へ來り床机に腰を掛ける」
 阿「是はく今日の御参詣御苦勞千万に存じ升る則當社の神職お待受け申てムリ升る信長
 公御社参と存せしに思ひ設けぬ女義のお入りシテあなた様には 阿「妾事は阿園の局と申者
 民部「今日ツた主君信長公御参詣あるべきの所攝為石山本願寺の地所望に付ての御評説 考」
 夫故君の御名代として初「阿園様の御代参 民「シテ逆賊三好誅伐の奉幣怠りなく勤めらるゝ
 か 阿「其義は七日祈念の奉幣丹誠を援んで今日の満期恐れながら此度の御合戦御勝利疑ひ
 候まじ何の然れお局には先づ神前へ御参詣 阿「左様なれば民部様 民「阿園殿 阿「御案内仕
 るでムリ升せう」ト皆々上手へ這入る向ふより杉浦要人羽織袴大小寺侍の拵らへにて出て
 來る跡より雪の江娘旅形りの拵らへにて襖折りの菅笠を持ち杖を突きお仲はしたため旅形り
 にて両掛をかたげし供一人付添ひ出て來り」雪の江「夫へお越しなさるゝ要人様ではムリ升
 せぬか 要人「ナ、こなたは鈴木氏の御息女雪の江殿 雪「ソレ見やいの矢張り要人様であつ
 たわいの お仲「本によい所でお目にかゝり嘸お嬉しうムリ升せうか 要「何の然れ雪の江

殿先つあれへ 雪「左様致し升せうわいなア 仲「サアお出被成れ升せ」ト床机に腰を掛け」
 仲「コレ源殿お前はそこらに待て居て下さんせいなア 供「ハイ」ト左様なら御洗足の茶見世
 でお待ち申升せう」ト両掛をかたげて上手へ這入る」仲「扱要人様には御機嫌能うて私は扱
 置御寮人のお悦び○ナアモシ御寮人様 雪「是が嬉しうなうて何とせうぞいの 要「夫にして
 も雪の江殿には如何して此京地へ 雪「サア姉さんも私も都知らず一度は見物したいと度々
 父へ願ひし所加茂の葵祭りを見物ながら行て來よとのお許し御本山へもお参り申あなたに
 お目もじ致そのを樂みに参り升したがシテ要人様にはどう云ふ事で此京には 要「サア今度
 織田信長公四國の三好を攻むるに付石山の地が入用故明渡せよとの使者の到來彼地は聖徳
 太子の神勅に依て中興蓮如上人様の御草創依令信長公の御所望たりとも渡されじと上人惜
 ませ給ふに付右辞退の使者として下間法橋頼廉殿并に少進仲之殿今日織田家の旅館へ御返
 答を申上るに付き某も共に當地へ登りしが幸ひ當社の葵祭り序ながら見物に参りし途中で
 計らすもお目にかゝりし拙者が悦び御親父庄司殿御舎兄重幸殿にも變る事もムらぬかな
 雪「ハイ有難う存じ升る父上にも御機嫌よう 要「夫は重疊然し拙者は御両所の様子も心が
 りにムれは何れ其内寛々と 仲「アモシお待ち遊ばし升せ國を隔てし主人のお住居お目もじ
 致すは年に一度の御開山忌の其外にはお寺へ参らぬ御寮人様サアお心急ぎではムリ升せう

が今度御寮人のお上りの京見物は表向き實はあなたへ密々の御用向が有るとの事ナアモ
御寮人様「ト吞込ます」雪「チ、さうじやわいのう」要「シテ某への密用とは」雪「サア其御用
は」仲「成程密事で他聞の憚り私は御用の濟む迄お参り申て参り升せう」雪「ア、コレ仲えな
たが爰に居やらいでは」仲「是はしたり爰が兼ての大事の御用跡でしつぱり」兩人「エ、仲
お咄しを被成れ升せいなア」ト上手へ這入る」要「何の御用か知らね共密事とあればちつと
も早う」雪「其密事を申升るは〇何うぞして下さい升せいなア」ト耻かしきこなし」要「何や
らとんと譯が分らぬ」雪「分らぬとはあんまりじや然も去年のお命請に父上共に御本山へお
参り申た其時のお詞をお忘れ被成れ升したかいなア」要「何の忘れはせぬければ誰有らう鈴
木飛驒守殿の妹御に道ならぬ言約束所詮縁談を申入れても物堅い御親子なればお怒りある
共お聞入はあるまい程に何うぞあの夜の戯れはない昔と諦めて」雪「あなたは本の戯れと
思召かは知らねども私しやお真向様へ世間晴れあなたと夫婦に成れ升様と朝夕お願ひ申升
たにそりや胴慾じや聞へ升せぬわいなア」要「サア其恨みは道理ながら世の交りさへ心愛し
とて山居迄成されし飛驒守殿假令縁組望むとてお許しあるまじ」雪「イエあなたと譯のある
事は姉上様に打明し願てあなたのお兄上杉浦民部様の許迄頼みの状を上げる筈兄御様から
只一言嫁にくれいとかつしやれば夫で兄上にも御得心は知れてあるトサア是程思へどあな

たには外に増花のあるに違ひムんせぬ所詮叶はぬ願ひなら死んで戀慕の思ひをば「ト要人
の刀に手をかけるを」要「是はしたり雪の江殿更々こなたを嫌ふでない流石に兄の手前を
耻ぢ云はなんだは手前が誤り夫もこなたの姉御から頼みの状を送られなば兄民部太夫にも
餘も兎や角とは申まい必ず共に短氣な事を」雪「ろんならあなた嫌ふては下さり升せぬか
要「何の嫌ふてよい者ぞ」雪「必らず替つて下さり升なへ」ト村井民部出て様子を見て居て」
民部「不義者見附けた其所動くまいぞ」要「何我々を」兩人「不義者とは」民「ヤア相手の女は知
らね共先達て信長公の上意に依つて本願寺へ使者に参りし其時に見覺へのある石山の坊官
杉浦民部太夫が弟」要「エ、」民「信長公の御武運を祈念の庭をば穢せし大罪イデ某が君の御
前へ」ト引立にかゝる上手より阿圓の局腰元付添ひ出て來り」阿圓「アイヤ村井民部様先お
待ち遊ばし升せ」民「誰かと思へは阿圓殿不義者を引立て行かんと致と身共を何故あつて止
め召るぞ」阿「あなたの粗忽がお氣の毒さに」民「何と言はる」阿「サア其者は親々の言約束
致せし夫婦中私がよくく知つたる者夫を捕へて不義杯とは近頃處相な民部様」民「異なる事
を言はるゝ者かな身共が見届た不義のいちや付夫をば不義でないとは吞込ぬ何ぞ慥な證據
がムるか」阿「さうおつしやるあなたにも何ぞ證據がムり升るか先あなたから其證據を」民「
でも其證據〇」阿「なくても不義者とかつしやり升るか」兩人「サア」くく」阿「不義にもあ

らぬ二人の者を不義者とは餘りの御鹿相ちとお嗜み遊ばし升せ 兵「ふ、不義でなくばないにも致せ清めし庭を穢した科は逃れまい 阿「ソナ穢せしとかつしやるは 兵「ハテ知れた事人目も耻ぢぬいちや付談し 阿「夫は若い夫婦の事人なき場所の咄しもあり強ち宮地を穢したでもムリ升まい 兵「コハ阿園殿には最負を召さるが万一君よりお咎めあらば 阿「ハテ其時は我君の御代參に立しがふせう此身を捨て見事お詫を 兵「ヤ 阿「あなたのお腹は借り升せぬわいなア 兵「然らばどうとも勝手に召されさ 阿「イヤ今日君には御旅館にて石山城地に付ての御評議廳あなたにもお急ぎ被成るでムリ升せう 兵「如何にも所念の相濟ひ上は失禮御免お先へ參る 阿「お忘れ者はムリ升せぬか 兵「身共老者は致さぬわい「ト立腹のこなしにて向ふへ這入る上手よりお仲出て來り」 仲「モ御寮人様能うお禮をおつしやり升せ危い場所と存じ升てお願ひ申せし此場の納り 雪「そんならそなたがあなた様へ 仲「ハイ皆あなたのお情でムリ升る 雪「其お情に甘へ升て拙者めがお願ひは只今君の御代參とのか同某の本願寺の坊官杉浦民部太夫が弟同苗要人と申者石山御所望の義に付き升て家老下間二人の者御辞退に推參致せしなれど御許容の計り難し万一御聞濟み是なき時には門徒の者共信長公へ敵對致さんも知るべからず何卒此義思ひ止り給ふ様お取成しの義を偏にお願ひ申升る 阿「其義は度々お陳め申せど一徹短慮の御氣質にて思ひ止り給はぬ我君然し乱の基と

われは是より歸つて今一應 雪「御本山の大事とあれば 仲「共々にお願ひ申上する「ト神樂の頭を打込む」 阿「アリアモウ神事納りの神樂 考阿園様に最早御歸館 雪「元二人遊りされ升せう 阿「さうし升せうわいのう「ト下手へ行を」 雪「仲「左様なればあなた様 雪「返すくも右の願ひを 阿「夫は承知仕升たわいのう「ト阿園思入あつて腰元二人付添ひ向ふへ這入る」 仲「何と御深切な方ではムリ升せぬか 雪「本に思はぬ難義をばお救ひ下さる其上に 雪「當寺の義迄願ひ置きしが 仲「信長様と云ふ方は 雪「我儘氣儘な殿とやら 雪「アどうぞ首尾よう 雪「此身の願ひも「ト要人の袖を一寸控へるを要人思入あつて氣を變へ扇にて拂ふを道具替りの知らせ」 雪「サ御參詣被成れ升せ「ト此仕組宜しく神樂にて返し造物塗櫃通りの二重見付瓜の内に唐花紋散らしの金襴都て織田信長旅館の体二重に丹羽五郎左衛門瀧川左近將監素袍大紋立烏帽子の拵らへにて扣へ平舞臺上下に池田筑後守荒木攝津守野村越中守蜂谷兵庫守矢張素袍大紋の拵らへにて居並び真中に下間頼兼同仲之着附繼上下本願寺家老の拵らへにて扣へ居る時の太鼓にて道具納る 丹羽「スリヤ信長公石山の地所々望の義に付 瀧川「其返答に 皆々「參りしとぞ 頼兼「ハツ主人顯如上人の仰せを蒙り參上致せし本願寺の家老下間法橋頼兼 仲之「同少進仲之何卒信長公へお目通りを偏に願ひ 両人「奉り升る 皆々「如何にも此由我君へ「ト立かゝる奥にて」 信長「アイヤ知らせに及ばぬ織田

信長夫へ参つて承らん「ト壺折の拵らへにて近習二人脇息褥を持ち出て來り真中に直す信長袴の上に住う刀持信長の刀を持ち後しるに扣へる」信「シテ本願寺の使は其方共か 兩人御意にムリ升る 信「我足利義昭公に頼まれ奉り逆賊三好を征伐に付き石山の地を根城とせんと村井民部不破河内守を使として本願寺の地を所望なせしも應仁の大乱より一日も合戦の止む時なく依て信長上洛なせしは四海の逆敵を切り隨へ上は都の君の御心を安んじ足利家再興の爲なれば餘も顯如上人には違背あるまじ 丹「シテ上人よりの 皆々返答はな 願「ハ、ア此度信長公御使者を以て土地御所望の旨仰せ聞けられ候段武家の御計らひ左もあるべき事に候へ共 仲之「我宗門の中興運如上人聖德太子の靈勅も依て開基ありし勝地にして他國へ移し候はん事叶ひ難く恐入つてはムリ升れど此義御免の義を 兩人「偏に願ひ奉り升る 細「スリヤ顯如上人には 丹「石山の地退去の義は 皆々相成らざるとな「ト橋掛りより村井民部出て來り」 民「ヤア假令聖德太子再來して建立した寺なり共信長公が御所望あらば差上くべきに左もなく辞退は奇ッ怪至極 丹「當時天が下の者共君の御威勢にかち恐れ 細「背く者一人も是なきに 池田「顯如上人石山を退去せぬとは憎く返答 荒木「況や運如愚昧の道俗をたぶらかし 野村「聖德太子の靈應杯と陸八百で米錢を食り 難谷「建立おしたる寺なるを信長公の望みに應せぬ憎き坊主め 民「能々君には御賢慮あつて 皆々然るべう存

じ升る 信「ヤア予が心別に有うか奇ッ怪至極の顯如上人左あらは直に大軍を以て取圍んで燒立つへし先軍神の血祭りに使者に來りし奴原の首を並べて用意せよ 皆々「心得升した民「イデ某が「ト立かゝる奥より阿圓の局出て來り」阿圓「ア、モン民部様先か待遊ばし升せ 信「誰かと思へは其方は 皆々「阿圓の局 民「又坊げを召さるゝ 阿「イエ坊げは致し升せぬと君のお爲を存する故 信「何と 阿「女子だてらに申上るも恐入てはムリ升れどいはゝ出家世捨人の使の者をお手にかけるは後世迄君の悪名を残すの道理何卒彼等は無事にか歸し下さる様偏にお願ひ申升る 信「ム、坊主の使を切て捨るも信長が勇なきよ似たれば情を以て命は助けるさりゝ其座を立去りかろう 願「假令お手討に相成る共 仲「何卒石山御所望の義を 信「ヤア一旦望みかゝりし石山顯如不得心とあるからい汝等歸つて顯如を始め寺中上下へ首を洗つて待つて居れどいひ聞かせよ 兩人「其所を何卒 信「達つて申さば命がないぞ 願「此上は如何にせん歸つた上にて 仲「二度の評議を 阿「成らう事をら穩便に事を計るが兩家のお爲 願「左様ムらば信長公 仲「最早お暇 信「エ、勝手に致せ 仲「ア是非もなき 兩人「次第じやなア「ト向ふへ這入る」 民「最早手切れと相成る上は備へのなき内押寄せなば戦はずして石山は君のお手に入るは必定イザ御前にい御出馬の御用意あつて然るべう存じ升る 信「言ふにや及ぶ用意せよ 皆々「畏つてムリ升る「ト阿圓信長の袖を捕へ」 阿「是は又君の御

短慮天下をしろしめす其最初より法師を相手に軍を遊ばすは詮なき事何卒其心を翻へされ石山の地御所望の義を思ひ止り遊ばす様偏にお願ひ申升る 信「ヤア我本願寺を恨むる事一朝一夕の事にあらず語り聞けん承はれ○我先年今川を亡し續て齋藤を攻るの刻み朝倉彼に助力をせし條奇ッ怪とや言はん元織田朝倉は不和にして遺恨を重ね何卒して多年の鬱憤を散せんと度々合戦に及ぶといへ共顯如上人朝倉の娘をして嫡子教如上人に娶合せ其縁に依り北國の門徒め朝倉義景に力を添へ合戦の妨けなす故一度も勝利を得ず此度足利將軍の命に依て上洛なし三好を亡ばす時こそ幸ひ石山本願寺を攻崩し顯如父子が首を見んと四國征伐を名として石山の地に一城を築かんと申やしは軍の名を借る我謀計時節到來致したりアラ嬉しや悦ばしやあア 阿「スリヤ本願寺を憎み給ふいさうした譯でムり升したか民「夫故身共が使者に立しも本願寺の様子をば探らん爲の君のお指圖 丹「何は然れ直様本願寺へ取かゝらは伊勢の國司北畠必す石山の後詰をなし味方を前後ら攻討に相違なし 雖左ある時には勇々しき大事先づ北畠より討取つて石山へ押寄せなば味方の勝利 皆々十分なるべし 信「誠に其意見予が心に叶へり 民「然らハ伊勢へ御出馬を 信「言ふにや及ぶ 阿「スリヤ我君様にはどうあつても 信「恨み重なる顯如親子の首引提て立歸らん急き人馬を繰り出せ 皆々「心得升した 阿「其所を何卒「ト頼るを信長中啓にて叩き拂ふのが木の頭」 信「

不禮者め「ト急度見得阿圖ハア、と泣落す皆々引張りの見得早舞にて拍子幕

序 切 石山本願寺評定の場

役 名

- | | |
|--------------|------------|
| 一杉 浦 民 部 太 夫 | 一粟 津 右 近 |
| 一楠七郎左衛門正具 | 一上原右衛門尉 |
| 後に三番の定専坊 | 一富島頼母 |
| 一簾 中 春 日 の 前 | 一松 井 外 記 |
| 一杉 浦 要 人 | 一七 里 河 内 守 |
| 一教 如 上 人 | 一庄屋藤左衛門 |
| 一簾 中 光 姫 | 一同 五 郎 兵 衛 |
| 一下間法橋頼廉 | 一門徒明手惣出 |
| 一同 少 進 仲 之 | 一侍 一 人 |
| 一今 井 權 七 | |

造物高足の二重蹴込み石垣真中に石段此上に檜皮葺の四足門御葉牡丹の紋付し紫の幕を張り上下筋扉都て石山本願寺大門の体幕の内より大部家女形惣出の人数思ひくゝの拵らへに

て鐵劔天秤棒六尺棒畑打棹等好みの得物を持ち時の聲を上げ寺の早鐘にて慕明く 五六、
 皆の衆何でも御本山に事が出来たに違はない野田村の者は皆愛へ寄れやい 豊作「下辻村
 は愛へ来いやい」 婆々「コレ娘押返されて踏殺されなよ」 春「私しや殺され早うか如来
 様の傍へ行たいわいなア 親仁「さうじや」何でも愛が御本山への御奉公何とマア有難い
 御宗旨じやないか 十助「何か御本山に事があるとして村々へお使を下され御門主様が御相談
 被成れたいとの事じや 八兵衛「イヤモウ何辨へもないわえ等迄御門下と思召され召寄せら
 れるも他力本願の有難さじや 三九郎「遅きはつては討が當らうぞや 皆々「サア」皆行け
 」「ト立願く五郎兵衛藤左衛門庄屋の形りにて門の内より出て来り」庄屋三人「コレ皆解ま
 らんか」 仙十「庄屋さんかムらしやつた静まれ」 皆々「イヤ静さらぬ」 五郎兵衛「是
 はしたり御本山から召されたは何ういふ譯か知らぬ共斯う大勢参つては齋料計りでもたま
 つた者じやないは 藤左衛門「先重立つた者計り御門主様の仰せを聞き若し人数でも御入用の
 時には急いで登山するがよい 庄三人「サア」皆引取つた」 作兵衛「イヤ何でもお召の
 様子を聞かねば 皆々「引取らぬ」皆本堂へ集れ」ト這入らうとするを庄屋二人支へ
 る早鐘にて返し

造物三間の常足塗框の上段見付御葉牡丹紋散らしの金襴上下跡へ下けて金襴橋掛り戸家口

共杉戸の見切り都て本願寺白書院の模様二重真中に教如上人青坊主着附襟立衣十五六歳の
 拵らへ水晶の數珠を持ち二疊臺の上に住居上の方に顯如上人の簾中春日の前下げ髪襦袢装
 下の方に教如上人の簾中光姫花梅振袖襦袢装にて住居平舞臺上の手に下間頼廉同仲之善附
 繼上下の拵らへ今井權七栗津右近上原右衛門尉富島頼母松井外記七里河内守着付麻上下の
 拵らへにて控へ居る靜なる合方にて道具納る 教如「家老下間を始め門徒の方々にも父上人
 の招きに應じ早速の登山祝着に存する 頼廉「誠に當宗門の一大事とは此時をこそ申べき
 今井「ソテ御門主顯如上人の 皆々「思召はな 春「去ればいの上人様の宣給ふには當寺は連
 如上人様開基の靈地なれば他所へ移さん事歎かはしく思へとも信長が所望をいなまが軍勢
 を差向けんどの使者への返答今にも當寺を攻るは必定左すれば開山親鸞上人の御苦勞も水
 の泡と消果てん我は只信長が望みに任せ宗門退轉せざる様再び使者を信長方へ差越させん
 どの則仰せ 光姬「父上人様を始めとし我夫々教如様のお身にも何うぞ恙のない様に計らふ
 てたもいのう 仲之「仰せ御尤もは候へ共拙者先達て信長が旅館へ立越へ見受る所おのれを
 高ふる不禮の我儘某が推量には當石山の地を所望計りにあるべからず 今井「何様信長は奸
 曲の大將にて今度足利義昭公を楯に挟み當宗門を破却せんとの下心 栗津「抑も」當寺は
 佛縁の靈地あるを信長が暴威に恐れ 上原「退去なし給はんとは餘りに本意なしと申べし信

長大軍を發するとも何か恐れのあるべきや 高島「既に以て加賀の富樫能登の畠山などを御門徒に攻伏せられ滅亡致し候はずや 松井「況んや此要害に立籠りなば 七里佛敵信長を亡ぼさん事掌の内に入り 皆々「左様でいふらぬか 頼「仰せの通り此上は信長の軍勢を引受け合戦の外はあるまじイザ上人へ 敵「ア、コレ下間其富樫畠山の滅亡こそ父の歎く所なり只合戦に及ばん事を父上人にはうたてく思ひ當評定の席へ出給はぬに夫をば又も申上げなば猶お心を惱まし給はん必らず共に父上へは 今「スリヤ頼如上人には 上原「アノ合戦の思召は 皆々「ムらぬとな 三「「サイのう「「ト涙を押へる上下の襖の内より幕明きの門徒残らず走り出て来り」 藤左衛門「お有難うムリ升るく廣大慈悲の御門主様へ是程御苦勞を掛け奉る 五郎兵衛「信長めは鬼か魔王か腹が立つわい」 婆々「お上人様のお心の休まる様にコレ皆の衆分別をして下されア、御勿体ない」 五六「何の分別もへちまも入つた事か門徒のこちらが一致して 皆々「サア皆京都へ討て登れ」「ト立願く向ふにて」 要人「ヤレ静まれよ門徒の方々一大事こそ出来せり」ト要人着附袴つまみ股立の袴らへにて走り出て来る」 誓「あなたは杉浦民部が弟要人ではないかいのう 光「一大事といふ心元ない様子を聞かしてたもいのう 聖「何れも御免下され」ト舞臺へ来り」 聖「某兄の指圖を蒙り信長伊勢路へ出張と承つて一昨夜密かに立越へ候所信長には伊勢の國司北畠を亡はさんと美濃尾張の軍勢五万

餘騎を引率なし國司の本城大河内の城へ押寄せ既に合戦最中の所御主人頼如上人より伊賀伊勢の門徒中へ檄文を下せしとあつて八千餘人昨夜信長の本陣へ夜討を仕掛け織田方には討るゝ者數知れず去るに依て織田信長當寺へ兵を差向けんづと北畠と和睦を整へ今合戦の用意最中此事お知らせ申さんと馳せ歸つてムリ升る 敵「スリヤ信長に北畠と和睦を調へ直様當寺へ押寄せんとぞ 誓「夫に付ても合点の行かぬは我夫々頼如上人様より 光「檄文を下せしとは 皆々「ハテ何者の仕業なるぞ」ト向ふよて」 楠「其罪人は八田の城主楠七郎左衛門尉正具夫へ參つて申譯の仕らん 皆々「ヤ、何と」ト向ふより楠七郎左衛門小手間半素袍高股立にて出て来る」 頼「兼て御高名は聞及ぶ八田の城主楠七郎左衛門殿とは御自分よな仲、何は扱置き正具殿 皆々「先々はへ 楠「然らば御免下され」ト舞臺へ来る」 敵「スリヤ檄文を傳へしは 誓「アノろもじの仕業で 三「「有りしよな 楠「如何にも上人の偽筆を以て御門下八千餘人を欺き織田の陣へ夜討なせしは當寺のお爲を存する故 皆々「何といはるゝ 楠「一通りお聞下され」某事は河内の判官正成が後裔なれ共民間に下り終に北畠の幕下に屬す然るに此度織田信長大河内を攻めらるゝは當宗門を破却なさんず下心我も一向宗門の信者なり信長を討取らば主君への忠節當寺の爲と手立を以て夜討を仕掛けしに城より討て出でもせず味方の夜討を見物なし剩さへ信長と和睦なしたる不甲斐なさ夫故返つて當寺の災ひ

を引出きたる七郎左衛門申譯には出家なし信長今も寄せ来らば粉骨齧身致さん心底何卒
 顯如上人へお目通りの義偏に頼む何れも方 願「スリヤ伊勢伊賀の門徒の蜂起は當寺の法敵
 信長を亡はす手立で 皆々「ありしよな 歎「何は然れ事爰に至る上は 善「善か悪かの評定も
 けふに約束る敵地の様子 光「若し事あらは一人でも味方のはしき折柄なれば 歎「父上人の
 御目通りへ要人案内して取らせよ 畏「畏つてムリ升る「ト向ふより寺侍一人走り出て来り「
 侍「ハッ申上する御家老杉浦民部様當石山の急變を聞き只今御歸國遊ばし升てムリ升る 畏「
 何兄上の 皆々「歸國とな 善「待設けたる民部太夫是へと言や 侍「ハッ「ト引返して這入る「
 三九郎「サア「皆の衆杉浦様がムつたどやい何でも下問の頼廉様が杉浦の民部様がムらい
 では何うやら力がない様ぢ 仙十「何でもかでも御本山の御難を救はにや成らぬのじや杉浦
 様のお下知に随ふたがよいぞや 皆々「チ、合点じや「 楠「先づ某は上人へ 畏「左様ムら
 ば正具殿 楠「何れ後刻 皆々「御意得るでムリ升せう「ト要人案内して七郎左衛門上手へ這
 入る向ふより民部太夫着附繼上下にて走り出て来り「民部「ハア、杉浦民部太夫只今歸山仕
 つてムリ升る 歎「ホ、ウ待兼し民部太夫近う「 民「ハ、ッ何れも御免下され「ト舞臺へ
 来る「 親「サア「民部様何うぞ信長の首切る様な分別をして下され 作兵衛「お宗門の爲
 なれば命も金も 皆々「入らぬのじや「 民「何れも當宗信者の方々重事を聞いて早速の御

登山祝着にムれども未だ評議も一決せぬよし先本堂へ引取り後しての沙汰をお待下され
 皆々「イヤ「御相談の次第に依ては助言を仕度い事もムるわいの 善「噂さん滅多に退か
 しやんすなへ 女形皆々「さうじやわいなア御評議を聞かぬ内は 大勢「引取らぬ「 藤左衛門「
 是はしたり御家老様のお詞じや 五郎兵衛「引取つた「「ト庄屋兩人皆々を押返へして上下
 へ這入る「 民「扱今度信長の難題下問氏を始めとして御門下の御心痛民部推察仕る某上人の
 御用に附き北國へ立越へ彼地に於て承り驚き入たる當宗の存亡「上人の御存意はな 願「
 去れば顯如上人には合戦の義を歎かせ給ひ 上原「當石山を信長へ渡し退去被成れん 皆々「
 思召 民「何様上人の慈悲心にては左様思召さるゝも御尤に候へども假令石山を與へる共
 是又合戦に及ぶべし 善「何信長が所望に任すも猶合戦に及ぶと 光「合点の行かぬそなた
 の詞 歎「何が故に左な申ぞ 民「某天眼通は得ざれども信長の心底能く存せり○抑信長當寺
 を攻亡ばさんと思ふ仔細元來織田朝倉は古き恨みあるが故數度の合戦止む時なし然るに當
 寺朝倉と因を結び光姫君を教如の君の篋中に娶り互に難を救ふべき誓紙の契約あるを以
 て加賀の門徒等朝倉に助力なせしが信長の當寺を憎むは一つ又二つには織田信長強きを憎
 み賢なるを忌み位高きを嫉む故當宗門の四海に弘まるを信長密かに是を嫉めり其上加賀の
 門徒勢強く當時北國七州の内其半は本願寺の所領なる故當寺の富貴繁昌を信長憎むの三つ

あり今足利家再興を名として上洛し三日が内に江州一國を切鎮め龍の池中を出るが如し此時に乗じて本願寺を切崩し日頃の鬱憤を散せんと叶ひ難き所望を言ひ掛け辞退なさは直に押寄せ退去なさは備へのなきを攻討ん信長が心謀兎にも角にも逃れ難き合戦に候へば當石山の要害に立籠り信長を亡ぼし給ふが宗門退轉せざるの良計御退去の義は然るへからず存じ候「ト光姫懷劍拔き掛け」光「さうじや」「ト自害を仕様とする」教「コリヤ光姫には何故生害 皆々爲し給ふぞ 光何故とは聞へぬお詞今信長が教如様父上人を惱ますも元は我父當寺と縁を結ひし故其自らが自害せば是にて縁も切れるの道理去すれば敵の怒りも散じ軍勢も差向けまじ夫じやに依て自らの 齊是はしたりうもじが自殺なせばとて今民部の詞では所詮信長當寺を安穩には建置くまじ 光スリヤ自らが命を捨てても 齊只此上は上人へ委細の譯を申上げ合戦用意の外あるまじ 兵「スリヤ我々が詞をば 頼上みよは信用在らせられ仲合戦の義を 皆々御決心とぞ 教ア是非もなき世の 齊教有様じやあア」「ト時の太鼓になり上手より要人出て來り」要人「只今打ちしは申の下刻合戦と御決定の上からは今宵にも佛敵信長夜討を掛けんも計られず 今井何様敵は馴れたる軍勢 粟津不意に寄せんも知るべからず 上原先防戦の用意には兵糧の手當が肝要 富島續で持口人數の手配り 上原櫓の備へ大手の逆茂木 七里第一番に武器の調達 頼是等は味方の大事の欠引 仲シテ杉浦

殿の 皆々御思案はな 兵「去れば人數は上人の檄文を以て招きなば諸國の門徒十萬は集るべし勿論武器兵糧に事は欠かねど敵は名に負ふ織田信長味方と烏合の集り勢是を指揮なす軍師なくては叶ふまじ此義に畏却仕る」「ト上手の内にて」楠「アイヤ其義は某か指圖仕らん」「ト七郎左衛門青坊主墨染の衣にて出て來る」要「貴殿は楠正具殿 富島以前に變る 皆々其姿は 齊どこやら我夫マ顯如様に 楠某の面体が 兵似たと云ふにはあらねども自然と備はる智識の相好シテ其軍師と仰せらるゝは 楠是も當宗信者の一人我先祖正成が智謀に劣らぬ奇代の名士此者を軍師と頼まば假令信長日本に唐天竺を一つになし一時に攻寄せ來る共拙き負は致すまじ 頼シテ其仁の 皆々何國の何者 楠紀州雜賀の住人鈴木飛驒守重幸殿 教誠に彼鈴木氏こそ常々父とも交り深く智謀に賢き仁と聞く 齊我夫マ上人召給はば元より信者の鈴木氏餘もや否みもなし給はめ 光片時も早う民部太夫能きに計らうてたもひのう 兵委細承知仕る某入魂の間柄承れば彼仁には當時同國藤白山又閑居なす由彼地へ立越へ重幸殿を同道致して立歸らん 要其お供には此要人仔細あつて同道したし偏にお願ひ申升る 兵上人より召れ給ふ軍師の迎ひ副使なくては叶ふまじ願ひに任せ其方を同道致して立越へん 齊然しながら民部が留守中若し敵方より 教光齊攻來らば 楠其義の某今日より上人のお弟子と成て三番の定専坊と御名迄下し置れし法師なれ共楠流の秘術を以

て軍の手始寄手の奴原一泡ふかして御覽に入れん 今井「我々とても宗門の爲に一命捧げし
 上からは粟津」命の限り根限り 上原「法敵織田の軍勢を富島」微塵になして不可思議の頼母
 尊き威徳を敵方へ 七里「見知らせくれるは今此時 仲之」心安かれ 皆々「民部殿 民」其勇ま
 しき各々のお詞承り跡々の義に氣遣ひなし 春「片時も早う 光」軍師を携へ 教「父上人に
 安堵させよ 民」委細畏り奉る 聖「左様ならば 民」聖「教如御親子 皆々」杉浦氏 三人「頼ての
 吉左右」ト教如春日光姫立上る民部肩衣の背を引くのが木の頭」民「お待被成れて下さり升
 せう」ト此仕組宜しく合方早鐘にて拍子幕

二幕目 紀為藤白山重幸閑居の場

- | | | |
|----|----------------|-----------------|
| 役名 | 一 下 男 權 四 郎 | 一 志 摩 四 郎 |
| | 一 鈴木 飛 驒 守 重 幸 | 一 河 島 水 之 助 |
| | 一 同 庄 司 重 倫 | 一 腰 元 お 仲 |
| | 一 杉 浦 民 部 太 夫 | 一 山 が つ 五 郎 藏 |
| | 一 三 番 の 定 専 坊 | 一 同 松 六 |
| | 一 重 幸 妹 茂 り | 一 二 接 の 門 徒 惣 出 |

一同 雪の江 竹本 連中

一杉 浦 要 人

建物常足の二重見附真中納戸口上下鼠壁上手半窓の機家下手落間大樹の榎の木是に白藤か
 らみ付き花盛りの模様此後ろ跡へ下けて木部家の横手敷疊上下岩山の出しのけ橋掛り岩窟
 の張物いつもの所竹の簀戸都て紀伊國藤白山鈴木飛驒守閑居の休幕の内より雪の江さら毛
 の島田紫石持の振袖にて糸を續ぎ居る上手の機家の内に茂り島田紫石持留袖の着附姉娘の
 拵らへにて手拭を冠り機を織る樵夫頃箴の音にて幕明く「ト橋掛りより五郎藏松六山
 がつの拵らへにて斧を腰に指し柴を背負ひ出て來り」兩人「ヤレ」草臥れたく「ト門口
 を明け」五郎藏「イヨウお娘達いつもながら能う精の出る事じやの 雪の江」チ、誰かと思へ
 ば此頃見へる木こりの衆マア這入つて休ましやんせいなア 松六「夫は廣大無邊のお詞何が
 外で休まうとて自由の足りぬ山中の一軒家 五郎「いつもの家例を外づさぬ様に一服香まし
 て貰ふかい」ト見廻しながら内へ這入る」五郎「ハア今日は旦那さんが見へぬが又奥に本で
 も見て居らるかかの 茂り「イエ兄さんは峯の藤を御見物にとて權四郎を連れて往たわいな
 ア 松「チ、さうかいの聞けばこちらの旦那さんも此紀州では由緒のある人さうなが兎角浮世
 に交るのが五月蠅と此山住居何と五郎藏世には色々な物好きがあつた者じやないかいやい

五郎「サイやい又お娘達も嫁入り盛りに相手もない山中に糸を繰つたり機を織つたりさして置くのは惜しい者じやないかいやい」松「チ、さう共く愛の内の暮しでは機を織つて其日の煙を立る様な人でもなし一体夫は 兩人「何にするのじやぞいの」ト茂り機を織りながら「茂り」サア兄さんの言ひ附けには晒し木綿が凡百反急に入るとのおつしや附け 雪「夫故夜の目も寐られぬ世話しなさうぞ勝手に茶々など上つて下さんせいなア 五郎「成程夫では人に構ふひまもあるまい然し白木綿百反とは大分な誂らへ物ハ、ア扱は石山の本願寺へ急に送る心じやの 兩人「そりや又何でないな 五郎「ハテ先頃織田信長といふ強い大将が石山の地を望んだを本願寺では聖徳太子の夢の告げにて建立した寺なれば退いては蓮如とやらへ濟まぬと意地を張り聞けば合戦にも成ると云ふ大騒ぎ 松「夫故家老の下間に杉浦が加賀能登越中を駆けすり廻つて兵糧を集るとの事所が今度彌々軍が始まるさうなが此紀州の雜賀と根來は元から門徒の多い所夫故大分本願寺のお味方に出るやつがあるさうな聞けば愛の旦那どんもゑらい門徒の堅まりさうなじやに依つて其木綿も軍用に違ひはない又軍が始つたら必ずこちらの旦那どんもお味方に行うがの 茂り「そりや知れた事いなア女子のわしらでも若し軍杯始つたら兵糧の煮焼のお世話又は陣幕旗の結び女子相應の御用を勤め若し流れ矢で死んだなら生如來の御門主様のお用ひに預かる嬉しさ 雪「本に姉さんのおつしやる通り早う死ねば未來では佛果を受ける有難さ願ふてもない事じやないなア 五郎「さう云ふ事ならおいら達も今から改宗してノウ松六 松「チ、石山のお味方と出掛けうがコレ姉のおむす」ト機家へ這入り茂りの手を捕り連れて來り五郎藏も雪の江の手を捕らへ」 兩人「何うじやいな」ト云ふを振り放し」 茂り「エ、モ氣味の悪い 雪「茂」何じやいなア 五郎「ハテ一向宗では同宗でなければ娶取れぬとやら 松「ろここで二人が先祖代々の宗旨を捨て改宗仕たもろもじへ心中 兩人「何うじやいな」ト奥よりお仲腰元の拵らへにて出て來り兩人を突退け」お仲「コレこちらの御寮人をさうするのじやいなア 兩人「ヤさう云ふ貴様は 仲「アイこちらの内の奉公人お仲じやが本にモウ毎日く愛な内を街道の茶店の様に思ふてからに其揚句が御寮人の袖袂引て大膽な畢竟女子の私ならこそよければ且那樣で有らうならお前方の首が飛ぶぞへ 兩人「ヤレ南無阿彌陀佛」 仲「チャお前方のお宗旨か 松「たつた今改宗をまた 兩人「門徒宗」 仲「御門徒宗とは頼母しい外の宗旨で有うから聞く事じやなければも一向宗とあるからは今日の所は許して上げる急度嗜んだがよいぞへ 丑郎「イヤモウ是に懲りよ道齋坊お慈悲深いお仲大日如來のお情けで 松「無事に濟んだはお有難い」 仲「是もお如來様のお蔭と思ふてとつと愛をいなしやんせいなア 兩人「ハイ参り升せう」 仲「翌からは寄せる事じやないぞへ 五郎「ハイ」 決して此後は参り升せぬ 松「

大方今におとしい来いと言ふであらう「ト捨臺詞にて門口へ出で顔を見合せ」兩人「何でも油断の 仲」どうしたとへ 兩人「イエ南無阿彌陀佛」仲「本に殊勝な方じやわいなお茶一つ上りんか 兩人「南無阿彌陀佛」仲「登も又お出でや 兩人「南無阿彌陀佛」仲「本にモウお有難いもえつと遊んで行かしやんせいなア 兩人「こいつも餘ッ程 仲」エ、 兩人「南無阿彌陀佛」仲「ト兩人思入あつて向ふへ這入る」仲「ア、お有難いモン御寮人様どうく参り升たわいなア 茂「コレお仲の様な者に構はぬがよいわいの 仲」でもお宗旨でムり升もの 雪「何のあれはてんどうじやわいの 仲」そんならお念佛でたましたのかエ、腹の立つ〇然しだまされてもお念佛さらお有難い事でムり升るわいなア 雪「夫はさうと姉上今のをお聞被成れ升たかへ 茂「さいの織田信長の難題にて何うやら軍の起る様子 雪「サア夫じやに依つて日外からお願ひ申て置た文早う上げて下さんせいなア 茂「サアわしも書うとは思ふて居れど是が兄上爺様の御得心の上ではなし若し杉浦民部殿聞入のない其時はわし迄迷惑せねばならぬマア時節を待ちやいのう 仲「イヤモンお姉上様日外京へお出での時計らす要人様にお目に懸りわのお方のおつしやるにはお姉上から表向き斯う言ふ譯じやとお頼み被成るれば民部様も弟御の事又御入魂の鈴木様との縁組なれば悦びこそすれお阿りは決してないとのお詞夫じやに依てツイさら」と書てお上げ被成升せいなア 茂「そんなら

今宵人知れず 雪「イエ」今宵とおつしやらすと 仲「善は急げの譬へもあればちやつと一筆今爰で 雪「姉様書て下さんせいなア 茂「そんならお仲料紙を持ちや 仲「ハイ畏り升てムり升る」ト硯箱と巻紙を添へて持ち来る茂り墨を摺り」茂「さうして何と書くのじやへ 雪「ハイアノ去年のお霜月御本山のお命請にツイ要人様と言かはしさうして其夜に 茂「是はしたり其様を事書れるかいのう 雪「イエ」大事ムんせぬわいなア 茂「ア、コリヤ迷惑な事じやわいのう」ト券を書に掛る向ふに民部太夫野袴先柄袋の掛りし大小要人脊割羽織袴大小兩人共切緒の草鞋旅形り供人二人一人は旅中鏡をかたげ一人は両掛をかたげ出て来り」民部「只今麓にて承ればだらく下りと申たのか 要人「左様にムり升る門に大樹の榎の木とあればアノ家でムり升せう 民「何様教へくれたる目印〇其方共には只今の茶屋にて待て居やれ 供二人「ハッ畏つてムり升る 民「何者が尋ぬる共本願寺の者と申ては相成らぬぞ 供二人「心得升てムり升る 要「然らば兄上 民「尋ねて見やれ」ト舞臺へ來たる供は引返して這入る」要「チト物が尋ね度う存じ升る 仲「ハイ」要「當藤白山にて鈴木重幸殿の閑居と何れでムるかお尋ね申たい 仲「ハイ其鈴木はこなたでムり升るがシテ何れから 要「兄上此家じやさうにムり升る 民「チ、左様の」トお仲折戸を明け」仲「チ、あなたは御家老様〇モシ御寮人様御本山の御家老様がお出被成れ升たわいなア 茂「何御家老とは下間様かいのう

仲「イエ杉浦様でムリ升るわいなア」茂「何杉浦様が」ト此内券を書仕舞ひ上書したる券を持ちながら雪の江も共に下りて来り」茂「本にあなたは杉浦様」雪「チ、要人様にも御一所に〇コレ仲翁様を呼んでおじや要人様じやわいのう」仲「アノ御察人様のお嬉しさうな顔わいなア」〇ドレお呼び申して参り升せうわいなア」ト奥へ這入る」茂「サア民部様どうぞこちらへ」民「然らば御免下され」ト此内兩人草鞋をぬぎ内へ這入る奥にて」庄司「何杉浦氏がわせられしとぞ御意得申さう」ト庄司白髪かつら着流し人品の良き親仁の拵らへにて門徒の肩衣を掛け珠敷をつまぐりながら出て来り」庄司「チ、是は杉浦氏能くこそお尋ね下された先づ御健勝にて庄司悦び申す」民「御老人にも御息災にて斯様を満足な義はムらぬ」庄司「イヤモウ早うあなたの傍へ参りたいと朝夕にお真向きを願へど今に娑婆の苦を受ける罪の深さ未來の程も如何あらんと夫計りが我等の苦勞シテ御門主にもお變りもムらぬかな」民「上人始め新門にも御安体にはまし升せ共〇弟夫なる品を」要「ハッ」ト懐中より文箱を取り出し民部に渡す」民「イヤ何庄司殿顯如上人より其元様へ御直筆の御書イヤお受取り下さり升せう」庄司「何上人より御狀よな」ト文箱の儘受取り」庄司「ハ、ア我等如き凡夫の者も門下の端なれんこそ上人よりの御書頂戴南無阿彌陀佛」〇お有難う」ト頂戴」庄司「コレ娘」ト此内雪の江今の券を民部に渡してくれと仕形でするを茂りは親の前では悪いと仕形にて争ひ聞へぬこ

なし」庄司「是はしたり娘」ト兩人心付き」兩人「ハイ何ぞ御用でムリ升るか」庄司「珍客の御入來に何をさよる」致して居る魚茶かりと差上げ升せぬかいやい」要「アイヤ必ずお掛ひ下さり升るな」雪「ツレ見やしやんせ掛ふなとおつしやるわいなア」庄司「ハテお客人が何と仰せ被成れう共」雪「でも大事なと言はしやんすもの」庄司「チ、其大事ないで思ひ出す聞けば織田より石山を所望に附て本山も大分混雜致すとの噂若し一大事にも及びはせぬかと實は手前案じ居りしが左様な事でもムつたかな」民「如何にも今日貴家を訪ひしは實は其義に付ての事〇然し御賢息には御在宅にムリ升るか」庄司「イヤ重幸には峯の藤が盛りとあつてツイ先刻登りしが最早今にも戻るでムらう」民「左様ムらは委細の義は重幸殿に御面會の上」庄司「何か様子は知らね共押て問ふも如何なもの其内我等は佛間にて上人よりの御音拜見」〇コレ茂りお客人を御案内」茂「リ」畏り升てムリ升る」民「然らば庄司殿」庄司「杉浦氏」茂「ドレ御案内」ト立かゝるを」雪「モン」ト袖を引き今の事と仕形するを茂り庄司を憚り」茂「何をしやるぞいのう」ト袖を振り切る此時以前の券を袂より落す茂り案内して民部庄司文箱を持ち奥へ這入る」雪「何をするとは何じやいなア願ふてもない此首尾に夫さへあなたのお目にかゝれば直に叶ふ私の興入ナア申し要人様能う来て下さり升たさア」要「サア今日参りしは大切な主君の御用夫に付き重幸殿の返事に依て是迄の馴染の縁で手前の頼みは雪の江殿

餘もやいやとは言ふまいの 雪「どういふ譯か知らね共夫トと思ふあなたのお頼み假令命を
 召るゝ共 要詞は背かね心じやの 雪「アイなアさうしてあなたのお頼みとは 要他聞を憚
 る一大事〇ムれ」ト雪の江の手を取りツイと奥へ這入る橋がよりより五郎藏松六透りを伺
 ひ出て來り」松六「兵藤太殿 五郎藏」コレ「ト押へ」 五郎藏「斯く姿を變へて當家の様子を伺ひ
 見るに何でも鈴木飛騨守には本願寺の味方なす下心に相違なし百反の木綿を織らすも是軍
 用に當るの心 松「殊に只今石山の家老杉浦民部とやら此家を尋ね來りしは油斷のならぬ是
 第一 五郎「先達て信長公より我々主人へ御内意には鈴木飛騨守重幸に之世に隠れなき武術
 の達人密に彼が心中を探り石山へ味方とあらは人知れず討て取れとの則嚴命 松「實否を見
 届け其義に極らば今日は過すまじ」ト向ふを見て」松「やあれへ來たるこ正しく重幸 五郎「
 忍んで様子を 松「心得申した」ト兩人刀の目釘を濡めし急度見得是を床の淨瑠璃に成る」
 淨瑠璃「爰に鈴木飛騨守重幸と云ふ者あり胸に孫吳の秘術を納め智勇王佐の才あれど更に高
 名富貴を願はず徳を隠せし藤白山卯月の空の期かに日和もしや足曳の山路の藤にあこが
 れて歸る道さへ歩らぬ牛の歩みの長さ日に眠り催す斗りあり」ト此内五郎藏は機家の内へ
 忍び松六は下手の敷疊へ小隠れする向ふより鈴木飛騨守肩入の着附浪人体にて牛に乗り本
 を見て居る下男權四郎白藤の花をかたげくはへ煙管を仕ながら牛の鼻綱を引て出て來り」

權四郎「モン旦那様藤白山とは言ひながら峯も谷も眞白と今を盛りの藤の見事さよい詠めで
 はムリ升せぬか〇是はしたり旦那様何時に替らぬ本ばつかり無筆の目からは何が其様に面
 白いかとんと譯が分り升せぬナ、藤でも御覽被成升せ 淨「と言ふに重幸打はゝ笑み 飛騨守「
 人として一つの癖有る者よ我に許せ敷島の道〇花よりも又 淨「一入と更に餘念となか
 りけり 權「ア、何かつしやつてもからには一つとして事が分らぬマアお内へお歸り被成升
 せ 淨「言ひつゝ戻る羽生の柴の戸」ト舞臺へ來り」 權「コレお仲ど旦那様がお戻り被成れ
 たぞや 淨「と言へども返事夏の日の日脚傾く折戸押開け」ト門口を明け」 權「ナ、内には誰
 も居ぬさうな 淨「と透り見廻す足元に落散る糸を手を取上げ」ト權四郎以前の糸を見て取
 り上げ」 權「コリヤ誰が落したののモン旦那様此様な物が落てムリ升した 淨「と渡せば重幸
 打見やり 飛「ム、コリヤ是妹茂りが手跡 淨「何事やらんと牛より下り立ち開く手紙の文に
 恟り 權「モン何の手紙でムリ升る 飛「イヤ反古に等しき手紙じやわい 淨「胸に納めて内に
 入り 飛「コリヤ權四郎無其方にも勞れしならん部家へ參つて休め」 權「へい」左様な
 れは暫くお暇を頂き升せうシテ此藤は 飛「ナ、夫は身が床への生花是へおこしやれ」ト藤
 の枝を受取る」 權「左様なら旦那様 飛「太義であつた 權「コレいつりも休まして遣り升
 せうか 淨「牛に馴れたる口笛に追ッ立て、ころ入りけり」ト權四郎牛を追ふて橋掛りへ

這入る奥より茂り出て來り」茂り「兄上お歸りでもり升るか 飛「チ、茂りか○今日本山より家老杉浦民部太夫わせられたであらうがな 茂り「エ、夫をどうして 飛「イヤ子細あつて承知致す 淨「詞を立聞く民部の太夫奥の一間を立出て」ト奥より民部出かり居て」民部「飛驒守殿一別以來先御勇健にて悦ばまう存じ升る 飛「誠に去年本山にて御意得し後は打絶へ申したシテ今日の御入來は 兵「去れば御歸宅を相待ちしは當宗門の一大事出來致しひに付貴殿の力を借らんと存し推參せし其子細は 飛「顯如上人信長が所望に應せざるを信長怒つて美濃尾張の軍勢を五万余騎引卒をし既に伊勢の北畠と和睦を調へ本願寺を攻討つ結構其儀に付ての入來でもらう 兵「誠に違はぬ貴殿の明察所詮信長と雌雄を決しひごねば宗門退轉に及ぶの大難依て合戦と一定は仕れど寄手は誰有う織田信長願はくは鈴木氏上人一世の御大事今此時にひへば御入寺あつて軍師となり士卒の指揮なし給はらば顯如御父子は申に及ばず海内數万の門徒の悦び此義御承引下さる様偏に願ひ奉る 淨「思入あつてぞ述べにける始終の様子を伺ふ問者スハ愛なりと息をつめ立聞く二人に重幸目を付け「ト此内機家の窓を明け五郎藏様子を伺ふ是と一所に絞疊を押分け松六様子を伺ふ飛驒守思はず見て思入是にて五郎藏は窓の障子を建切り松六は絞疊の内へ隠れる」 飛「アハ、何事かと思へば寐耳に水某當藤白山に幽居なし月雪花を翫ぶも世事の煩はしさを厭ふか故元より武道に暗き

某軍師などいは思ひも寄らぬ外を尋ねて御覽あれ 淨「と取つても付かぬ一言に心相違の杉浦民部妹も傍に聞兼て 茂り「モン兄上夫は御卑下と申もの武術の父上にも常に御賞美夫は兎も角も顯如様御一世の御難義と聞くからは仮令お役に立すともお味方申が門徒の奉公夫に今のお詞は何ぞお心に叶はぬ事でもり升るか 淨「言ふを重幸はつたとねめ付け 飛「ヤア女のさいに小差出た常に信する宗門の興廢にもかゝる大事を餘所に見捨る重幸に心なくて叶はるか 淨「常に變はりし重幸が荒氣の詞を聞咎め 兵「シテお心に叶はぬとは 飛「此品故に叶ひ申さぬ」ト以前のみを出す」 茂「ヤア夫は 淨「と取りにかゝるを取つて捨伏せ 飛「不義を取持つ憎い女め名當は則杉浦民部是なるはそこ元が取落したでもらうがな」ト民部合点の行かぬこなしにて開き見て悔りなし」 兵「ヤ、コリヤ是雪の江殿と弟要人が縁を導く頼み狀 飛「其送り人は此女めコリヤやい身不肖なれ共先祖は廷尉義經の功臣鈴木三郎重家が廿四代の後胤鈴木の庄司重倫が嫡男淨世を避けしも家を穢さす名を惜しむにあらずや其重幸を不義の女が由縁を餌にかびき出さんぞいはおのれもおのれ使者も使者見るも聞くも穢らはしいわい 淨「脇へ聞おせる詞とも知らぬ妹は泣出し 茂り「其お腹立はか道理ではムり升れと民部様に御存じない事 飛「ヤア覺へないとは餘人の罪を引受けて兄に不覺の名を取らすか聞く耳ないわい 淨「と立んとするを押止め 兵「アイヤ重幸殿憎むべさ

弟要人斯う云ふ事とも露存せず推参なせしは拙者が誤りお詫の仕様もムれ共何を申すも火急の大事何卒怒りを納められ一先御入寺下さる様偏に願ひ重幸殿舞と押ししての願ひに重幸居直り飛軍師を招く古今に例あり義に進んで不義に退く誠の武士の魂は彼太公が直なる釣針曲つた不義の女の餌ばでは滅多に釣られぬ飛驒守民スリヤ何うあつても茂リ兄上には飛人は一代名は末代死しての後の名こそ惜まけれ兩人エ、飛お使者御苦勞舞と言捨てこそ入りにけりト藤の花を持ち奥へ這入る舞様子立聞く妹と要人奥の一間を走出て要人兄上 雪の江姉様 要ひよんな事に 雪成り升したなア 舞とすがる二人を取て引付け 民茂アノ爰な不所存者めが 民おのれが不義のいたづら故召に應せぬ飛驒守殿此兄に迄面皮を飲す人でなし 茂斯う云ふ事に成らうとは知らぬ女子の淺はるいら亦を書いたは誤りなれと元の起りはいたづら故杉浦様の武士を捨て何とお詫が成らうぞいのう 民上人への申譯には 兩人覺悟せよ 舞刀の柄に手を掛けるを 雪ア、モン姉様 要兄上暫く 兩人此期に及んで未練な事を 要アイヤ今端の際に只一言申置さ度き子細ありお心静めてお聞下され○不義の科は今更にお詫のならぬ身の落度お手討は覺悟なれども定めて兄のお心では押て當家へ同道せしは忍ぶ戀路の導きと思召すでもムリ升せうが更々さうした譯でなく万一飛驒守殿招きに應せぬ其時には雪の江殿の縁に寄り某お勤め申さん

と思ひし事が仇となり却つて夫故今の仕義 雪責めて申譯に自害と覺悟はせしなれど兄上には不義者の縁に引れてお味方はならぬとのお詞聞けは道理に責められて我手で死ねぬ不義の科人 要責めては二人兄弟のお手にかゝつて死すなれば夫にて繋かる縁もなく重幸殿御入寺の障りもあるまじ 雪イヤ御成敗 兩人下さり升せう 舞と覺悟極めし有様を見るに民部は打領さ 民死を以て詫んどこまだしも健氣の其覺悟 茂切らでは濟まぬ此場の納り 民今此時に臨まずば仕様模様もあるべきなれど法の爲には替へ難し 茂汝は此身の業ながら兄の怒りに是非なくも 民切るは血筋の 茂兄弟 民妹脊の 兩人縁を此場で 舞と扱放したる白刃に恟りト奥より權四郎出かゝり様子を立聞き恟りして權四郎マア〜待て下さり升せ 茂誰かと思へは權四郎 民構ひ立して怪我致すな 舞怪我位は厭ひ升せぬ死でも御用に立つ事ならお身代りにわしを殺して下さり升せ○と言ふた所がお役には立升まい責めてお主のお身代りに叶はぬ迄も今一度旦那様が石山の味方とやらに參る様お勤め申が一つのお詫び 茂何詫びとはや 舞サア最前拾ふた其券を一字も讀めぬ悲しさには言とばお主のいたづらを旦那様へ訴人も全然其お詫には是が非でもお願ひ申て見升せう程に何うぞモシお二人様のお命助けて下さり升せ 民ム、其方が心底過分には思へども使者に立たる某が詞さへも道に寄り従ひ給はぬ飛驒守殿中々其方如きが詞をば用ゐ給ふ仁なら

す時刻移さば當寺の難義 茂所詮不義の成敗せねばお心解けぬお使者の迷惑 雲其故覺悟
 極めし我々 兩人「ちつとも早う 民茂言ふにや及ぶ 權サ、其心せきは御尤ではムり升れ
 と責めて今宵一夜の所を 民「ヤア一夜は愚か寸の間も猶豫ならざる危急の場所 權「そんな
 ら何うぞ夜中迄 民「エ、成らぬと申に 權責めて夫では初夜打迄モン是でムり升るわいの
 う 權「是で〜と手を合せ頼む心の眞實を見るに民部も哀れを催ふし 民「主の爲に盡す眞
 心無氣に致すも不便の至り如何にも初夜迄相待んが 茂「若し御得心のない時は 民「二度の
 願ひは叶はぬぞ 權「ハイ其時は是非ない事でムり升る 民「責めて夫迄二人には 茂「此程手
 織りし白木綿 雪「あの世へ曠の死装束 要「よしさい事にて兄上へ御苦勞掛けし身の終りも
 民「初夜打つ鐘が寂滅爲樂 權「サさうさせ升ては何うも此身が 要「然らば兄上 雪「姉上様
 權「ア苦勞の絶へぬト皆々顔を見合せ氣味合が道具替りの知らせ」皆々「浮世じやなアト
 此仕組宜しく道入りの唄にて返し

造物高足の二重丸木の廻り椽上下障子家体見附石摺の襖後に引ぬくと山又山の遠見に成る
 詠らへ前側に簾を下ろしあり此舞臺一面に岩崩の張物空より白藤花盛りの松の釣枝舞臺
 隅の盛りいつもの所切戸一セイ山嵐雨車にて道具納る 淨「塵埃より起つて嶺嶺たり萬木雲
 を貫ぬき峯白妙の衣を覆ふ藤白山左も幽閑たる暮の雨柴の庵のいふせくも其名を隠す重幸

が池中に潜む蛟龍の登天の時至れりと軍慮を練るこそ違まじきト簾を巻上ると内に飛驒
 守看流しにて見臺に向ひ兵曹を讀み居る傍らに燈臺を照らし花瓶に以前の白藤を活けてあ
 る」飛驒守「攻るに足らざる者は守るに餘りあり○誠に孫子の名言扱ころ愛じやてな 淨「軍
 慮に心傾きし夏の日も早暮過の雨を凌いで權四郎思案に胸も塞がりし庭の折戸の外面上り
 「ト橋掛りより權四郎番傘を指し出て來り」 權四郎「旦那様お目覺めでムり升るか 淨「言へ
 どこなたは一心不乱 飛「善く戦ふ者は人を致して人に致されず○ム、 淨「猶も餘念のなき
 体に權四郎迷惑がり 權「モン旦那様○是はしたり旦那様 淨「言ふに重幸尻目に見遣りト
 飛驒守心附しこなしにて」 飛「サ、權四郎何しに参つた 權「ハイわしが参り升たは 飛「石
 山へのお味方を勧めに來たな 權「サ、其様に何事も先をお悟りなさる、故委しうは申升せ
 ねど氣強いあなたのお心故お可愛想に雪の江様又相手方の若いのにも死ぬ所サ夫も元は最
 前拾ふた手紙をあなたへお渡し申さずば斯う云ふ事にもなるまい者ア、世に無筆程因果な
 者はムり升せぬ主人の御難義を訴人なしたる權四郎其私がどうマア見て居られ升せうどう
 ど妹御不便お宗旨大事と思召されて旦那様いんで上て下さり升せ道を守るも堅意地も時に
 寄るではムり升せぬか 淨「主を大事と一心に思ふ諫の詞をも重幸更に取合はず 飛「親人何
 等の御用にて是へお越し被成れしぞ 淨「言ふに胸り邊りさよろ〜 權「モン旦那様親旦那

にはドレ何所に 飛「イヤ壁聞は武家の法度御用あらはお遣入り被成れ 淨「千里を見抜く眼力に庄司重倫ついと入り」ト奥より庄司禎を明け出て来り」 庄司「ふ、左程萬事よ目の届く其方でありながら眼前日頃信心なす宗旨の興廢が目に見へぬか 飛「何とかつしやる 馬「何事も聞たさいやい〇斯る變に望めばこそ其方如き取るに足らざる者なれ共上人より某へ召れ給ふ御書到來ハ、ア勿体なや我十年若くんば駈付て信長めが首捨切てくれんすもの悲しい哉年老て邪魔にもなるもお役に立たぬ口惜しさ思ふに違ふかのれが所存假令妹に不埒ある共是等ハ些細な私事盡しても盡されぬ如來の御恩を報ずるは今此時妹が縁で行れすとも親の指圖は背かれまいがな 淨「理を盡したる爺親の詞の尻につくばいながら 眞「モン旦那様親御様さへあの通り其お詞を用ひねば道立てなざるあなたこそ道に缺けたる親不孝應とお返事下さり升せ 淨「言へども何の返答も差し俯向いて居る折しも二度の使の定事坊息を切て駈来り」ト向ふより定事坊鼠の着附墨衣旅僧の拵らへにて松明を燈し走り出で来り切戸の外にて」定事坊「民部殿には何れにある火急に迫る一大事に付顯如上人の命を蒙り三番の定事坊二度の使者に來たつたり御面會」 淨「呼はる詞に重幸親子中に取分け權四郎肝を貫ぬく心の轉動一間の内には二人の兄弟最期待間の聲に驚き」ト上下家体の障子を引抜くと上手の内に要人南無阿彌陀佛と書たる白襦袢の肌抜よて經机に向ひ經卷を開き臨終正

念の回向のこなし後ろに民部太夫下緒の襷を掛け抜刀を持ち立身下手の家体には雪の江摸様の着附に着替へ南無阿彌陀佛と書たる白襦袢にて經机に向ひ經卷を開き回向のこなし後ろに茂り摸様の着附襷がけにて抜刀を持ち立ちかゝり居る」 民部「何上人より二度の使に定事坊殿來たられしとぞ仔細あつて重幸殿には召に應じ給はぬがシテ」 様子は如何でムる 淨「高らかに呼はれはこなたは猶も胸轟き定「スリヤ重幸殿にハ本山の大事見捨て給ふとな火急に迫りし敵の勢ひ民部殿お聞下され〇貴殿昨夕發足されし間もなく敵には三好征伐の爲と偽り野田福島を始めとして敵ならざる所もなく十重廿重に石山を取囲んだる敵の堅陣上人殆んど歎かせ給ひ味方を指揮なと軍師もなく敵の爲に當山も微塵になるは眼の當り我故多くの門徒等を刃に殺すも不便の至り顯如死なば信長も怒りを納めて囲みを解かんと既に御自害遊はすを押しめて參つて見れば軍師と頼む飛驒守殿承引なきとは當宗門の滅亡も今明日に迫りしか 淨「是非もなき次第やと天を仰ぎ地に轉び悲歎涙ぞ道理なる人々も心を尽し 庄「スリヤ信長には早石山を囲みしとな 眞「また其上にお上人にも御生害との今のお詞 茂「モウ延ばされぬ御本山の御急難 兵「上人に凶事あらば猶々罪を重ぬる道理 眞「仰せにや及ぶべき 雪「早う殺して 兩人「下さり升せ 眞「と言ふ聲洩れ聞く權四郎 眞「ア、モン待つたお約束は初夜打つ迄 兵「茂「夫じやと申て 眞「ハテマアお待下さり升せ〇モン旦那様

お前様のお心一つで 庄「勿体なや親鸞上人御苦勞被成れし宗門と共に亡ぶる顯如上人 權
 お二方に凶事あつては生て居られぬ權四郎 庄「上人への言譯に親も殺し 權「家來も殺し 庄
 道が立つと思ふかいやい 權「怒りつ泣つ様々に口説立れど飛驒守いつかな心變せぬ面色
 飛「ヤア假令如何程申共道に背きし女が縁にて重幸頼まれ申ては宗師親鸞上人への御奉公
 に相成らぬ道を立つるも義に背くも兎角世界は壁に耳〇イヤサ障子一重の其内にも又外面
 にも聞く者あらん承はれ我顯如上人の招に應せぬ心底は 權「と以前の白藤手に取上げ 飛「
 親人御判断下されい 權「と指出せば 庄「何此藤を判断せよとは 定「藤は即本願寺の紋所
 權「白さは源氏の檀那様 庄「其白藤に籠る心は 聖「味方の藤の根を断ちて 聖「枯らす心か但
 し又 茂「若木の花の妹や 兵「弟要人をむざく」と 權「生木を切て 皆々「散らす所存か 飛「
 生花の浮世の水に繋がれて 皆々「エ、 飛「根を断ちながら枝も凋れず 兵「要「スリヤ不義者
 の 茂「雪「根を断つ時に 權「御本山の枝も凋れぬ 庄「心なるか 飛「サ其所が判談致してか
 見やれ 權「と言捨て奥へ入相より早一時の初夜の鐘「ト飛驒守奥へ這入る本釣鐘になり」
 權「ヤ、ありやモウ初夜の 茂「今こそ謎の解けたる雪の江 兵「浮世の水に繋がれては 兵「茂「
 本寺の大事 聖「要「南無阿彌陀佛 兵「茂「エイ 權「とばつたり響く太刀音は胸に早鐘權四郎
 權「ヤ、コロヤか二人様には 權「ハッ」と胸り氣も轉動始終の様子定專坊聞くと均しく内に入

り 定「荒壇聞たる今の様子扱は息女要人殿にも非業の最期を遂げられしよな 茂「夫と云ふ
 も不義者の縁に依ては石山へお味方せぬとて氣強い兄上 兵「一つは不義の成敗なれど重幸
 殿の入寺を勤むる言は、健氣な二人が最期 茂「不便な事を仕升たわいなア 權「わつと計り
 に泣出す歎きは同じ腰元お仲奥の間を走り出て「ト奥よりお仲合口を持ち走出て來り」
 兵「仲「お二人様の罪科の元は此身の仲立ち故申譯にはサ、さうじや 權「と拔放したる合口も
 ぎ取り 權「イヤこなさんはどうあらうと不義の訴人は權四郎わしから先へ「ト胸へ突立て
 様とするを」 庄「ヤレ待てお仲權四郎今其方共が死せばとて娘の罪が消へると思ふか 權「仲
 夫じやと申て 庄「主の詞を背きおるか 權「二人をはつたと何付け 庄「夫に付ても憎むへさ
 と粹重幸親の詞も用ひずして妹を殺し剩へ本寺の危急を見捨てる獄卒 定「夫も存あつての
 義か今かけられし藤の謎 兵「浮世の水に繋がれて 茂「根を断ちながら凋れずとは 仲「餘も
 犬死には被成れ升まい 權「とは言ひながら此身故 庄「不便の者の 皆々「有様じやあア 權「
 泣ぬ顔せし重倫も堪らへ兼たる恩愛の歎きは同じ民部大夫隠せど涙ハラ／＼と岩にせかる
 谷川の雨に水増す計りなり斯る所へ以前の問者小柴の蔭より飛て出で「ト上下より五郎
 藏松六り、敷拵らへにて出て來り」 五郎藏「ヤア聞た／＼親も親なり兄弟迄 松六「重幸に味
 方させんず馬鹿者め等兼て伏せ置く人数を以てイヤ皆殺しに 四人「致してくれん 權「行を

遣らじと支へる民部法師ながらも定専坊腕に覺への羽がへじめ 兵「扱ころ伺ふ 定」問者の
 曲者 兩人「何を」ト行うとをるを上下にて 與四郎水助「エイ」ト矢聲してさしがねの矢兩
 人の胸板に立つ 兵「ヤ、何處よりかは遠矢を以つて 兵」射留めし主は 定「兵」何者なるぞ
 與四郎「ホ、ウ其矢の主は鈴木の一族志摩の與四郎 水之助」河島水之助是にあり「トとんちや
 んッ、カケになり上手の家体より志摩與四郎下手の家体より河島水之助兩人共南無阿彌陀
 佛と書たる白木綿の後ろ鉢巻鎧陣立の拵らへにて弓を持ち出て来る」皆々「ヤ、此体は 與四
 郎」我々一族の因みに依て重幸殿の招きに應じ 水之助「石山のお味方に參らんと兼て約せし
 時日を違へす今宵密かに參て見れば 與」思ひ設けぬ此場の有様射て取りしは 兩人「言とは
 血祭り 樽」スッヤ且那樣には兼てよりお味方被成るゝお心なりしか 兵「夫に何故 皆々」最
 前迄の 淨「と訝る後ろに聲あつて」ト奥にて 飛「ホ、ウ其子細飛驒守夫へ參つて演舌致さ
 ん 淨」一間の襖押開けば以前の姿引替へて時も卯月の卯の花威しさつくと着なせし出立は
 實に石山の元帥と其威備はり見へよける「ト襖を引抜き後ろ遠見になり飛驒守鎧陣立の拵
 らへにて采配を持ち左右に鎧武者四人一人は飛驒守の兜を持ち出て來り飛驒守二重真中の
 陣床机に掛り」 飛「親人始め何れもに今ぞ明かす重幸が所存の程を篤くと聞れよ○我先頃
 より天文を考へ疾より知つたる本寺の大變一番にお味方せんと一門一家を相語らひ妹二人

に申附け織らせ置たる白布は軍用に充つるの心待設けし飛驒守使者の詞を背くべき謂れば
 更にあらざれ共我を伺ふ敵の細作未だ一族着到せざるに敵の伏勢起らんを察し最前の如く
 申せしは問者に油斷をさせんが爲去ればこそかけたる謎の二人が露の命をば繋ぐ浮世の水
 とは知らず我故花を散らせし不便さ許るしてくれよ二人の者 淨「流石に猛き武士も悲歎の
 涙ぞ道理なる人々安堵の思ひをなし 權「ろんからあきたのお心は 茂」敵を謀る其爲の 仲
 僞り事でムリ升したか 兵「さう云ふ事共露知らず 定」健氣な覺悟が今となつては 茂「不便
 や仇に死にやつたのう 淨」歎く娘を父はねめ附け 兵「ヤア心の内は宗門のお爲を存じ
 て死したる兩人其功德にて極樂往生泣な悦べ此親は浦山しう思ふわい 與」仰せの如く宗門
 のお爲に死せしは果報者 水「我々戰死は身の本願 權」此上私はお詫びの爲責めてお寺の御
 用に立ち夫で死たい心の願ひお供にお連れ被成れて下さり升せ 淨「願へば重幸頭を打振り
 飛」其方が願ひ神妙なれ共汝一人死せばとて負ける戦ひ勝にもあらず此義は決して相成ら
 ぬぞ 權「夫ではどうも二人様へ 飛」其訴人せし落度には只今より暇をくれる 權「スッヤ私
 めはお暇とな 飛」當家にあらば主人の爲に死兼まじき汝が誠心其方を憎むにあらす只不便
 さの彌増る故必らず恨みと思ふなよ 權「其お情は身に取り升て有難うはムリ升れと責めて
 軍のお供なり共 飛」達てと申さば勘當なるぞ 權「ア、モンお暇は出升ともどうぞ主從三世

の御縁は 飛「夫を思はば身が詞を 權」ハイ致し方がムリ升せぬわい 淨「と濕める詞を民部
 勵まし 兵」如何に軍師飛驒守殿敵石山を囲むとあれば 皆々「イヤ御出陣 淨」と勸れは重幸莞
 爾と打笑ひ 飛「何サ」 飯合敵勢困むとも我に施す一計あり 兵「シテ又汝が計畧とは 飛」去
 れは此頃續く霖雨信長が本陣は天滿の森 淨「彼所は地形窪さが故川々の水溢れ出し落込む
 難義に敵の軍兵士俵堤の普請最中 飛」我手の者を人夫に仕立爰に十人彼所に五人 淨「惣計
 積つて二百人手立を授けて遣はしたれば敵攻めぬ内此方より堤を切て切崩し 飛」水に溺ら
 す我計畧志摩河島にも合圖の知らせを必ず相違召さるゝな 淨「軍師の詞に志摩與四郎 與」
 仰せにや及ぶへき織田の陣々洪水に驚き騒ぐ虚を伺ひ 淨「二十餘艘の兵船を八方へ押廻は
 し関を作つて鐵砲放ちうるたへ廻る織田勢を切立討立散々に駆惱まさん事手裏にあり 水」
 其時我は陸地に備へ関を合して五百餘騎 淨「爰の蘆原彼所の森所々方々より打て出てなば
 敵は闇夜の事なれば陸には同士討ち溺れ死惣軍一度に渦巻く水の藻屑となすは瞬く内 飛」
 御安堵あれや何れも方 淨「勇み立たる元帥の詞に父は小躍りなし 兵」通れ勇々敷奇兵の手
 配り 兵「其計畧のある上は 定」必定敵は皆殺し 皆々「イヤ御出陣 飛」馬引け「ト橋掛りに
 て」大勢「ハア、 淨」ハット答へて引出と馬の足並みたうくと隊伍乱さず繰出す旗は不可
 思議光如來翻翻として山風にひるがへつたる有様は勇ましくも又潔きよし軍師馬に打跨が

り「ト此内橋掛りより惣出の人数皆南無阿彌陀佛と誓たる白木棉の後ろ鉢巻鎧武者百姓打
 交り思ひくの陣立一揆の拵らへ簀笠を冠り竹鎗鋤鉞鎗長刀鉄砲を持ち南無不可思議光如
 來と記したる旗を押立て飾り馬を引て出る飛驒守此馬に乗り」 飛「左様ムらば親人様 兵」
 随分無事で宗門の 茂「お爲にお手柄高名を 權」待つ甲斐もなき此身のお暇 定「夫も味方勝
 利の後は 兵」又再會に引替へて 伸「是が別れのお二人様 與」アイヤ目出度軍の門出に 水」
 歎きは不吉 飛「去らば 皆々」お去らば 淨「誓ひも堅き石山へ法を正して出で、行く」ト此
 内先手の人数旗を先に立て花道に行く次に飛驒守皆々花道より下手へ棹に並ぶ舞臺は民部
 茂り要人と雪の江の切首を取り上げ皆々愁ひのこかし此仕組段切にて幕「ト幕引附ると飛
 驒守采配を振り先手より順に向ふへ這入る跡より志摩河島向へ這入る

三幕目

石山本願寺惣攻の場
 天王寺織田本陣の場
 平野大念佛寺の場
 同織田信長危難の場

役名

- 一 鈴木飛驒守重幸 一役 僧 元昌坊
- 一 織田信長 一僧 淨念坊

四十六

一森	三左衛門	實は上原左右衛門尉
一顯	如上人	一同 永信坊
一志	摩與四郎	實は富島頼母
一河	島水之助	一庄屋 藤左衛門
一栗	津右近	一同 五郎兵衛
一正	覺寺貞春	一嶼 於松
一善	念寺清壽	一同 於倉
一役	僧教信坊	一同 於才
一同	信月坊	一軍 勢惣出
一同	了圓坊	竹本連中

遺物平舞臺一面の柵矢來御葉牡丹の幕張り上の方繩からげの木戸口能き所に石の角井戸石山城内の体於松於倉於才百姓囀の拵らへにて襦をかけ於松は盥にて洗濯ををし於倉は樽にて兵糧の米をかした於才は井戸の水を汲み上げて居る追分節の頃にて幕明く 於松「コレ於倉さん於才さん此間の勝軍で賑やかな事じやないかいな 於倉「サイなア於倉さんは大津に出て居たけ追分節は味いものじやないな 於才「夫にしても敵方ではけふ此石山を惣攻に

するとやら 松「夫故わしの所の宿六は鈴木孫市様の下知に随ひ難波の砦へ往たわいなア
 才「併し水はどうじやへ 倉「アイ愛へ下さんせ「トお才水を入れてやる橋掛りより庄屋藤左衛門五郎兵衛輕珍するめ鎧火事羽織にて帳面を腰に下げ出て來り」 藤左衛門「皆よう精の出る事じやの 松「あなたは野田のお庄屋藤左衛門様 倉「下辻のお庄屋様も御一所でムリ升たか 五郎兵衛「サアけふは敵から惣攻といふ事大手の兵糧はよいもの 才「アイ夫は今皆焚ており升わいなア 藤「よし／＼またが於倉の所の文兵衛は此間の春日井堤の軍に死んだじやないかいやい 倉「サア此間の軍には敵の討死が六百餘人又此石山方では二百餘人なれど其中へこちらの人が數に入つたは仕合せ者何が其死骸をば此二の丸へお埋め被成れて生如來の顯如様が念頃にお吊ひ下されたはお有難い事じやないかいなア 松「夫に引替へこちらの所の宿六は何たる因果者じやいら今に死なす何でもけふの合戦には一番に討死して御門主様のお吊ひに預からねば此お宗門に生れた甲斐がないといふて居たれば今に死んで戻らうぞいなア 才「本よわしらも流れ玉でも當つて死んだらお上人のお念佛で極樂往生が出来るもの藤「何とマアお有難い事じやないかい顯如様の おつしやるには織田信長と遺恨の有るでなし此石山を退き度くなさより起つた合戦餘り手強い軍をして味方は素より敵の者でも人を多く殺しては御門主の罪遁れすと夫ばつかりのお歎きじや 女三人「お有難うムリ升南無阿彌

陀佛く、五郎兵衛「上人様のお慈悲の程は敵の者さへ救ひたいとの御心願夫故軍師飛驒守殿も殺生さへ厭はずは皆殺しにする謀事はあんばいなど有るけれど何分お上人様の仰せ故只敵の肝をひしいで押退ぞくる御工夫の合戦故に死人がふいといふもの、所がけふの合戦は敵も度びく、の敗軍故氣早の信長は何でも石山を攻潰さねばと大腹立夫故軍師の鈴木殿にも目差す敵と信長一人何でもけふの軍には信長を討取らんと今御殿では御評定最中必ずけふの軍には佛敵の首が見らるゝ皆悦んだがよいわい、わい、女三人「そりやマア嬉しい事じやわいなア」「ト上手より正覺寺善念寺坊主聚墨衣の拵らへにて數珠を持ち泣きながら出て来る」「五郎」チ、正覺寺様善念寺様何を泣いてムらつしやり升、正覺寺「是が泣かずに、兩人「居られうかいの、善念寺」皆の衆聞て下され敵はいつ迄も長陣張て兵糧責にせんとこの備へ夫に附て軍師には僧の内上人のお身代りを大手の櫓よ上げてかうくせよとの謀事、正「是は敵の鉄砲玉が来て一命落すかも知れぬ役目何者か上人のお爲とあらば命をば惜しむ者のあるべきぞ、善「五百餘人の僧は我劣らじと願ひし所アノ三番の定専坊が何所やら願如上人様に似た佛とて去てやられ鼻の明いた五百餘人皆泣て居るわいの、藤「夫では上人様の、皆々「お身代りを、正「夫も軍師の謀事今にも敵が寄せるで有う皆持口へ行つしやれ、五郎「兵糧の差圖をせさ成るまい、松「是もお如來様への御奉公、オ、倉「ドレ手傳ふわいなア、正、善「そんなら

皆の衆、藤、五郎「お二人様、女三人「サア行かうわいなア」「ト庄屋二人先に於松は盥と洗濯物を持ち於才於倉は天秤棒にて米をかしたる櫓を荷ひ上手へ這入る正覺寺善念寺は橋掛りへ這入る是を床の淨るりに成る」「淨るり」行空の頃は天正四年五月初旬寄せ手の大將織田信長數度の戦ひ勝利なく忠臣勇士を多く討たれ無念の怒り天を突き本願寺を攻亡ばし恨みを劔下に晴らさんと數万の大軍野山に滿ち一度に鯨波を上げたるは有無存亡の合戦も此一擧とぞ見へにける」「ト知らせに附前側の道具を引て取る返し

造物真中に二間の櫓御葉牡丹の紋附たる紫の幕を打廻し舞臺前一面霞手摺を二重に置き後る一面に旗指物の翻へりし石山内廊の城の遠見都て本願寺大手櫓の体とんちやんにて道具納る、善「先陣の大將森三左衛門士卒引具し馳來り敵の様子を急度伺ひ」「ト向ふより森三左衛門鎧大將分の拵らへにて采配を持ち惣出の士卒鉄砲を持ち付添ひ出て来る」「三左衛門「いかに者共味方鯨波を上たるに城中静まり狭間を伏せしは大軍に恐れをなし鉄砲を防ぐと覺へたり此間に柵を引倒し早城中へ乗入れよ、善「と采配揚げて打振つたり折柄櫓に聲あつて」「ト櫓の幕の内にて」「敵信坊「ヤレ待たれよ寄せ手の大將願如上人一言申給ふべき事あつて信月坊「當櫓に出給へり、四人「暫しく、善「と呼ばれば、三「ヤ何と」「ト急度思入れ櫓の幕を絞りとると内に定専坊緋の襪立衣七條の袈裟をかけ二疊臺の上に立身前に經卷を乗せし經

机直しあり左右に教信坊了圓坊信月坊元昌坊墨衣役僧の拵らへにて珠數を持ち立身」三「ス
 リヤ御坊が當山の主顯如上人とな 皆々「イデ一討に」ト皆々鉄砲を向ける」三「ヤレ待て者
 共一言申へきとあるに聞かざらんは法にあらす 淨「櫓に向つて大音あげ 三「我こそ先軍の
 大將森三左衛門といへる者イザ某が承はらん 淨「とありければ上人天地四方を拜し御座に
 直れば寄せ手の士卒穩順柔和のお姿に我を忘れて大地に伏し敬ひ尊ひ有様は殊勝に見へて
 頼母し、顯如仰せ出さるゝは」ト三左衛門は花道附際にて床机に懸る士卒は花道に居並ぶ
 定尊「抑信長當山には如何成る意趣の是ありて元龜の始めより今天正四年に至り凡七ヶ年が
 其間軍馬を差向け攻め給ふぞ我等僧の身にあれば國法を犯し罪を蒙るべき筋もなし又宗門
 に於ては祖師親鸞上人弘め給ひしより既に三百有餘年將軍といへ共是を敬ひ尊み給ふに信
 長一人憎み給ふは先年當石山の御所望に應せざる故成るか此儀は其節申せし通り佛意に叶
 ひし靈場なればひたすら御免を蒙りたし 淨「物和かに述べ給へば三左衛門答へて曰く 三「
 コハ上人の仰せとも覺へず當石山を所望なせしは則都の上命によつて天下國家靜謐の爲其
 下知に隨はざるは上意に背くに同じきのみか逆賊三好を討の刻み天滿の陣を水に溺らせ多
 く軍勢を損なひしは是出家たる所爲にあらず非義非道の振舞ならずや 定「何様我等法師の
 身にて數度の防戦是只信仰の門徒等が若しや法滅にも及ばんかとの歎きよよつての狼藉我

出家の身として諸人の死亡を見聞くに忍びず哀れ願はくは信長殿償りをやめられ當山所望
 のお心を翻へされ軍馬を納めて御歸國あらば諸人の助かる大將の仁慈夫共外にお恨みあつ
 て是非亡ぼさるべき御所存ならば速に我一命をたちお償りを晴らさるべし我釋門の徒と成
 りて多くの人々を修羅の火宅に落入らしむる事歎きても餘りあり我心底を信長殿へ大將執
 達致されよ○南無阿彌陀佛 僧四人「南無彌陀阿佛 淨「異口同音に念佛し覺悟の体に寄せ手
 の門徒櫓を拜して泣出し」ト士卒の内六七人泣出し」○「ア、勿体なや上人へ敵對なせし我
 々迄も △「助け給はんどの御慈悲心 □「斯かる尊き生如來の ×「御身を惱まし刃を揮つて
 ◎「打迎ひし我々は○○如何に主命なればとて ●「五逆の罪も恐ろしや ○「何を隠さう我々
 は皆お宗旨で 七人「ムリ升る 淨「勿体なやと弓鉄砲大地に投げ捨て伏し拜みくくして泣にけ
 る中に他宗の者あつて ①「ヤア愚人を惑はす腥坊主め今其身の難義に臨んで ②「諸人の苦
 みしを救ふなんぞ愚痴を欺く辨舌にて ③「主君を誑さんとは憎つくい坊主めイデ 三人「
 我々が」ト鉄砲を向ける」三「ヤレ待て者共身に替へ諸人を救はんとは出家の慈悲心左もあ
 りなん 淨「と又も櫓に打向ひ 三「如何に顯如上人主人信長此度は勝利を得るまで五年十年
 に及ぶとも退くまじとの君の立腹某申なだむる共一應にては困みを解くまじお痛はしくは
 候得共御一命を三左衛門に賜はらず候や左すれば君の怒りも静まり即時に軍勢引揚げ申さ

三「左も氣の毒氣に言入るれば上人御目を開かせ給ひ 定「元より命は惜まぬ顯如よきに
 討らひ給はれかし 了四「ネヲヤ上人には 四「諸人の爲に 定「如何にも 淨「仰せの内に御
 袖を顔に押當て給ひしは痛はしくも又哀れなり三左衛門も涙を催し 三「討ち奉るは本意な
 らねど主命なれば是非に及ばずお覺悟あれや顯如上人 僧四「せめて此世のお別れに 定「名
 残りの念佛さうじやく 淨「いひつゝ蓮如肉筆の御書を押開き「ト定專坊經机に乗せたる
 經卷を開き門徒宗のおみを讀上る事あつて 定「かるが故に念佛往生とは申なり穴賢く
 七人「お有難うムり升るく 三「ソレ者共 〇「いうにも坊主が望みに任せ 三人「イデ一と討
 に 淨「筒先向ければ立塞り 〇「ヤア成らぬく斯程尊き生如來を討奉らんとは五逆の罪人
 △「滅多には 七人「討たさぬく 淨「信心肝に銘じ、門徒我を忘れて打かれば心得たりと
 他宗の面々打つはつゝの同士討に先陣乱れ二陣三陣簇本勢になだれをなし本陣迄も崩れし
 は只事成らずと見へにけり「ト皆々鉄砲にても打合ひ同士討をして向ふへ這入るとぞんち
 やんを打込み所々にて鯨波の聲を上げる 淨「三左衛門打見やり 三「ハテ心得ぬ先陣の同
 士討にて惣軍一度に崩れ立しは何とも以て訝のし、 淨「ためらふ折柄定專坊仕すましたり
 とつゝ立上り小手をかざして遙に見やり 定「見やられよ方々信長が備へたる天王寺の本陣
 迄惣崩れに成つたるは伏勢相圖をたがへずして一時に發せしと覺へたり 淨「と聞くに驚く

三左衛門 三「ヤ、又もや敵の謀計に落入りしよな 定「ヤア愚なり三左衛門先年信長北畠を
 攻るの刻み夜討を仕懸し在俗の名の楠七郎左衛門正具とは我事あり今日汝を欺きしは軍師
 鈴木飛騨守殿の差圖にて夜に入る迄合戦を引延ばさんが爲斗り今宵こそ信長が首を見ん事
 疑ひなし 淨「いふに可成齒がみをなし 三「よしや上人にあらず共一旦約せま汝が首やはか
 取り得て置くべきか 定「ヤア我首よりも信長が首引ッ提げて降參せよ 三「何を小癩な 定「
 ソレ何れも 四人「心得升た「ト四人の僧衣の肩をぬぐと下に小手胸當荒繩の禪法師武者の
 拵らへにて鐵炮をとり筒先を向け「元昌「降參せずば 四人「火蓋を切らうや 皆々「サアく
 く 三「モウ此上は死物狂ひイデ城内に乗入つて 四人「何を「ト向ふより小具足に簑笠を
 着たる門徒の百姓四人竹鎗を持ち出て來り三左衛門右四人を相手に立廻りながら向ふへ這
 入る「定「ハテ心地よき 四人「有様じやなア 淨「敵地を見下し「ト向ふを見込みし見得にて
 此前へ松並木の道具幕を冠せる直にぞんちやん大太鼓入りのあばれになり向ふより以前の
 士卒同士討を仕ながら出ておかしみの立廻りあつてト「上手へ這入る跡ぞんちやんにて道
 具出來次第道具幕を切て落を返し

遺物平舞臺一面に瓜の内に唐花の紋の幕張り空より松の釣枝火入りの月を引出し所々に楯
 の板をどひつくり返し都て崩れし信長本陣の模様黒蓋を下ろし爰に信長前金物の後ろ鉢巻

緋威の鎧大口をこいたる大將の拵らへにて采配を持ち息込み居ると三左衛門止めて居ると
 んちやんにて道具納る 信長「ヤア止めな三左衛門僅か坊主の楯籠る石山を取るあたはず敵
 の謀計に落入つて味方の敗走早八方を取圍まるゝ上からは名もなき土民の其の爲に最期を
 遂げんな口惜し、我自ら出て花々數討死なさん 三「エハ物に狂はせ給ふか假令敵勢圍
 ひども某斯くて有るからは切抜ない易し一先當地を落させ給へ 信「よ、旗本共さへ逐
 散りし敗軍に其方一人駈附けし忠義の諫めに落延びん 三「然しかがら御馬上にては覗ひ討
 も氣遣はしイヤ徒立にて片時も早く 信「然らば森三左衛門 三「お供致すでムり升せう「ト
 三左衛門先に立ち花道へ行くぞんちやん「ハタ」に成り向ふより志摩與四郎陣立にて鎧を
 ひねり一揆の人数小具足簀笠を冠り竹鎗を持ち南無不可思議光如来といふ旗を押立て出て
 來り」與四郎「信長公にはいづくへ逐げさせ給ふぞや本願寺の一將志摩與四郎是にあり 三「
 扱ころ敵の伏勢と覺へたり君には早々東の道へ 信「いふにや及ぶ「ト舞臺へ戻り上手へ行
 うとする上手より河島水之助陣立にて簀笠を着たる一揆の人数南無不可思議光如来の旗を
 押立て出て來り」水之助「待もふけたる信長公石山の軍師鈴木の一族河島水之助疾より是に
 待受けたり 信「扱こそ伏勢「ト下手へ逃げて行く橋懸りより栗津右近陣立にて一揆の人数
 旗を持ち出て來り」右近「専法未練の織田信長栗津右近是にあり 信「又もや伏勢 三「我君早

く 信「よ、 三人「何を「ト信長太刀を抜て切て廻る三左衛門は敵を喰ひ留り信長を落さん
 といふぞつちやの立廻りト、信長は切抜けて上手へ這入る水之助右近追ふて這入る」 三「
 君の御身氣遣はしソレ「ト百姓を二人切捨て上手へ這入る一揆の人数追かけて行うとする」
 與「ヤレ待たれよ假令此場は遁がすとも餘も打洩らす事あるまじ取残したる大旗は取りも
 直さず織田信長「ト南無妙法蓮花經と書たる緋の大旗を取上げ」與「ヤア」佛敵よつく聞
 け敵將信長降参したり勝鬨く 大勢「エイ」ト「ト上手より三左衛門出て來り」 三「ヤ
 ア君を守護なす七字の大旗やはか渡してよいものか 皆々「何を「ト大太鼓入りの鳴物に成
 り三左衛門旗を取返さんといふ大まぐしの立廻り宜敷あつてト、與四郎と大旗を引合ひ見
 得にて此道具ふん廻す返し

造物平舞臺真中瓦家根の門扉へ切りあり大念佛寺といふ額を掛け上下寺の練塀やはり黒蓋
 をかろし火入の月を残し都て平野大念佛寺門前の体時の鐘風の音にて道具納る「ト橋懸り
 より信長白刃を掲げ出て來り」信長「扱も凄まじき飛驒守が軍配かな凡伏勢十一ヶ所道共な
 く畔共なく月を便りに落延びし爰は正しく平野郷幸ひあれある寺院の門食の無心をさうじ
 や」ト太刀を納め門の所へ來り」信「ヤア」當寺を見かけ無心あり爰明けよ」ト
 門を叩く内にて」淨念「誰じや」ト門を開いて淨念墨衣にて頭巾を冠り栗下駄をはき大

念佛寺と書たる弓張提灯を持ち出て来り」淨念「此夜深に門を叩くは誰じや○イヨウ五月人形見るやうなか大將扱は本願寺の寄せ手の衆じやな」信「チ、予は濃州岐阜の城主織田信長にて有るぞ」淨念「エ、うんなら信長様でムリ升たか○コレ永信早う来た〜」ト内より永信墨衣頭巾を冠り出て来り」永信「けたましい何じやいやい」淨念「何じや所か噂に聞た信長様がムつたわいやい」永「ドレ何所に○イヤコリヤ腔じや」淨念「とは又何でじや」永「さいやい其信長といふは日本の三分一を取り殊も位も高ひお方夜更に一人爰らあたりをうるつささうあお大將かいやい」信「成程其不審尤今日石山を攻めし所敵の謀計に落入りさんぐの敗軍からうじて落延び當寺と訪ひしは一飯の齋の無心に預り度し歸國の後の恩賞は貴寺の望みに任すべし」永「夫は嘸御難義でムリ升せうさういふ事とも露知らず只今の無禮眞平御免下さり升せお齋は愚か御家來衆の參る迄御寛くりと御休息此所にお越し被成れば氣遣ひな事はムリ升せぬ」信「近頃過分な志し夫承つて一つの安堵」淨念「イヤ永信滅多にさうもいはれぬぞや」永「そりや又なせに」淨念「ハテ飛驒守程の者が爰らに伏勢置のすして天下の強將信長に度び〜泡が吹かせられるか」信「何と」淨念「愚かや信長我々を出家と見しは、佛に敵たう佛罰にて眼のまひたる織田信長」淨念「我こそ上原左右衛門尉」永「富島頼母是にあり」ト兩人頭巾をぬぎ衣をかなぐり捨てると陣立になる」信「スリヤ出家と思ひし汝等は

淨「信長殿を討んが爲」永「是皆以て軍師の智畧」淨「今度の滅多に」兩人「遣がしはやらじ」ト小石を上下へ礫に打つとどんちやんを打込み後ろにて大勢アリヤ〜の聲を上げる」信「コリヤかうしては」ト花道へ逃て行く向ふより鈴木飛驒守鎧陣立の拵らへにてどんばう切の鎧をひねつて出て来り」飛驒守「珍らしや信長公我こそ石山本願寺の軍師鈴木飛驒守重幸なり御印を受取らん」ト信長を押戻し」飛「ソレ」ト兩人切て懸るを信長うるたへ廻り門の内へ逃げて這入る」飛「最早信長籠中の鳥追討て〜」兩人「心得升た」ト門の内へ這る」飛「今宵ぞ多年の」ト鎧を搦へるのが木の頭」飛「望みを達せん」ト裏向きにて急度見得此仕組宜ま〜返し

造物平舞臺後ろ一面の竹藪上下敷疊松の釣枝やはり月を殘し黒蓋をふるしあり此道具どん〜にて納る」ト竹藪の内より信長抜刀にて押分けながら出て来り」信長「信長生れて斯程迄不覺を取りし事なきに飛驒守めが手立に落入り數度の耻辱を受けたる無念さ恨みを晴らさで置くべきか敵近寄らぬ其内にソレ」ト上手へ行うとする上手藪の内より南無不可思議の旗を差出し」大勢「信長殿を討取れ〜」ト信長驚き下手へ行うとすると又下手の藪の内より同じく不可思議の旗を差出し」大勢「佛敵信長討取れ〜」ト信長花道へ逃て行く戸屋の内にて」大勢「織田信長逃すな〜」ト所々にて聲を上げる」信「ハ、ア天なる哉命なる哉

後ろは鈴木飛騨守向ふは上原左右衛門尉富島松井の軍勢にて進退爰に谷まる信長「ト舞臺へ戻り」信「さうじや」ト白刃を咽に突立んとぞる橋掛りより森三左衛門以前の大旗を掲げ出て来り」三左衛門「ヤレ早まり給ふな我君如何にもして此場を切抜け御鬱憤を晴らさせ給へ」信「イ、ヤ信長が運も是迄そこ放せ」三「アイヤ我君一旦敵に奪はれし大旗をも取り返し君が危き御最期の場所へ来り合せしは全く妙法の功力にして御運尽きざる是瑞相」信「そりや奪はれし大旗をチエ、忝い」ト月を引て取る」三「幸ひ月も俄の村雲」信「是も偏へに信長を救はせ給ふ妙法の」ト竹藪の内よりとんぼう切の鎧を突出し信長の足を突く信長突れながら苦痛をこらへることなし」三「我君如何遊ばし升た」トいひ寄る信長叫く三左衛門悔りあしてうなづき」三「ヤ、信長公には敵の爲に御最期ありしか」ト後ろにて」○「佛敵滅亡勝鬨」大勢「エイ」トサ、トとんちやんを打込む」信「嬉しや囲みと」三「モ」ト叫く是を時の鐘忍び三重に成り三左衛門旗を信長に渡す信長旗棒を杖に立上り行うとする竹藪の内より飛騨守鎧を持ち出て来りにつたり思入あつて鎧を投捨て死骸を捜がす心にて信長に探り寄り跡へ引戻す三左衛門扱はどこなしあつて太刀を抜かけるを飛騨守急度押へ三人探り合の立廻りあつて信長行うとするを飛騨守旗棒を捕らへて引戻す三左衛門太刀を抜て旗棒の真中を切る兩人尻餅を突くと三左衛門太刀を納めて信長の手を取り花道へツカクと行

く」飛騨守「儘に信長」三「エイ」ト小柄を抜て手裏劍に打つ飛騨守受留り」飛「討洩らせしか」ト小柄を舞臺へ打附る三左衛門は信長の手を取て肩へかける是を双方一時の木の頭」飛「残念な」ト三左衛門は信長を肩にかけ幕の引附けと一所に向ふへ這入る時の鐘の送り早い合方にて拍子幕

四幕目 (紀伊國鈴木孫市隠家の場 同磯間ヶ原の場)

役名	鈴木孫市	見山八平
一 鈴 木 孫 市	一 小 見 山 八 平	
一 老 母 紀 の 路	一 鈴 木 豊 若 丸	
一 妻 夏 子	一 弟 孫 吉	
一 小 森 源 太 夫	一 家 來 四 人	
一 鱒 淵 藤 六	竹 本 連 中	

造物下手より上手へかけて常足の二重蹴込み草土手此上真中二間草葺の家根藤蔓にてからげし栗丸太の柱見附腰通りを杉皮にて張りし中窓前側簾の簾を下ろし上の方跡へ寄せて瀟々小屋前側簾にて編みし片開きの簀戸後ろ黒幕下手書心に流れの浪板一面に枯尾花の下草

いつもの所繩からげ丸竹の門口家体の柱門口共高のからみ附し詭らへ松の釣枝都て加田の奥鈴木孫市隠れ家の体一セイ浪の音にて幕明く「ト浪の音打上げ直に謠に成る」馬「山は淺木に隠れ家のく深きや心なるらん」ト橋懸りより豊若丸着流しそぼる成る拵らへにて菓草履をはき藤づるにてあみし提籠に枳の實を入れ出て來り「豊若丸」母様只今戻り升た「ト簾の内にて」夏子「チ、豊若戻りやつたういの」ト簾を巻上げる夏子乱れま巻髪の髮切繼ろばる成る拵らへにて傍に孫吉の子役を寐さし焚火の明りにて豊若の脚半手負を縫ふて居る家体の内に木の葉敷詰て有る事「夏」餘り戻りが遅さ故もし敵方の者にでも見咎りられしハせぬかどさつう案じて居り升たわいのう「豊」サア早うとは思ひ升たが孫吉の目も婆々様の御病氣も早う全快遊ばすやう磯へ出て垢離を取り産土様の方へ向ふてお願ひ申て來升た○さうして枳の實もたんと拾ふて參り升た「夏」チ、夫は出かしやつた世が世の時得有らうなら何不自由なき身なれ共雜賀根來は門徒多しと織田信長より焼討せられ親子四人此草深い野中に隠れ枳の實をば食事となして命を繋ぐ艱難もどうぞ石山方が勝利と成り無事に夫トの御歸國を待つ甲斐もあさ長の合戦そなたが逢ひ度う思やるも尤じやわいのう「豊」シテ婆々様にお暇願ふて下さり升たの「夏」イヤまだ願はね共婆々様じやとて親を慕ふは子の習ひ餘もお阿ももあるまいとわしが着類の裏を取りうなたの脚半手負ひ笈摺迄も仕て置升た「夏」

有難うもり升る父にお別れ申せしは四つの年今はお顔も知らね共石山へ往て紀州雜賀の鈴木孫市と尋ね升たら「夏」ア、コレ○只さへ殿しい門徒の詮議鈴木孫市の子といふ事は成らぬぞや「夏」ハイ心得て居り升る「ト蒲鉾小家の折戸を明け内に紀の路白髮鬢病ひ鉢巻切繼の着附腰の抜けたる老母の拵らへにて住居正面に九字の名號の掛地を飾り門徒宗の數珠を持ち看經をして居て」紀の路嫁女兄が戻り升たか「夏」チ、母様お休みかど存じ升たが夜風烈しき野原の草の家ちと焚火にお當り被成升せ○ドレお手を取て上げ升せうわいなア「ト紀の路を介抱して焚火の傍へ連れて來る」紀の路「チ、忝いく二人の子供のゐる上に腰さへ立ぬわしの介抱其の辛抱も夫トへ貞心せめて悴孫市に一言禮もいはしたけれと國を出て七年此方便りをせぬは宗門のお爲に心を變せぬ健氣さ必らずむごい悴じやと恨んでば下さるなや「夏」勿体ない事かつしやり升せ御本山のお爲には家を失ひ妻子を殺され憂き目を見る者此國に幾千万と知れざるに親子四人が恙かう斯うして居るは親鸞様の皆お蔭假令夫トが討死を致せばとてお宗旨のお爲と思へば更々厭ひは致し升せぬわいなア「紀」チ、ろなたの健氣さを嘸や悴が聞たから悦ぶで有らうわいのう「夏」夫よ附て母様へ豊若がお願ひ七年此方逢見ぬ父上逢はしてたべと母へのせがみ是非なう旅の用意を調へ今宵密かに旅立さすも餘義ない頼みどうぞ姑御様いあしてやつて下さり升せ「紀」是はしたりつがもかい孫市

の入城は親にも子にも替へ難い御開山への御奉公慕ふ心は無理ならねど此母にはさへ便りをせぬ健氣な悴の刃金ををかまらしとて御開山へ御詫が成らうぞ殊に御門徒の者を見たれば首を切らるゝ其中に年端も行かぬ孫一人とて敵中へいなされうぞそなたが父を思ふより母が逢ひたさは百倍千倍夫をこらへてかういふは悴の本意を立させたさ若しも途中で事あらば婆々は何と成るべきぞ思ひ留つてたもひのう 豊「サア婆々様のお詞を背くではムリ升せねどせめて今より彼所へ行父と共に御宗旨のお爲に、わしも軍して叶はぬ時は父上と共に討死する心袖乞非人に身をやつして參れば氣遣ひムリ升せぬ是非お暇を下さり升せずは如何成る淵にも身を投げて死ぬる心でムリ升る 夏「母様お聞遊はし升たか此子の願ひ叶はぬ時は死升といふア 紀「本に頑是ないと思ひしに流石は鈴木孫市が胤程あつて立派な詞稚い孫を恐ろしい敵の中へ一人いなすは不便には思へども此上は力なし婆々が暇を參らさうわいのう 夏「豊若悦ひやうなたの願が叶ふたわいのう 豊「有難うムリ升る 紀「したが弟が目覺たなら跡を追ふに違ひはない仕度かよくば起きぬ間に 夏「せめて夫トへ一筆様子を 紀「成程夫がよいわいのう 豊「左様あればお婆々様 紀「ドレ手傳ふて「ト膝を立て直すを道具替りの知らせ」 紀「やり升せうか「ト脚半手負ひを取る夏子は豊若の帯を解きに懸る合方風の音にて返し

造物平舞臺後ろ黒幕一面の薄原上の方に苦むしたる土の洞穴所々に切られたる百姓の死骸横たはり居る都て雜賀原中の体風の音にて道具納る「ト床の淨るりに成る」 淨るり「一洞穴しき谷の聲山高くして海近く野末の果は海水に雲根を懸す原野の月代皓々として光を放ち後ろには嶺松巍々として風常樂の夢を破る心は昔に變らねど世を忍ぶ身の鈴木孫市姿も賤のをこのころ嶋淡路を越へて故郷へ一度び戻る草原傳ひ「ト向ふより鈴木孫市やつしの着附旅形り廻し合羽三度笠を冠りし百姓の拵らへにて明松を燈し出て來り」 孫市「國を出てより七年此方終に便りを聞かざるが變り果たる故郷の様を見るに附けても母人や妻子の者は如何成りしか○ア變れば變る世の中じやあア 淨「暫しイみ居たりしが 孫「母の在所も尋ねたければ時日と移さば手立の相違片時も早くさうじや〜 淨「草踏分けて辿りつゝ邊りの死骸打見やり「ト孫市舞臺へ來り死骸を見て」 孫「來る道にも土民の死骸今又爰に切られし者は野武士山賊の處爲成るか哀れむべき非業の最期願生菩提南無阿彌陀佛〜 淨「唱る念佛も夜嵐につれて笥に響きける其聲洩れて源太夫殊勝の回向は有縁の者か何者ならんとは〜 淨「乍ら顔を覗て打驚き「ト洞穴の内より小森源太夫雨に朽たるそぼろ成る着附元村長の拵らへにてこは〜 出て來り孫市の顔を覗いて恟りなし」 源太夫「ヤ孫市殿か 淨「聲に恟り急度身搦へ 孫「ヤア見れば異形の出立といひ斯かる野原に只一人我名を呼びしは狐狸妖怪

の處爲成らん 淨と刀の柄に手を掛くれば 源ア、コレ孫市殿怪しい者ではムらぬ耻かし乍ら源太夫が成の果でムるわいの 淨といふに孫市つくく見て 孫誠に姿形は變れども小森氏源太夫殿でムつたか 源孫市殿か 孫ヤレおなつかしやまつと健固で 源こなたも無事で○よう戻つて下されたのう「ト涙を押へる」孫夫に附ても貴殿には如何成る譯で此野には 源「ろんならこなたは知らぬのじやの 孫何知らぬとは 源此紀州雜賀根來は御門徒の者多く殊に鈴木を生國なれば皆殺しにと信長が軍馬を向けると聞しより御門徒一同貝塚の城に籠り三日が間防ぎしなれど大將なくて軍に打負け續て此雜賀口に砦を構へて防ぎしなれど是も終に攻破られ切られた者は幾萬人其上に家は残らず焼盡され野山に隠れ一年三月糧をければ魚を取り木の實を拾ひ長らへしが翌をも知れぬ詮議の殿しよ○夫に切られて居る死骸は小松村の作右衛門に小林の平之進六郎二さのふの暮捕らへられ皆切られて死んだわいの丸一年が其間雨に打たれ雪に凍へ起伏食を共にした九人の中でわし一人不思議に命助のりやこそ孫市殿に今宵の對面をらい目に逢ひ升たわいの 淨「始終の様子を聞く内も孫市をいるに哀れを催し 孫ア、左様な事でムつたか長の間敵に困され互に道路の絶へたれば知らず暮らせし國の太變某此度船路にて淡路嶋より熊野へ渡り今日根來を通行せしに海道かけて野原となりしは如何成る事と思ひしに扱は信長検討せしとな夫では定て母人の處爲成らん

も 源「ア其母御にはこなさんが入城してより大病にて腰の立ぬ其上に弟息子は一年跡瘡瘡にて眼が潰れ難義の中に今度の騒動 孫スリヤ母人にはお腰しも立す身重で有りし出産の我子も眼が潰れしとか○シテ母人には御一命に別條なく悴も達者でゐらるか 孫「ア親子四人の衆達に別條はなけれども取分け鈴木一族とて殿殿い詮議の中なればけふ爰に居て翌は又所を替へる非人同然今では是から三里程海手の小家に隠れて居らるゝわいの 孫「ふ、先づは母の命に別條なくて一つの安堵命があらば源太夫殿重てお目に懸るでムらう 淨「行んとするをわはてし引留め 源「コレ孫市殿久々逢ふたわしでさへなつゝのしくてたまらねば嘸や親御や内義殿又子供衆も逢ひたからう其親子にも逢ひもせず此儘に行うとは氣強いにも程があるわいの 淨と縋り留むれば涙を浮め 孫某とても母のお顔を見まはしくは思へ共此度當國へ下りしは敵を破る一つの計策此圖をはつさば本寺にかゝる一大事母へはよきにお傳へ下され 源「サ、左様でもムらうなれど遠くもわらぬ一つ原中夫はく内義にもいかひ苦勞をして居るわいの 孫「ハテ扱其苦勞は彼等に限らず抑石山の役起りしより諸國の門徒七ヶ年が其間辛勞はいか程にムらうぞや元より宗門安全の勝利を得ざる其内は生て再び歸らぬ心底佛恩報謝の御爲には親をも子をも何か厭はん 源「サ、其金銀の心根は知つては居れど親を慕ふ子が不便さに留る他人の心でも推察さつしやれ鈴木氏 淨「餘

所の見る目もいぢらしと猶も留むる詞に是非なく 孫母に對面せん事は本意ならねど貴所の寸志も無氣に仕難し左様ムらは餘所ながら母の安否を伺ひ申さん 源夫は「ア、賤坊達が悦ぶで有らうわいの」○またが道なき此原中わしが夫迄案内をして進せ升せう 孫夫は千萬忝なま 源譬へにも云ふ旅は道連れ 孫其旅ならぬ故郷へ飾る錦に引替へて 源賤の姿で戻られしと 孫他聞を厭はぬ野原にムれば 源御本山の様子をも 孫月を知るへの道すがら 源聞くも 孫語るも 源久くにて 孫詞敵に 兩人成り申さん「ト源太失案内して孫市花道へかゝり」 孫然し源太夫殿モウ何時でムらうの 源サア野寺の鐘も聞へねば時といふては分からねどモウ四つも過ぎたでムらうか○夫にしても孫市殿此國迄信長が攻入る程の事なれば若しや敵の勝利にでも成りはせぬかと氣遣さシテ軍の安否はさうでムるの孫されば敵は名に負ふ信長なれどお宗旨の有難さには一度も敗軍なせし事なく先達て信長が天王寺の本陣へ夜討を仕かけ佛敵信長を討潰したる味方の本意なま 源ヤレ残念な事をさつしやつたさうを眼の黒ひ内味方の勝利が見て死度うムるわいの 孫イヤ氣遣ひさつしやるな此度こそは必定彼を討取手つがひ 源シテ手つがひといはつしやるのは 孫原野といへど大事の密事「ト叫く」 源ム、そんなら今度下られたはアノ兵糧と偽つて 孫信長の本陣を焼討になす拙者が謀計 源シテ其品は調ひ升たか 孫左れば熊野の門徒を密に語

らひ二百輛の牛車に引かせし俵は皆焼草夫に附て源太夫殿も元拙者の名を包み此使を致しては下さるまいか 源御本山のお爲なら命を捨ても厭はぬ我等シテ其使といはつしやるのは 孫承れば津田太郎左衛門當國佐野の城に留るよし彼が陣所へ立越へ兵糧と偽つて斯様く「ト又叫く」 源成程さういふ手筈にしたら信長が骸は幾つあつても足るまいテモゑらい計畧でムるの「ト此せりふをいひ乍ら兩人花道より中のあゆみを渡り假花道へ出て舞臺へ懸る此内舞臺の道具を上手へ引て取り下手より同よく薄原を引出し死骸を隠し黒幕を切て落し後打寄せ際の浪の中遠見に成る」 孫源太夫邊りを見廻し 源サ、モウ爰は磯間の浦の濱邊○イヤ何孫市殿送つて進せ申たけれど今この事が第一肝腎わしは津田の陣屋へ往て来る程に此磯邊をまつ直ぐに凡一里半程行くと右へ上る山がある其山の草原を左りへ取つて行けばわゐる程にわしは是で別れ申ぞや 孫身体勞れしそこ元に願ふは忍入てはムれどよきに貴殿をお頼み申す 源夫は承知仕升た程に道を取り違へぬ様に行つしやれや 孫千萬忝う存じ升る 孫述る禮義も姿にはろくはぬ武士の折目高敷へし道を辿り行「ト孫市橋懸へ這入る」 源サ、其道じやく○ア、感心な者じやなア七年越し音信もせぬ親や妻子に心引れず逢はずに行との氣強さもお宗旨大事と思ふ一心多くの人が是程迄苦勞も誰故皆信長めがする仕業恨みは今報ふ計略「ト向ふを見て」 源サ、あの松の火は津田の家

來門徒の詮議に來つたのじやな爰で逢ふたはこつちの幸ひ今の頼みをチ、さうじや、
飢え勞れし身体も憎しと思ふ一心に我を忘れて「ト源太夫向ふへ走り這入る始終かすめて
涙の音にて返し

造物舞臺元の道具爰に豊若丸脚半手負笈摺順禮の拵らへにて草鞋をはくを夏子手傳ふて居
る紀の路は二重に住居焚火をもやして居る床の送り返しにて道具納る 淨る「行空の限な
き月も哀れ添へ涙の露かいたいけに無残なるかや豊若が旅の用意を諸共に手傳ふ母が目は
涙 夏子「コレ豊若今渡したる母の命を大事にかけて父上様へお手渡しを仕てたもや 豊若
ハイ志つかりと守りに入れて置き升たれば失ふ事ではムり升せぬ○左様なればお婆々様モ
ウお暇申升る 紀の路「チ、ろんならモウ行きやるか必らず先を急ぐとも日暮て道ばし歩む
なよ朝九には夜明て宿を出てたも又石山へ到る共逢ひれぬ父に逢はんとて返つて敵に見附
られてたもんな只逢ふ迄と心得て折を見合せ逢ふたなら假令討死するとても御開山の御恩
を忘れ未練な性根を出さぬやう婆々がいふたと傳へてたもや 夏「父を慕ふは去る事されど
母も親の内なれば假令戰場へ出るども無事に戻つて來てたもや名残りのかしくは思へども
早ういんだがよいわいの 淨「口にはいへど女氣の今の別れの悲しさに引寄せ身を寄せ抱寄
せ身も絶へなんと歎きしは理りせめて哀れあり弟のふつと目を覺し「ト寐入りし孫吉旨の

こなしにて起上り」子役「噴様どれに居やつしやる兄様戻つて下されたか 紀「チ、孫よ目が
覺め升たか兄はど、様のお迎ひに行くのじや程に待つて居升せうぞや 子「ろんなら嬉しい
く 豊「夫じやによつて母様にわやくをいふまいぞや 子「アイおとなしう待て居り升 豊
モ「母様腹の内にて別れし夫トを親じやと思ひ目がいの見へぬに逢ひたいといふ心根がい
ぢらしうムり升るわいなア 淨「猶も乱るゝ母親の心を勵ます豊若丸 豊「母様左様よかつし
やり升るなわしが日頃信心する御利益でやお婆々様のお腰も立ち又孫吉の眼病も直る内に
は石山の軍も目出度う治つて父にお逢ひ遊ばすは今暫く夜更けぬ内にお暇申でムり升る
淨「と立んとするを 紀「ア、コレ孫よそなたに渡す物がある 淨「といひつゝ臥戸にいざり入
り無量の慈悲を巻込みし旅の行末安穩と念する九字の名號を恭しく持來り「ト紀の路上手
の小家へいざり乍ら這入り正面の名號の掛物を取り來り」 紀「是は御開山親鸞様の九字の
名號肌身に附けて行きやいのう 淨「涙乍らに手に渡せば豊若取つて押頂き 豊「有難うムり
升る 夏「其お名號の功力でも骸に凶事はあるまいけれど今更名残りか 豊「ア、モ「其様に
かつしやつて下さり升ると爰がどうもいなれ升せぬ婆々様も母様も孫吉連れてあの臥戸へ
さうぞムつて下さり升せ 紀「成程是に居ていなす姿を見るもいぢらし 夏「そんなら豊若隨
分無事で 豊「お噴様にも御機嫌宜しう 子「兄様早く爺様を連れて歸つて下されや 豊「チ、

ちつきに戻つて来るわいの 孫「いふも涙のえり母は泣くく姑をいたはる跡にぞがる
 子は聲のみ當の目なし鳥筈りつ探る親と子の姿見返り豊若も出は出で乍ら幾度か名残り惜
 氣に詠むれば見送る目さへ明兼る小家の折戸の明建も力なくく入りければ豊若今は急が
 んど管の小笠又突杖も跡へ引かるゝ後ろ髪一足往ては振り返り二足三足行先へ來懸る父も
 原中に行迷ふたる親と子が思はずばつたり行當り「ト此内夏子紀の路名残り惜しむこぢ
 し子役は夏子の袖にすがり小家の内へ三人這入り折戸をゆる豊若は跡を見返り乍ら花道へ
 行く此内向ふより孫市道に迷ふたるこなしにて跡を見返り乍ら出て來り行當り」孫市「誰じ
 やく」豊道を急ぐ旅の順禮いかひ鹿相を致升た 孫「此原中に只一人道にでも迷はしやつ
 たが豊「イエ」くわしは所の者孫「よ、所の者とあるからは大方こなたもお宗旨じやの 豊
 エ、 孫「イヤ何も氣遣ひ者ではふらぬお宗旨と見て尋ねたいが鈴木孫市といふ仁の母親
 や子供の衆が此原に居らるゝとの事教へて下され 孫」といふは父とも知らぬ子の我身の上
 と押隠し 豊「其様な者は存じ升せぬ 孫「サ、詮議の嚴敷い事なれば隠さるゝも無理ならぬ
 ぞ子細有つて片時も早く尋ねて行かねばあらぬ者方角なりと教へて下され 孫「根問ひする
 程恐ろしく豊若ちやつと身をすりぬけ 豊「イエ此野に其様な者は居り升せぬ外を尋ねて見
 さつしやれ 孫「言捨てゝこそ走り行孫市跡を打詠め 孫「所の者といふては居れどそぐはぬ

旅の順禮委氣味の悪るい子ではある 孫「いひつゝ邊りを見返し」〇「サ、あれに火の見へ
 る」 孫「もしやと歩む草家の門口 孫「よ、正しく人の住む様子〇お頼み申」 孫「音をふ
 聲は敵方の詮議ならんと妻夏子寐た間も放さぬ用意の一腰ヌハといは、一討と油断内儀の
 氣配り目配「ト小家の折戸を明け夏子こなしわつて子役を帯にすがらせ腰さしの目釘とま
 めし折戸を明てこちらへ來り」夏子「ななたでムり升る 孫」と思はず見合を顔と顔 夏「ヤ孫
 市殿か 孫「そちは女房 子役「何爺様 夏「よう戻つて下さんしたなア 孫「思ひがけねば張詰
 めし力も腰もがつくりと氣振のしたる如くなり 孫「先づは息災にて重疊」 孫「といひつ
 草鞋の紐とくく孫市内に入り乍ら 孫「聞けば母人には御病氣の由且は出産の悴にも兩
 眼まの盲目との事シテ是成るが腹の内より名づけ置きたる孫吉成るか〇是はしたり何ぞう
 つかり 孫「いはれて妻は心付き 夏「ハイ」餘りの事で何から先へ申さうやら涙計りが先
 達て夢見た様を私の心地あなた何とおつしやり升たへ 孫「ハテ叔夫トに逢ふたりとて安堵
 なして病氣なぞ引出さば母人や子の養育はたが致すうろたへる時節でないぞ 夏「ハイ 孫「
 ア去ながら七年此方の辛勞を思ひ廻せば夫も尤シテ豊若は何れに居るか 孫」と問はれて恠
 り 夏「サ、さうじやマアひよんな事しやつた遠くは行くまい 孫」と行かんとするを引留め
 孫「ユリヤ屹相して何れへ參るぞ 夏「サア父に逢ひ度い」とせがんだ願ひが今宵叶ひ旅立

せしめたつた今 孫「ふ、そんなら若しや願禮姿で 眞「アイなア 孫「スリヤ今逢ひしは俸で
ありしか〇ア、知らぬ事とて早く呼べ〜 眞「アイ〜 孫「小袂引揚げ女房は我子の跡を
眞「豊若イのう〜 孫「追ふて行く折柄母の聲として「ト小家の内にて」 紀の路「孫はこれに
居やる孫吉よ〜 孫「明ける臥戸の母親を見るに孫市なつかしく慰撫に両手をつかへ 孫
ハ、ア先づ以て母人には久々にての御對面御病氣とは申作らつゝかなく渡らせ給ひ孫市が
身に取り斯様な悦ばしい義はふり升せぬ 孫「と申述べは目に角立て 紀「何孫市とは鈴木孫
市の事よな其方如き人でもなしに悦び受ける覺へはないぞ 孫「と取つても附かぬ詞に驚き
孫「コハ母人には異なるお詞子細わつて當國へ下りし所母の病氣と承り態々尋ね参りし孫市
紀「だまれ〜 だまりふらうぞ昔禹王臣下たりし時洪水を納め給ふに七年が間三度び我家
の門を過ぎ乍ら見返りも仕給はぬは私の愛を以て公事に怠り給はざる聖賢の心斯の如し今
石山には信長の爲よ宗門の興廢よもかゝはる難義數ならぬ其方なれ共飛驒守の縁に寄り味
方の將に招かれしは病といやす醫師同然未だ全快の功もなく母の病氣を見舞に來しとは母
か大事のお宗旨が大切か勝利を得ざる其内は生て再び戻らぬと母よ誓ひし詞を破り能くの
め〜と歸りしよなあのれの様な卑怯者子と思はねば親でないさ〜立つて行居らうぞ
孫「老の怒りに孫市も案に相違の理に伏し詞もなく居たりける孫吉かくと聞くよりも子

そんなら妻々様コリヤ爺様ではふり升せぬか 紀「サ、といはと〜じやがアリヤ畜生じやわ
いの 子「わしや畜生でも大事かい爺様の顔が見たい 紀「サ、道理じやわいのヤイ畜生めか
のれが様な人でなしでも親と思ふて暮ふ子の兄はお宗旨のお爲と思ひ父諸共敵に向ふて討
死仕たしと婆々への頼み其健氣さに引替へて親や妻子に心引かされ立歸つたる未練者長居
しおらば勘當成るぞ 孫「詞の角も荒ら〜しくばつたり建切る草家の折戸門の外には女房
が戻りかゝつて始終の様子聞くも悲しき我子の成行き取つゝ置いつの心の轉倒内には孫市
思案を定め 孫「さうじや 孫「と行のんとするを女房聲かけ 眞「待たしやんせ孫市殿 孫「イ
ヤ長居せば勘當との母のお怒り最早生ては對面すまじ女房去らば 眞「マア待て下さんせ姑
御様のお怒りは聞たれど夫より悲しい豊若は今道で捕らへられ升たわいなア 孫「何豊若が
孫「はつと向り流石の孫市途を失ふたる折ころあれ津田が郎黨鱒淵藤六跡に續いて小見山
八平源太夫に案内させいかめしく野中にイみ「ト向ふより勢子一人松明を燈し源太夫に繩
をかけ鱒淵藤六小見山八平半天股引鞭先羽織大小切緒の草鞋ときにて跡より豊若に繩をか
け勢子一人是を引き外に勢子二人抜身の鎗を持ち出て來り」藤六「其方が訴へ出し孫作が隠
れ家はあれ成るか 源太夫「御意にふり升る 八平「ソレ家來共 勢子二人「心得升た 孫「と下知
に隨ふ組子の面々ばら〜とわつと巻き「ト勢子二人内へ這入て孫市に鎗をつける」 孫「

コトヤ私めを何と被成る、孫答むる詞に門口より、ハ平「ヤアいふち」先刻熊野表より兵米を積みし二百輛の牛車引も切らぬは察する所門徒めらより石山へ送る兵糧と見し故へに人数を以て止めし所、藤夫「只今は成る源太夫訴へ出しは彼兵米は冥加の爲天王寺に御在陣の信長へ捧ぐるよし甚だ以て誇しく手痛く吟味致せし所其方が頭取成るよし此野に隠れ住むからは門徒の者に相違あるまじ、ハ平「夫のみならず是へ來る途中怪げ成る願禮の小わつば懐中を改め見れば石山にて人も知つたる鈴木孫市彼が妻より送る赤珠に親鸞聖人の名號を肌につけし疑ひもなき孫市が悴ッレ引すり出せ、孫「と權柄ごかしの主命にいたはしや豊若丸身はいましめの荒繩にかゝる姿を見る父も母もたまらず聲を上げ、夏「ヤそなたは孫」といはんとするを押止め、孫「コリヤ女房見れば最前途中にて途を尋ねし旅の願禮おれでさへも知らぬ子を我身の知らう筈があらうか、夏「夫じやと云ふて、孫「ハナ扱鈴木孫市の子と疑ひのかゝりし小悴滅多な事をいひかつたら誰に難義が○キ夫じやによつて何事もおれに任して置たがよいわい、孫「イヤ其詞吞込まぬ孫作とは紛らはしき詮議の糸口殊に此野で捕らへしからは孫市めが身寄りの者共此野に潜み居るは必定○コリヤ源太夫其方村長を勤めしとあるからは孫市は元より此小悴が面体を存せぬ事は餘もあるまじ大方兵糧の一條も孫市めが計らひにて味方を欺く手立あらん、孫「根から堀抜く問條に源太夫は頭べと上げ

源太夫「いか程御詮議遊ばす共先刻申上たる通り根來難賀の人民一同且は是成る孫作殿親御妻子の今の難義を見るに忍びず熊野三界駈廻り調達したる兵糧千石元は命の惜しさからさし上る兵糧に何偽りがムり升せう、ハ「左程二心なきからは隠さず申せ是成るわつばは孫市が子であらうがな、孫「サア其義は、孫「親の手前を憚る村長、孫「是はしたり源太夫殿難に遠慮でいひつしやらぬ愛が大事の○イヤサ大事の親や女房子の今の難義が救ひたさに調達したる米千石是が役に立ざる時は心尽しも水の泡我子でもない餘他人の悴に何の義理がムらう恐ながら此わつばは孫市が子に相違ムらぬ、孫「と思ひ切つたる詞に悔り、夏「コレ減相な、孫「と寄るを突退け、孫「エ、おのれ迄が同じ様にかばひ立して何とする、ハ「ヤア左程孫市が子と存じおらばおせ只今知らぬと申た、孫「ヤ、藤「女めが様子といひ此場をくろめる詞の轉倒其方孫市に相違あるまい、兩人「ソレ者共、組子「心得升た退ッ引させぬ差圖の鎗先遣れぬ所と豊若が襟愛摺んで捻倒せば妻は半乱狂氣の如く、夏「コレ氣が違ふたかこちらの人可愛そふに其子をば、孫「コレ、女房何留る此小悴め故に孫市と疑ひ受し此孫作ヤイ愛なちつべいめおのれが親の孫市は石山の味方に行き此年月の千辛万苦其子と生れても七年逢はねば顔も知るまい其親故に親ならぬ赤の他人の孫作が手込めに會ふも宗門のお爲と思ふて何事も○イヤサ味方をしたるばつかりに親の因果が子に報ひ今の難義も心から兎にも角に

も佛恩のお爲と諦め死でくれイヤサ假令命が惜いとして遣れぬ場所の詮議の良○親への孝と思ひなば親でないも早ういへおのれ故に疑ひ受け心を碎く兵糧も御用に立たぬ腹立しき思へは憎つくい小伴めが 澤 態と怒れる両眼は涙の雨の振り上る拳の下に豊若丸痛さこらへゆる打擲を傍に見て居る源太夫母も止めるに止められぬあたりの人目見へぬ目に探り寄つたる孫吉が 子「コノ爺様悪るい事があるなれば兄様の代りにわしを打つて下されいのう 澤」取籠りたる幼子の詞尻を聞咎め 兩人「扱ころ兄とは 孫」コリヤやい孫吉是は憎い餘所の子じや目かいも見へぬ其辭に滅多な事といひ居るな 澤」と阿れば孫吉探り寄り 子「そんならお前は兄様ではないのかや 澤」身内を探る弟が手を持添へて涙聲 豊「ナ、わしやうなたの様な子は知らぬ父は鈴木孫市とて石山の大将分其父上が戀しさに行き途中にて捕へられ旦那様に御難義かけお家様にまでお歎きかけるも母様やお婆々様の留めるを聞かず旅立したる不孝の罰○モンおち様わしや此旦那様は知らぬお人此身は死でも御開山のお爲なら更々厭ひは致し升せぬぞうを跡でお腹立のお詫び被成れて下さり升せ 澤」いふも去くく涙聲を聞く源太夫は涙呑込み 源「コノ孫作殿聞かしやうたかこなたは知らぬ人じやといの 澤」スリヤ全く知る者ではあらざりしよあ 八「何様親の孫市なら母の命を携さへて石山へも参るまじシテ見る時は信長公へ兵糧を送るに違ひなし」源太夫が細目をゆるせ 孫子「畏

つてムリ升る 澤」ハッと答へていましめの繩は解けども解けやらぬ胸を極めて 孫「スリヤ私めのお疑ひは 澤」ナ、信長公へ二心なき志しを顯はすからは親女房は申に及ばず雜賀根來の門徒ども改宗の上は命は助ける勝手たるべし 豊「シテ又其子の成行は 八」鈴木の一簇孫市の子とあれは今より住吉の陣へ送り逆礮は案の内 豊「そんなら可愛やあの子には○コリヤモウぞうも 豊」ア、モンお家様此身は厭ひり致し升せぬ知らぬお方に御難義を掛けしお詫びは冥土から 澤」致し升ると泣沈めば源太夫も眼をまばたき 澤」何事も約束づくぞうぞ了簡して下され○イヤサ了簡せいとはこつちの事コノ孫作殿今の詞で了簡をしてやつて下され 孫「憎いやつとは思へども私ならぬ天下の囚人早くお連れ下され升せ 澤」立派にいへど心には是が此世の別れうと思へはいと不便さの彌増す涙喰ひしばかり 孫「お疑ひの晴れたる上は兵糧の義は源太夫殿お願ひ申我等は直様跡より夫へ 源」そんなら早う来て下されこなたが居いでは何かの事が○イヤサ何かに付て邪魔をがらせめて夫迄此子と共に 豊「左様なれば旦那様お家様にもお子様にもモウ此世では逢ひ升せぬ 豊」ナ、 豊「早う引て下さり升せ 澤」父が詞を呑込みし利發者程親々の心は千万無量の思ひ婆々も涙の片折戸明けて夫とはいはねども血筋の別れ垣山の四鳥にからむ親と子が中を隔つる八平藤六うなつき呷く様子をば悟る孫市悟られじと袖を分ちし野邊の露涙々に出て行待間遅しと母紀の路

臥戸の内を穿るび出ト紀の路いさりながら出て来り」紀「いはう様かい人でなしうこ動く
 まいぞ」母「いひ寄り這寄りいさり寄り頼頼んで引すへれば是はと驚く嫁夏子 孫「ア、モン
 母様御病氣揚句に荒々しいマア待て下さり升せ 紀「エ、嫁女止めてたもんな聞けば聞く程
 大腰抜けめが 孫「拳を振上げ丁々引すへ引伏せ聲ふるはし 紀「エ、どうしたら腹がいや
 うぞ 孫「いひさま取つて突放せば孫市も今更に何といひ寄るよすがもなく只伏し沈む計り
 あり見るに夏子はたまり兼 夏「其お腹立もお道理様ではムリ升れど是には何ぞ様子の有る
 事どうぞお慈悲に御堪忍遊をして下さり升せ 孫「お慈悲〜と孫の手を合して詫る心根と
 不便と思へど涙を紛らし 紀「コレ嫁女わしがろなたに詫たいわいのう〇コリヤ不所存者嫁
 の手前も面目ないかのれが根性の腐り様御本山の大事を見捨て戻つて来たさへ憎しと思ふ
 に敵へ俵米を送りしも親の難義を救はんどの心はかのれの臆病から其名を包んで肉身の子
 を無慈悲にも敵方へよう渡しかつたなア御開山の御恩を忘れ御本山を見限りし其佛厨は是
 を見よ 孫「親は腰さへるゝ立す子は盲目と成りしぞや 紀「其かのれに引替へてコレ嫁女
 の姿を見よ姑の介抱子の養育食事もあらぬ此野原に浮世を忍ぶ艱難もみんなかのれに功名
 とさせんが爲の夫トへ操女でさへも此様に御宗旨大事と思ふに似す子を殺しても助りたい
 とは母にも劣りし大腰抜け親と思ふを子でないぞ 孫「猶も烈しき母親の怒りに孫市思案を

極め 孫「女房去らばじや 孫」と立に懸るを押留め 夏「コレこちらの人只一言のお詫もせず行
 くは心に叶はぬのか様子があらばどうぞ聞して下さんせいなア 孫「歎げく妻には目もかけ
 ず 孫「様子といふは母人の仰せの通り命が惜しさに石山を見限つて戻りし某夫も母の難義
 をば救はんどの心なれども御意に入らずはふ心任せ隙取つてハ兵糧が手延ひと成る母の心
 は知れてあるわい 孫「態と聞かせる埋伏の手前と知らぬ母は詰寄り 紀「母の心が知れて有
 るとはおのれは勘當承知じやな 孫「此方からは望まねど親の仰せは是非もなし 夏「ナ、可
 愛い子さへ敵方へ渡す邪見な心での勘當は厭はぬ善行くなら此子を連れて下さんせいなア
 孫「エ、たはけ者め只さへ急ぎの道中に目がいの見へぬ子を連れて行かれうと思ひ居るか
 夏「親御の勘當得心なれば大方私に暇くれるもお前承知でムんせう男の子は男に附くが當
 り前とつと、連れて行かしゃんせいなア 孫「と我子を夫トの膝に突附け 夏「夫共お前迷戯
 なら母様にお詫する氣はないかいなア 紀「ア、コレ嫁女何のあいつに入らぬ詫び犬畜生に
 構はずとわしと一所に 夏「左様でもムリ升せうが 紀「ハハ扱アリヤ人ではないわいのう 孫「
 母の詞に嫁夏子跡に心は残れども是非なく誘ひ入りにける流石氣強き孫市も突附けられし
 幼子に行くにも行かれず抱さしめ氣はくらやみの村雲も晴れて傾く月の海原ト後ろの黒
 幕を切て落すと一面に荒海の遠見此遠見に火入の月を出す」 孫「ヤ、此月の廻りでは最

早夜明けに程近し時刻移さば手筈の相違ッレ淨」と立んとすれば取廻り子「爺様連れて往て下され 孫エ、時も時折りも折りとてうちがどうマア連れて行かれう待て居い 淨」といひ捨て門へ立出れば共に探つて出る幼子 孫エ、躓てはあふない程に母の傍に居てくれ 子「イエ、今婆々様がお前は子ではないとの事男の子は男に附くのじや 孫エ、其賢いが親の難義コリヤどうしたらよからうなア 淨」行けば取附き戻れば跡に躓く手がせ足がせの子は盲目のいちらしく行惱みたる折こそあれ馳來たつたる以前の粗子「ト向ふより以前の粗子二人明松を燈し走り出て來り」○御主人には何れにふる △「シテ跡々の様子は如何に淨」と呼はる聲に鵜淵藤六尾花押分けすと出 藤六「氣遣ひ致すな跡に留まり承れば親に勸當されて迄兵糧の運送急ぐは最早俵米に氣遣ひなしイヤ何孫作其方が働きは披露の上にて沙汰すべし家來急げ 兩人「心得升た 淨」いひ捨て、ころ急ぎ行跡に孫市氣もそゝる 孫「南無三是に遅れては信長を討つ計畧も鷗の嘴の喰違ひ 淨」何と詮方泣子も不使行たし跡も氣遣ひと千々に惱める病所をは這出る母が探り足隔てぬ中の内と外 孫「不便ながらモウ是迄 淨」我子の肌を押しつろげ口に念佛胸元へ突込む母と幼子の魂断る聲に驚く女房夫と見るより打驚き 夏「ヤ、コリヤ母様には何故の御生害 淨」といふに悔り鈴木孫市 淨「何母人には御生害とあ 淨」と入らんとするを押止め 紀「ア、コレ俸其門口を明けまいど 兩人」

何とあつしやる 紀「わらはが自害は孫市へ面目なこの此覺悟嫁女濟まぬ事をしたわいの○七年此方逢はぬ子を犬畜生と罵りし此母が愚かさを始めて知つた俸の心底豊若を渡したも信長殿を討たん計畧跡に残りし敵方の詞で知つて見る時は如何に子とはいひながら生ては顔を合せぬ早まり子を二人迄殺しても心變せぬ丈夫な魂夫でこそ石山へお味方申せし鈴木孫市左程健氣を俸をば佛の罰と悪口せしは罰は返つて親の身に廻るも早き此苦しみ二人の子供は此婆々が死出の山路も三途の川も両手に引いて行くわいの 夏「エ、ろんなら弟孫吉にも 孫「不便乍らも手にかけては親懇様への報謝と諦めゆるしてくれよ女房共 淨」と詫る心のせつなさを實にもと立聞く源太夫「ト橋掛りより源太夫出て來り」源「其歎きは尤なれど豊若殿を渡した故心をゆるし燒草を兵糧と存分思ふて小雜賣口迄引出したればちつとも早う孫市殿」と進むる詞に孫市勇んで 孫「いふにや及ぶ出立の仕らん 淨」早出立と内に入り笠携へるを母は聲かけ 紀「コレ孫市假染めながら勘當といひしろななに尋るも耻かしながら冥途の土産に 源「信長めを燒殺すこなたが様子を 夏「お聞かせ申も追善供養 淨」いへば孫市打うなづき 孫「現在俸を見殺しになせしも佛敵信長を討んが爲め火術の燒討ち 淨」今引かせたる兵糧の俵と見せしは火薬の燒草彼天王寺へ引込ませ時を計つて炮發せば烈火四方に散乱なし午の惣身焦るに隨ひ 孫「敵信長が本陣へ眞一文字に駆入らせ 淨」雜兵士卒

の嫌ひなく四足に蹴ちらし角にかけ先陣後陣小荷駄の陣さんぐに駆籠ましようたへさは

と虚に乗し 孫「味方の伏勢八方より引包んで討つならバ此度こそは織田信長餘も討洩らす事もあるまじ 孫「雜賀根來を燒討せし其返報や親子の仇成佛あれや母人様 孫「手立の程を打明す詞に母は嬉氣に 紀「連れ計策最早信長の首見し心地嬉しう成佛するわいの 夏「其悦びに引替へて可愛や兄も命をば 源「捨に行く身の憂旅路 孫「冥土の案内は母と孫 紀「ちつとも早うあなたの傍へ 夏「そんなら是が 孫「早か去らば 孫「涙は野邊に置く露の草踏分けて出て行「ト紀の路は懐劍を抜き笛をかき切りがつくり成るを源太夫抱起す夏子は子役の吹替の死骸を抱取りモンと別れを惜しむ此内孫市花道へ行き是を見てツカ〜と舞臺へ戻る紀の路は心附て手を合せる皆々愁ひのこなし宜敷段切にて幕

五幕目 鈴木飛騨守最期別れの場

一鈴	木	孫	市	一富	嶋	頼	母	妻	花	の	井
一鈴	木	飛	騨	一孫	市	一子	豊	若	丸		
一片	桐	助	作	一腰	元	綾	野				
一下	間	法	橋	一	同	撫	子				
		頼	廉								

一簾	中	春	日	の	前	一同	早	百	合
一下	間	少	進	妻	臺	一同	勝	見	
一栗	津	右	近	妻	待	一侍	四	人	
一七	里	河	内	守	妻	露	芝	一	人

造物通り常足の二重塗榎欄間見附花鳥彩色繪の金襴橋掛り戸家口杉戸の見切都て本願寺奥御殿の模様幕の内より腰元綾野撫子早百合勝見銘々秋草を入れし花筒を前に置き扣へ居る琴唄にて幕明く 綾野「何と皆さん算へて見れば丁度七年お庭の花さへ快う見た事もない長の籠城はつとしたではないかいなア 撫子「夫も飛騨守様のお骨折りに敵の大将信長には天王寺の敗軍より懲りたと見え國へ逃て歸つた成り今に來ぬとは嬉しい事じやあいかいなア 早百合「サア夫故御臺様を始め新門様の御簾中も久々のお慰みとて日々の琴の組物夫にけふは御家老の下間頼廉様のお催しにてお能を御親子様の御覽に入れるとお支度最中勝見「其お催しに負けまいとこちらは御家老頼廉様の奥様よりのお差圖にて御簾中への捧げ物シタガ又敵方より芥川の東とやらへ陣が見へるじやないかいなア 鏡「そんなら又軍事で三人「ムんすかいなア「ト奥より春日の前襦衣装にて出て來り「春日「是はしたる常さへ我夫マ上人の歎かせ給ふ織田との合戦其御苦勞が積もり〜て此程よりのおしつらひ夫故下間

頼廉より心盡しの能興行折角お忘れ遊ばしたを又思ひ出す軍の禮此後は成り升せぬぞ

八十四

是は御鹿相申升た 四人「御免被成れて下さり升せ」ト向ふにて「 豊」イヤ御殿へ 四人「上り
升せう」ト向ふより臺待宵露之花の井片はつし襦袢衣裝名々秋草を入れたる花筒を持ち出て
來り「 豊」是はく御簾中には夫にお渡り遊ばし升るか 侍賢「長々の御籠城中無お氣鬱と存
じ升て 豊」夫トくが差圖に隨ひ今を盛りの庭の秋草 花の井「御賢覽よ供へんとは是迄持
參 四人「致し升てふり升る 豊」うなた衆の心遣ひ 豊「まづく是へ 豊元四人」お通り遊ばさ
れ升せう 豊「左様なれば 四人「御免被成れて下さり升せ」ト舞臺へ來り」 豊「承はれば東の
方に敵の旗色が見ゆるとの事○イエサ其敵方にも飛驒守殿の智謀によつて勝利を失ふ事凡
七年如何なる我慢の信長でも滅多に寄せる氣遣ひをけれとナア申皆様 侍「本に左様でふり
升る譬にもいふ油斷大敵コリヤお上人へは御内分のお咄しをれと敵も名に負ふ織田信長何
れ早いか晚いにせよ又押寄せるは知れた事 豊「假令敵が寄すればとて飛驒守殿孫市殿のあ
る内と譬て申さば此秋草味方は佛力名号の功力を頭べにかざしの強さは金剛草とも申升せ
うか 花の井「夫に引替へ敵方の朝日に向ふ朝顔の口影待間の盛りにて終には委ひ佛野の報
ひも今は白菊をれと 豊「頼て軍も破れ連其時ころは目に物を敵は鼠尾草首迄もおとざり草
の死人花 侍「其高名の私共がつま紅ひの男へし左すれば今暫くの御辛抱遠からぬ内此花と

豊「共に開くる盛りを祝して 豊「私共迄 豊元四人「持參の秋草 豊「御覽被成れて 豊「下さ
り升せ」ト花筒を前へ直す」 豊「名々心を籠められて上みを壽く贈り物嬉しうムり升わいの
う」ト向ふより上下侍一人走り出て來り」 侍「ハッ申上げ升るお次きに扣へし頼廉様只今願
ひしお取次を早々御披露下されよとのお詞にムり升る」ト言ひ捨て這入る」 豊「チ、私共
とした事が我身の事に取紛ればたと失念イヤ申御簾中親鸞様のお名号に附き升て 侍「奇瑞
を蒙る孝子の話しをお簾中へ言上仕度しと 豊「御家老下間頼廉殿お次に扣へおられ升るが
甚「お目通りを免し升ても苦るしうはムり升せぬか 豊「頼廉は當寺の一老遠慮に及ばぬ是へ
と申しや 豊「畏り升た○夫に扣へし頼廉殿御簾中のお免しなればイヤ先づ是へ 豊「お通
り被成升せう」ト向ふにて「 頼廉「ハア、」ト向ふより下間頼廉惣髮裝着附繼上下よて出て
來り花道に平伏する」 豊「チ、珍らしや下間法橋此程は逢ひ升せなんだシテ同道せし孝子
とは 頼「ハッ」ト戸屋を向ひ」 頼「是をこな子はへく」ト向ふより豊若丸順禮の形りにて
出て來る」 豊「見れば我子阿茶丸と年月も同じ頃成る童へ子細は知らぬと法橋是へ 頼「御
免被成れて下さり升せう」ト豊若の手を取り舞臺へ來り」 頼「イヤ御簾中へ御挨拶」ト豊若
両手をつのへ」 豊「若丸」是は初めて御目通りを致し升る私事は鈴木孫市の一子豊若と申升る
者幾久うお目かけられて下さり升せう 豊「チ、愛らしい其詞スリヤ鈴木孫市殿の子息よな

紀州路より當山迄敵方所々に皆を掃へ奔の便りも成らざるにせうして爰へは誰人と來升たぞや 豊「ハイ父上と逢ひたさ故私一人参り升た 春「何をなた一人で 頼「サ夫に附ての哀れなみ咄しコレ豊若殿 豊「御簾中へ 女皆々「サア〜早う 豊「左様なればお咄し申でムり升せう○父上國を出られて終に一度の便りもなく七ヶ年が其間明暮母様婆々様と共に案じて居り升たれど武士の子として父上を戰場に置き参らせ故郷に居るは不孝の道母様婆々様にお暇貰ふて國元を旅立せしは三月跡 春「不審の晴れぬ其詞今こそ敵に隔てられ往來こそ叶はねど紀州雜賀は僅の道のり 豊「サア夫が此子の難義なみ咄しコレ私替つてお聞かせ申升せう○其國元を出しより斗らす道で捕らへられ住吉の陣へ送られしと申事 待「其言障のならざるも母御せより孫市殿へ送る手紙と親鸞聖人御直筆の名號を肌附たが誤りにて石山の廻し者に違ひはない切て仕まへと邪見にも獄家の内へ繋しと此子が申を聞升て俱に涙にくれ升た○ 春「夫からせうし升たへ 豊「サア所詮死る事じやと思ひ三月が間食事もせず御名號を唱て居り升た 豊「何と哀れな咄しではムり升せぬか併し親鸞様のお有難や或夜丑滿過る頃六尺餘りの大法師墨の衣に禪をかけ眠る此子をゆり起し父孫市に逢はしてとらさん我肩にすがれよと獄家連れ出し升たといなア 花「彼法師には北をさして走りしがいつの程にが姿もうせ當山の開山堂の格側に一人茫然立つたる此子 頼「様子を問へば右の段

々不思議と懷中を探りて見れば敵へ渡りし九字の名号と奔のありしは誠に奇瑞是全く孝心にて難を免かれしとはいひながら一つの開山聖人のお名号の有難や何と健氣な童へではムり升せぬか 春「未だ年端も行ざるに父を慕ふて憂艱難夫も信長當宗門を破却おさんと我夫々始め門徒を惱ます事の恨めしきよ斯程の奇瑞もあるものをなせ信長には爵を下し給はぬぞいのうト以前の侍走り出て來り」 侍「ハッ申上する羽柴筑前守秀吉殿の家來片桐助作と申者軍師鈴木飛騨守殿に面談致し度しと罷越してムり升る 頼「何羽柴が家來片桐助作とやらんが参りしとぞ 春「其秀吉とは智謀すぐれし者と聞く 豊「顔が猿も似たとあつせ 侍「猿面冠者と 皆々「申とやら 頼「軍師に對面せんとあるを某が一存にてばつ返す譯にも行まじ此段軍師へ通達なす迄白書院に扣へさせよ 侍「ハッ畏つてムり升るト向ふへ這入る」 頼「イヤ何方々御苦勞乍ら此由を 四人「お取次申でムり升せう 春「自らは是成る童へを孫市殿へ 豊「スリヤ父上には恙なうましますとぞ 春「味方に取て大事の大將恙あつてよいものかいのう 皆々「左様なればお簾中様 春「ドレ手を引てやり升せうかト春日の前豊若の手を取り女形皆々付添ひ奥へ這入る」 頼「音に聞へし羽柴秀吉俄に使者を差越せしは信長度ひくくの敗軍に手を置き和陸を乞ふか但し秀吉手立を以て陥入れん謀計成るか滅多に油断は」ト後ろにて」 呼び「お能の始まり 頼「アリヤモウお能の」ト扇を下に置くを道具替りの知

らせ」頼「ハテナア」ト思案のこなし此仕組み宜しく合方にて返し

造物平舞臺見附御葉牡丹紋散らしの金襴上下折廻り金襴の家体橋懸り戸家口杉戸の見切り大欄間をふるし都て本願寺廣間の体右の合方よて道具納る「ト向ふより片桐助作麻上下の拵らへ是を小手脚半袴高股立襷鉢巻の侍四人半弓に矢をつがへ取圍んでツカ／＼と出て来り」助作「コリヤ某を何と被成る」○「ヤア何とすると愚かな一言」△「いまだ軍師よりか詞も下がらぬ内」□「是へ推參致せしは油斷のあらぬ當寺の敵方」×「イデ我々が」四「一矢をもつて」助「ヤレ早まられな方々軍師の許しあらずといへ共片時を争ふ天下の大事失禮御免」四人「何と」ト舞臺へ来り皆々を取て投のけ」助「下より升せう」四「うぬ手向ひを」ト急度なる奥にて」飛驒守「者共扣へい」四人「ヤあの聲は」飛「當山の軍師鈴木飛驒守重幸使者へ對面仕らん」助「ヤ何と」ト奥より飛驒守直垂大口の拵らへにて中啓を持ち跡より太刀持飛驒守の太刀を持付添ひ出て来り」飛「スリヤ御邊が羽柴筑前守殿よりか使者よな」助「如何にも拙者事は秀吉が家來片桐助作と申者」飛「片桐殿とはお事にて候ひしか我こそ鈴木飛驒守重幸」テ秀吉殿より使者の子細は」助「他聞を憚り候へばお人拂ひの儀を願ひたし」○「我々を遠ざけんとは」△「とさ」と伺ひ味方の軍師」×「飛驒守殿と刺違へ」□「勝利を得んどの秀吉の謀計」○「滅多に御油斷」皆々「被成升るな」助「拙者も片桐助作且元卑怯未練の刺客に

あらず疑はしくは大小共重幸殿へお渡し申さん」ト大小を差出す」飛「アハ、ハ、刃ならで人は討てぬか我劔戟を振らすといへ共信長殿の大軍を毎度微塵に打碎けり上人慈悲の心なくんば皆殺しになさん事飛驒守が胸にあり刀は元より身の守り貴殿のお首に恙なきやう會釋に及ばぬ其儘」助「然らば貴殿の仰せに隨ひ」ト大小を取て傍へ置く飛驒守も太刀取りの太刀を取り」飛「サ一同遠慮致せ」皆々「でも」飛「ハテ扱立と申に」皆々「ハア、」ト太刀持は奥へ四人は橋懸りへ這入る」飛「レテ秀吉殿より密用とは」助「サ其口上の趣きは飛驒守殿」ト互に油斷をせぬこなしにて刀を傍へ引寄せ息込みにて」助「貴殿の命を所望に參つた」飛「何と」助「サ、一通りお聞下され」○抑本願寺信長公と年來合戦やむ時なく仇も仇を重ねたる其根本は何事にて候ぞや信長荷しくも都の仰せを蒙り逆徒征伐の便りに石山を所望のある所不得心の返答は信長面目なきものといはんか去り乍ら押への城地石山に限らざる故其儘に差置かるゝの所三好を誅爵の爲野田福輪に赴くの節門徒の者共堤を切て水に溺らし多くの軍勢を失はれし事は信長公本願寺を恨むるの意趣なり此義は恐らくは鈴木氏の所爲と存すれ共本願寺といふ目當なれば上人の計らひに相成り信長公を始め末々迄憤らざる者あらじ此義は貴殿の謀畧成るか但し上人の差圖でゐるか」飛「コハ異なる事をいはるゝもかな元より織田家に恨みかけれど當石山を無体に所望し其望みを達せされば即時に軍勢

を差向けんどの憤り依て勤めて籠城なし武勇の程を知らせん爲天満の陣を水に溺らせ先づ合戦の手始めに一泡吹かせ獲らせしは信長殿の御一言止を得ざる所にして尤上人の御存じなき事況んや出家の御身たる故敵味方共多くの討死あらん事を歎かせ給へば某聊か謀畧なせども死亡なきやういたはるが故未だ合戦の勝負を決せず上人軍を好き給はば信長殿の御首も今違胸に附ては居るまじ 助「スリヤ推量に相違なく貴殿一存の計らひにて上人には御存じなきとぞ 飛「如何にも 助「何様慈悲を旨となす法師の身なれば左もあるべし然し貴殿の毒 飛「匹夫の勇とは無禮な過言某信長殿と云の言を削るは國を争ふ合戦ならず佛恩報謝の其爲に力を尽す飛驒守 助「+顯如上人一城の主にて武を元とする將ならば信長公と誠を争ひそこ元随分智畧を廻らし敵を破るも尤なれど一宗の本寺として佛法教導あるべき僧が假令百戦百勝あるとも詰り互の得益にあらず貴殿宗門信仰にて佛恩報謝の爲ならば出家にして念佛の門に入り宗門不退轉の陳言こそあるへきに返つて門徒を屬すは萬一合戦討勝つ共佛名一遍の功力にも優る事は餘もあるまじ 飛「ヤ 助「サコリヤお咄しでムるが當時信長公には都の君より四海の政治を任せ給ひ既に敵ヶ國を平らげし其勳功によつて内大臣に任せられ勢ひ日々に強大なり若し信長公運ふ乘し將軍の上みに位する時は如何程上人心を

碎き貴殿力を尽す共勤うす事は成るまい〜つゝいまる所は居負け根負け智謀が返つて災ひの基ひならずや○爰が貴殿と御談合信長公の思召しは是迄敗軍の耻辱ある故勝利を得ざる其内は軍を納めぬ御心匠夫と申も只今では石山所望の御念もなく只耻辱をば雪がんと思ふ相手の御邊一人所詮貴殿石山の城中に有る内は信長公を始めとして士卒迄も本願寺を恨む道理に候はずや依て貴殿石山を離れ自分の智謀勇戦ささは宗門の妨げにも相成るまじと某主人筑前守諸軍の戦勢當宗の行者を修羅へ道引き百姓塗炭の苦みを見るに忍びますと元と雌雄を一舉に決せん心底若し御邊諸人を哀れみ宗旨信仰の思ひあらば戦場を差圖して早く出張せられよと主人秀吉某を以て申越さるゝ使者の趣斯の通りに候ぞや 飛「ハ、ア誤つたり〜我元より志を念佛に傾け山林に隠れ住むの所宗旨の滅亡見るに忍びず爰に來て毎度敵を敗るといへ共只一旦の勝利にして武門の譽れと成るにもあらずまじいに防戦して日を送る程上人の身には仇なる飛驒守如何にも今日退去なし秀吉殿と一戦に互に雌雄を決すべし某討死有る様を信長殿の見参に入れ奉り度く存すれば俱に向はれ候様よきに御披露下さるべし 助「スリヤ承引下さるとぞ 飛「如何にも羽柴筑前殿の望みには任せんが我を謀り殺せし上當山を攻め給ふに於ては重幸死すとも其恨みやほか晴らさで置くべきか御邊歸つて秀吉殿へ誠の心にあるならば信長殿を諫められ不義の合戦あるまじくと傳へられよ

助「其義は仰せ迄もなく誓つて再び石山へ軍勢は差向けまじ申テ戦場のお望みは 飛「此方望む所なし承はれば秀吉殿芥川に陣をすよし貴方さへ苦るしからずは我小清水へ出張なし存亡の合戦なすべし 助「流石は飛驒守殿戦地を撰まぬ奇代の勇士然らば某立歸り主人へ此由言上致さん 飛「返すくも跡々の 助「其義は氣遣ひ仕召さるる主人秀吉武士にムれば 飛「其一言にて一つの安堵 助「左様ムらば重幸殿 飛「お役目御苦勞 助「急度詞をつがへ升たぞ「花道へ行き謀りおしせしといふ思入あつて向ふへ這入る飛驒守思案のこなし上手の家体より鈴木孫市袴形り追ッ取り刀にて出てツカ／＼と花道へ行くを」 飛「ヤレ孫市殿屹相して何れへムるぞ 孫市「ハテ知れた事軍師をおびき出さんと秀吉の猿智惠使者より切て猿面冠者を 飛「サ、心はやるは無理ならねと重幸思ふ所存もムればマア／＼是へ 孫「夫じやと申て 飛「ハテ扱お越し被成れと申に「ト孫市ツカ／＼と戻り」 孫「シテ其元の御所存とは 飛「是迄敵を討りし我も今又敵に討られて進退爰に谷まる重幸 孫「何と御意ある 飛「孫市殿○ア秀吉は智者でムる○我信長が大敵を取るとも始終の勝利を得る事あたはず夫と申も國々を切り隨へる軍ならねば終には兵糧武器に盡き敗軍なして數年の戰勞も泡と消へ上人始め僧俗迄如何なる難義に逢はんも知れず秀吉の謀計憎しといへども申所は理の當然いなまば返つて上人のお爲にならず信長が怒りを引受け當寺を離れて合戦なさは自然と敵の心も

和らぎ宗門も立置かれん敵の手立と知りながら最期を遂げる心の内を御推量下されい 孫「御尤にはムり升れども偽り多き表裏の信長 飛「其義は氣遣ひ仕給ふまいかにもして信長を冥途の連れに致さん心底 孫「スリヤどうあつてもそこ元には 飛「夫に附て無心あり御身とても敵方にて名を知られたる大將なれば我討死の其跡は信長に降参なし故郷犯爲へ退ぞかハ敵にと猶も安堵なすべし 孫「コハ血迷はれしか飛驒守殿そこ元の最期すら味方途を失ふべきに某に迄降参せよとの宗門不信の孫市と見られしか素より邪智の織田信長不意に寄せんも許られず其時誰が敵を防ぎ上人を守護なし申ぞ 飛「サ、そこが今端の我謀計萬一秀吉攻めんとせば貴殿犯爲の難質にあつて五畿内の御門徒に下知をなし戦はば是又恐るゝ事あるまじ死すも謀るも宗門のお爲と思ふて孫市殿我遺言をお用ひ下され 孫「憎しと思ふ信長めに降らん事歎かはしくは思へどもそこ元の御意なり且は宗門のお爲とあれば残念ながら敵方へ 飛「スリヤ聞入て下さるとか○ハ、ア忝なし其一言を承り心に懸る山の葉もなし「ト是を時の太鼓に成り」 飛「今打つ太鼓は未の刻イテ小清水へ打立ん 孫「ヤレ待ち給へ重幸殿せめて最期の盃なりと 飛「何様一家一門の因みによつて宗門の難義を救ひ奉らんと互に力を盡し合ひ千辛万苦の甲斐もなく死に、行く身の重幸に名残りを惜しまれ給ふのも無理にはあらねど討勝たば法敵織田信長が首捨切つて歸る出陣負けなば最期は軍の道必らず

別れと思ひ給ふな 孫ではムれ共 飛「ヤ夫が九死一生の合戦○先づは淨土の客たるべし」
 トツカ／＼と花道へ行くを 孫「去りとはつれなきお詞かなそも國元を出てより寢食とも
 俱になし明暮軍事を相謀りし重幸殿の最期の出陣別れを惜しまて何と致さうせめて今際
 御願なりと 飛「ナ、ト花道に住居」 孫「孫市殿○思へば夢でムつたのう 孫「ア争ひぬは
 艱難の 孫「今ころ思ひあたりし重幸 孫「あたら勇士を 飛「貴殿は御無事で跡々の義を 孫「
 孫市委細ト胸を叩く重幸じつと思入有つて」 飛「重幸出陣ト戸家の内にて」 大勢「ハア、
 「トせんちやんを打込む」 孫「然らば是が 飛「お去らば」ト思切つて向ふへ這入る奥より頼
 走り出て来り」 頼「ヤレ待れよ飛驒守殿委細の様子承つた上人留め給ふぞや重幸殿」
 「ト行うとするを」 孫「頼殿待われ貴殿の程追はるゝとも思ひ返さぬ覺悟の出陣 頼「
 スリヤとつても重幸殿には 孫「出て再び歸らぬ御最期」ト奥より春日の前先に臺待宵露
 芝花の井付添ひ出て来り」 春「スリヤ飛驒守にはけふを最期の合戦とな 頼「御簾中 四人」
 御家老様 皆々「ハア、ト涙に泣く」 孫「其お歎きは去る事ながら是皆當山の御爲と遠く
 計りし拙者へ遺言夫に附て孫市めも敵へ降参致し升ればよきに顯如上人へ御披露願ひ奉る
 春「さうじや」ト自害を仕様とする」 孫「コリヤ何故の御生害 春「何故とは恨めしい重幸殿の
 討死さへ歎き思ふ所なるに孫市殿迄降参とは誰を力に此後は敵の囲みを防ぐべき憂き死耻

を見んよりは上人初め自らも死る覺悟で居るわいの 頼「御簾中の仰せの通りそこ元方のあ
 るを以て味方の士卒勇みをなせど其軍師には討死おし大將敵へ降りなば留まる者のムらう
 か兎にも角にも上人の御運の末と存じ升れば俱に最期の仕らん 孫「私共にも 皆々「死出の
 御供」ト懐劍に手を掛るを 孫「ヤレ早まられな何れも方某敵へ降らん事も皆上人のお爲に
 して敵を討らん一つの謀畧今日國より尋ね参りし一子豊若を人質に留め置くが身の潔白○
 豊若は何れに居る豊若」ト橋掛りより豊若椅形りに着替へ出て来り」 豊若「父上御用で
 ムり升るか 孫「チ、父は今より信長に降参なせば其方は此御寺に留まつてな父に代つて御
 開山への奉公せよ」 豊「そんならあなたは降参するのでムり升るか 孫「チ、夫も上人様や
 御宗門のお爲じや程に若し敵方より攻来らば一番に切て出て討死なすともおくるいな 豊「
 何のおくれを取り升せう婆々様や母様にお別れ申し難義をして参り升たも父上と共に軍を
 する心死るは更々厭はぬぞ七年目にて漸うとか目にかゝりし父上に又お別れ申のが私しや
 悲しうムり升る 孫「チ、其悲しいは無理ならぬぞ敵を討つべき手立なら必ず未練な性根を
 出すな 豊「ハイ 孫「チ、思へば大さう成りやつたなア」ト天窓を撫で涙を紛らす」 頼「スリ
 ヤ豊若を人質に 春「ア、さうあつても 皆々「孫市殿には 孫「敵に降るは鈴木孫市無念骨髄
 に徹すれども是非に及ばぬ場合にムれば 頼「せめて重幸殿なりと 春「勝利と成つて 皆々」

戻られかし「ト戸屋の内にて」○「ヤア」何れも軍師鈴木重幸殿には一度ひ敵を徹座におせしが終に乱軍の其内にて味方残らず討死おしたり此段上みへ 大勢「御披露」
スリヤ軍師重幸殿には 春「早最期を」皆「遂げられしとを」孫「ア斯くとは知れど」皆「孫市殿 孫何れも」ト扇を開くのが木の頭「皆「ハア、」ト孫市は扇を顔に當る皆々こ泣伏す此仕組宜しく鳴物なしにキザミにて暮

六幕目

〔北野天満宮鳥居先の場
農民権四郎住家の場〕

役名

- 一百 姓 權 四 郎 一 羹 賣 屋 亭 主 善 八
- 一 鈴 木 孫 市 一 茶 店 亭 主 市 兵 衛
- 一 鈴 木 飛 驒 守 一 紙 屑 買 吉 兵 衛
- 一 庄 家 奎 右 衛 門 一 接 摩 菊 の 市
- 一 百 姓 又 九 郎 一 千 ヶ 寺 參 り 猿 松
- 一 片 桐 助 作 一 油 賣 六 兵 衛
- 一 宮 内 八 太 夫 一 百 姓 二 人

一年 寄 甚 右 衛 門
一同 久 兵 衛

一家 茶 四 人
竹 本 連 中

造物平舞臺真中石の鳥居左右玉垣後る北野本社の中遠見上の方羹賣店の入口下の方段賣園ひの茶店能き所に鈴木飛驒守探索の高札を建わり是に床机二脚並べ空より松の釣枝都て北野天満宮鳥居先の模様上手の床机に菊の市按摩盲目のこなしにて小皿物で酒を呑み居る此の傍に吉兵衛紙屑買の拵らへにて鉄炮糸と秤を置き矢張酒を呑み居る下手の床机に猿松千ヶ寺參りの拵らへにて葛籠を背負ひ茶を呑み居る上の方に善八羹賣屋の亭主にてたんばを持ち立掛り下手に市兵衛茶店の亭主にて盆に茶碗を乗せ立掛り居る外に參詣の仕出し高札の前に立ちわやくいふて居る辻打にて幕明く 市兵衛「どなたも御茶をお上り被成升せ善八「ハイお燗直しが出来升た 菊の市「ナット是は有難い○外に着は有るまいかの 善「うる目のよいのがムリ升 善「盲らにうる目とは忝かい夫を持って來た 善「ハイ畏り升た 猿松「モシお前方高札の前に寄りかゝつて 六兵衛「何を見て居るのでムリ升 △皆夜る手習した速中計りで 大勢「分り升せぬわい 吉兵衛「扱は盲の垣覗さといふやつじやな 善「ヤイ盲とぬうすはどいつじやい 善「ホイ是は按摩さん「ヤア了簡さつしやい 善「時よお前方此高札の譯を知らぬのかいの 善「知らぬに依て尋ねて居るのじや 市「是程の金儲けを知らぬとはどう

じやいな 菊「何じや金儲けとは 皆々」どういふ事じやの 善「譯は斯うじや何が七年以前から石山の本願寺と信長様とのゑらい合戦 皆々」夫の知て居るわいの 善「其石山方に鈴木飛騨守といふ軍師が有るじや 皆々」夫も知つて居るわいの 善「其わろが先度小清水の合戦に討死したと思はつしやれ 皆々」夫も知つて居るわいの 善「夫じや皆知つて居るのじやがな市」所が討死をした敵方を調べた所が飛騨守一人知れぬさうなサア夫から寄せ手が騒ぎ出しひよつと此世に長らへてと又どの様な事仕居らうやら油断の成らぬ飛騨守若し見附た者が有つたなら羽柴殿の旅館迄訴へるともく、つて出ても首切るとも褒美は望みに任すと有るコソ此通りの高札じや 皆々」コリヤゑらい事を聞たわい」ト向ふより宮内八太夫絆纏股引脊割羽織大小にて十手を腰に差支家來一人付添ひ出て來り」八太夫「其方は庄屋方にて相待居れ 家來」畏つてムリ升る」ト引返して這入る八太夫舞臺へ來り」ハ「コリヤ其方共の當所の者か 皆々」イエ皆參詣の者でムリ升る ハ「シテ先達て役所にて申渡せし飛騨守の手掛りは有りしか 市」へイ只今も其事を申て居る處でムリ升るが 善「今にとんど分り升せぬやうにムリ升る ハ」萬一見逃がし扱致しなば從類迄も絶やすと有る信長公より殿しい御上意心得違ひのないやうに致せ 善「心得升てムリ升るらんなら其積りでよされ者でも洗ひ升せうか 市」こちらは水を汲んで置かすば成るまいて 皆々」私等は參詣せうか 善「左様なら

お役人様 皆々」ドソ往て來やうの」ト善八は賣賣店の内へ市兵衛の手桶を提げて橋掛りへ仕出しは鳥居の内三方へ別れて這入る」四人「八太夫殿 ハ」コレ〇シテ各々方の手掛りは 菊「我々は按摩肩躰油賣 舞肩買千ヶ寺參りとまで姿を變へて洛中洛外 言「丹波路邊迄尋ねれ共今に於て手掛りなきは 六」敵に首を渡すを耻ぢ入水なせしも計られず ハ」某連も左様には存すれども信長公の殿命成れば等閑に致されず 言「左様ムらば何れも方 菊「彼が實否を聞出す迄は矢張我等は按摩肩躰 舞我々とても其通り 六」ドソ商賣に掛らうか 言「肩イ屑はござい 菊「按摩針」ト八太夫先に猿松吉兵衛は鳥居の内へ菊の市六兵衛は橋掛りへ這入る向ふより甚左衛門久兵衛村の年寄りの拵へにて出て來り」 甚左衛門「いつも乍ら廿五日は賑ひしい事でムるの 久兵衛」サアお參り申ていに升せうかい 善「さう仕升せうわいの」ト舞臺へ來る賣賣屋の店の内より又九郎百姓の拵らへにて出て來り」 又九郎「善八さん跡の酒を附て置て下さい勿体ないが呑た酒をひよぐり出さねば成らぬわい 善「チ、ろこに居るは村の又九郎じやないか 又」チ、お前様はお年寄りの久兵衛様甚左衛門様も御參詣でムリ升るか 久」サア參詣は參詣じやけれど天神様は脇に成り天下様の御用に附て此頃では日參じや 又」ハア夫では矢ッ張りお尋者の事に附て 善「サイやいけふも秀吉様の御旅館へ呼び附られコリヤやい北野村の年寄共先達て觸れ渡したる飛騨守討死とは申せども未だ生死

分明ならず万一當地へ來つて信長公を附視はんも計られず彼が首見ぬ内は夜が寐られぬとの御上意成るぞ○とこないに大きな聲でいひ居つたが 久「全体是ハ庄家ぞんが出る筈なれど臆病者故年寄りの役の多さといふ者は袴の裾もたまらぬがな然しけふの仰せには若し飛驒守の居所を心得て居り乍ら見ぬ顔をするものは其當人が磔 又「エ、久「一家親類身寄りハ殘らず重いお咎めが有るといひ 又「そんなら見て見ぬ顔をする者はアノ逆磔○サアゑらい事に成て來た〜 葦「コレ又九貴様は何で其様にうるたへるのじや 又「是がうるたへすに居られるかいの〜 久「うんなら飛驒守様の 葦「有家でも 又「ゑら知りじやがな 葦「さうして夫は 兩人「何所に居るのじや 又「エ、ト心附く口を押へ〜 又「イヤ何にも知らぬ〜 ト鳥居の内より八太夫先に猿松吉兵衛出掛り見て居て」 八太夫「ソレ繩打て 兩人「腕廻せ」ト又九郎をねじ倒す」 又「モンコレヤ私をさう被成升る〜」 八「ヤア只今承れば其方飛驒守が有家を存じて居る様子役所へ引立 兩人「篤と吟味を 又「滅相な事かつしやり升せ私めは先祖代々當村の生れの者そりやお役人のお目違ひ 八「だまらう 又「へエ、イヤ存せぬ者がなせ只今知つたと申た 吉兵衛「隠し立て致すに於ては汝が罪は 三人「逆磔だぞ 又「ア、モン申上げ升〜」實は人に難儀の掛るが氣の毒じやと存じ升て隠し升たが何でも私の隣りの家が怪しい様に思はれ升るぞうぞ私はお免し被成て下さり升せう 葦「コレ貴様の家

の隣りといへば 久「權四郎じやないかあれは元紀州の生れとやら 葦「夫ではてつきりお尋者をば 又「サア私も見た事はあけれど權四郎が此頃の客が有つて家業もならぬといふかと思へば其客の形ちも見へず夜るに成ると咄し聲の聞へるは飛驒守かと思はれ升が違つたとて私しや知りやせんせ 八「イヤ飛驒守に相違有るまい 葦「此上は人数を差向け 吉「搦捕て信長公へ 葦「ア、モン其飛驒守といふわろは信長様の大軍さへ粉な微塵にした強い侍 久「若し捕手の衆が向ふてあばれ出されて御らうと升せ村の者迄皆殺しぞうぞ是は御了簡 葦「村一統のお願ひでムリ升る 八「イヤ氣遣ひ致すな篤と實否を糺した上の思案も有れば○イヤ何各方には相殺中に此段即刻お知らせ下され 兩人「畏つてムリ升る 又「今の事さへ云ふて仕舞へば肩拔じやドレ呑掛けの酒など往て 八「イヤ又九郎此實否を糺す迄は年寄とても掛り合ト又九郎に呷く」 又「スリヤあの權四郎を私が 八「夫も上みへの御奉公じやぞ 又「じやといふて 八「詞を背かば逆磔だぞ 又「ア、致し升誰もせぬとは申升せぬがな 葦「こちら迄も掛り合とは 久「ゑらひ目に逢ふものなアト又九郎向ふを見て」 又「ヤあれへ來るのは權四郎 言「スリヤあの者が 葦「匿まひ主とな 八「是へ來るこそ丁度幸ひ彼りを計る手立は此家で 言「葦「左様ムらば八太夫殿 又「ア、今の胸りで呑んだ酒が醒たわいト又九郎甚左衛門久兵衛は八太夫に附て美賣店の内へ吉兵衛猿松は橋掛りへ這入る向ふより權四郎百姓

の控らへにて出て来り」

百二

「お身の上に凶事ない様と此日參上願ひ申て來升せうか」ト舞臺へ來り鳥居の内へ行
うとする又九郎養賣店の内より出て」又「ア、權四殿何處へ行つしやる 權「チ、お隣りの
又九殿さのふは有難うムリ升たあんまり味ひ鮮故飯三膳喰ひ過ごし仕升たわいの 又「何の
其禮は入らぬ事こなさんも又私も獨身者無御不自由で有らうと思ふて折々物を進せるも皆
此内へ奉公をした餘りの肴じやけれど決して悪う思ふて下んすなや 權「チ、勿体ない事い
はつしやれ獨り者の悲しさにはおのれが手で稼がねば喰ふ事成らぬ貧乏人夫も此頃ではお
客人故 又「チ、其お客人で思ひ出したがかりやこなさんの内へ行うと思ふて居たのじや
權「ハア、又稻蒭の御用かな 又「イヤ其様な事じやないコレ權四殿殿「ト邊りを見廻し小聲
に成り」又「此建札の事に附ての 權「此建札に附てとはどこぞへ開帳でも出來升かの 又「
ろんなら此札を讀まぬのじやな 權「お耻しい事乍ら私しや無筆じやわいの 又「夫で知ら
ぬも尤じや私が讀んで聞かす程に必ず悔りさつしやるなや 權「何ぞ悔りでもする事かいの
又「マア聞つしやれ「ト高札に向ひ」又「一石山本願寺の軍師鈴木飛騨守といふ者の住所注進
致すか又は討取て差出す輩の卑賤凡下をいはず一族親類たりとも罪を赦るして御美品の
贈みに任せ申べき者也此者行衛知れざる時は再び本願寺を攻らるべく候間門徒の面々本願

寺を思はゞ別して早く注進すべき者なり○羽柴筑前守秀吉承之「ト權四郎悔りして花道へ
行うとするを」又「コレ權四何所へ行くのじや 權「何所へ行うぞおたりや知らなんだ」ト
うぞ放してやつて下され 又「サ、心のせきは尤じやがこなさんをいなしてはおたりや殺され
るわいの 權「エ、又「イヤ何殺しても出せといふ此飛騨守の此頃中から逗留のアノ客人で
ごんせうがの 權「エ、滅相な何のおの方が其様な 又「でも紀州邊からムつた客じやない
か 權「サア紀州邊では有るけれどあのお方は能い坊主様の弟子に成り出家したいと有るお
願ひ夫故内にムつて「ト養賣店より八太夫出て來り」ハ「イヤ權四郎とやら何も隠すには及
ばぬわい 權「ヤあな様は 八「身は當所郷代官の御内にて宮内八太夫と申者今日又九郎と
密かに同道致せしは一向宗門信者の者共人知れず本寺の軍師飛騨守殿を落さん爲○サ、お
觸れの嚴しき仁なれば隠し立も無理ならぬ世の上にては其方の家に逗留致す其者こそ飛騨
守殿なりと評判致せよ此北野邊は御門徒が多き故知つても知らざる体をさせども萬一他よ
り洩れたる時には其御仁のお爲に成らず此邊に有らん事甚以て氣遣はし我等は役人の事な
れば表向きの取沙汰が耳に入ては打捨て置かれず未だ上へ聞へぬ内早く當所を落さんと宗
門の者打寄つて態々是迄參つたり必ず心配致さぬがよいぞ 又「權四殿聞るゝ通のしぎ故に
皆打寄つての右の相談コレお年寄りサア來て下さり升せ「ト養賣屋より甚左衛門久兵衛出

百三

て来る」

百四

「甚」コノ權四郎貴様ハ感心な者ぢやの御本山のお爲と思ふて御苦勞有りし飛騨守殿今落目に成ればとてどう見捨て置れうぞいのう 久「そこで信心者が打寄つて拵らへて来た此品は甚だ些少成れども門徒中よりの志し是を路銀にお送り置き被成るやう我身に勤めて貰ひ度いわいの」ト包金と權四郎の前へ置く」權「左様なら皆お宗旨でムリ升たか三人」タイのう 權「又九郎殿不斷お世話に成る上に又重ねてのけふのお情け殊に御門徒衆が夫程に迄御親切いはぬは却てお爲成らねば何も角も申升るが實は逗留のお方と云ふは此高札の飛騨守様 皆々何とさう有らうかの 權「私は元鈴木様に下部奉公致した者御入城の其時にお暇が出て京の住居所が不思議に此間此馬場先でお目に掛り様子を聞けば軍に討負け石山へも歸られず元より出家の望み故忍んで京へ登りし成れど立寄るべき所もなく飢に瘦れし折柄に不思議に逢ふたは身の仕合せ一飯の所望がしたいと有るお詞せめて以前の御恩送りとお匿まい申たのも御出家にさへお成り被成れば夫で事は済む事と思ひの外な此建札知らずに居たは無筆の悲しささうした者と思ふた所へ御親切に路用の金迄被下ての今のお詞御主人に申上たら賑お悦びでムリ升せう 久「イヤ我々が知つたとあらば飛騨守殿も此金子を納めては下さるまい左すれば名々の信心にも成らず」コノ又九郎只今申附けて置た彼の品をナ〇ソレ早く進せたが能いわい」ト又九郎ふせう」のこなしにて」又「成程宜敷

うムリ升る」ト煮賣店へ這入り一升徳利を提げて出て來り」又「コノ權四郎此酒も門徒中からの送り物八太夫様のお差圖じや是で今宵はもてあしたがいわいの 權「ろんからか酒迄御門徒中から三人」タイのう 權「何から何迄お心附けられし下され物我才覺では御酒一つ上る事さへ叶はぬ身貧はは此儘お貰ひ申でムリ升せう」ト時の鐘に成り」權「チ、ありやモウ暮六ツ 甚「凶事のない内 久、甚「翌に限らず 權「左様なればお暇申升る」ト金包みを納め徳利を提げて花道へ行を」 久「ア、コノ酒とて其方の才覺にて調へしと申て置かねば相成らぬぞ 權「そりや又なせでムリ升る 久「ハテ何事も明から様に申時には彼人の疑ひ起すも許られず 久「夫では矢ッ張り此方共の 甚「志しが無に成る道理 權「御親切な方ぢやなア 又「何にも知らずに氣の毒な 權「エ、 又「イヤ何留守を氣を附て下されや 權「ハイお早うお歸り被成升せ」ト向ふへ這入る」 久「まんまと偽りおしせられたれば差詰め今宵は酒に酔臥し深く寐入るゝ相違なし左とれば寐鳥をさすも同然 甚「ろんなら村に氣遣ひは 久、甚「ムリ升せぬかな 久「何の氣遣ひ某討て差出せば即坐に身共の出世は大名 又「エ、ろんなら大名にでも成られ升るか 久「夫では私等も 甚「久「御褒美が 久「其褒美には訴へ出ぬ大罪を免るし遣はす」〇サ年寄り共庄家方へ 甚「左様ムらば八太夫様 両人「斯うお出被成升せ」ト甚左衛門久兵衛案内して八太夫橋掛りへ這入る」 又「何の事ぢや人にさんざ骨を折らして訴

百五

見るわい○待てよコリヤいつそおれが討つて大名に成つてこませ○花道へ行掛け」又「イヤ〜酒に酔ふても飛騨守コリヤ何さらすと天窓をグツト押へ附られたら眼の玉が飛て出やうヤレこはやの〜モウ〜是はお止めじや〜」ト舞臺へ戻り」又「然し百姓で暮すも一生又大名で終るも一生○コリヤ素面では成らぬわい」ト煮賣店へ這入り一升樹に酒を計り出て來り樹の隅から酒を呑む内にて「善八」サアあらい事じや酒の詰りを抜たは誰じや酒で海に成つたがさ」ト出て來り」善八又九さん途方もないコリヤどうするのじやいあ又「コリヤ大名の立呑みじや善八の詩をひつこ抜いて四斗の酒をぶちまけ乍ら立呑もないものじや又「エ、今に家老にしてやるは善八コリヤ氣が違ふたのじやな」ト又樹を取に掛るを又九郎呑干し」又「ア、息あしの一升は」ト善八の天窓へ樹をぶせるのが道具替りの知らせ」又「餘ッ程骨が折れるわい」ト生醉に成りしこあしにて善八を樹にて下へ押へ附ける辻打にて返し

遺物平舞臺一面の茅葺家根真中破風造りにしたる棟の煙出し見附真中納戸口左右破れの有る眞壁上方折廻り反古張の障子家体下手敷疊稻村松の登木此後ろ隣家の中窓いつもの所門口都て北野馬場先權四郎住家の体真中に圍爐裏を置き古き鐘子と掛けし自在竹を釣り權

四郎圍爐裏に蚊くそへをして居る破れし行燈灯しあり在郷頃にて暮明く 權四郎「ヤレ〜秋の末とはいへど此恐ろしい蚊といふたら口を明けて物も云はれぬ夫にしても早くお歸り被成れば善いが若しや途中でひよんな事でも有りはせぬかア、心掛りな事じやなア」ト床の淨瑠璃に成る」淨瑠璃「定めなき世は春秋の稍にてさのふの花の勢ひもけふはすがれし飛騨守身は落武者の果敢なくも浮世を忍ぶ目せき笠芒の穂にも心置く野寺の鐘のかう〜と叩く捕手に心も附かず」ト向ふより飛騨守五十日黒羽二重の一つ着大小深編笠にて出て來る跡より黒四天の捕手二人十手を持ち伺ひ乍ら出て來る」飛騨守「今打つ鐘はありやモウ初夜晝は人目を忍ぶ身の夜毎に歸る暫しの隠れ家權四郎にも待つらんさうじや〜」淨行んとなすを後ろより捕つたとかゝるを飛騨守打込む十手笠越しにかいくつたる早速の手練續て掛るを身を開らさ腕がらみに眞逆様砂をかぶつた捕手が弱腰力に任せて蹴飛すをコリヤさせぬはと來たるをば肘を返して投附られ二人は叶はず逸失せたり」ト此立廻りの内權四郎物音を聞き門口を明け見て恟りあし此時走つて來たり」權「旦那様 飛騨權四郎か」ト笠を取る」權「モン 淨「敬ひ我家へ件ひ入れ」ト兩人内へ這入り權四郎邊りを見廻し」權「旦那様」ト門口を〜」權「危い事でムリ升たなア」ト門口へ栓をさす」飛「何れより附けたるか我を伺ふ捕手の者共何彼し〜」權「サア夫が替の油斷大敵此家に長居は成り升せぬぞ今

飛「何ぞ申す 權」サアお聞被下升せ此間よりあなたのお身に恙がない様天神様への願参り所
 が今日建札を見ればあなた殿の殿しい御詮議聞けば薄々此村にお出の様子を沙汰する由南無
 三御身に凶事でも有つてはと一目散に歸つて見れば今のしきお前様のお身に附てと大体な
 事じやムリ升せぬぞや 飛「よ、存じてゐる 權」サア其様に騒がぬ御氣性今にあなたのお心
 に叶ふた法師がムリ升せずば明日は何國へ成りと此權四郎がお供なし共に出家が仕度い願
 ひ翌はどうぞ且那樣お立退き被成れて下さり升せ 淨「眞實見へま言の葉に飛驒守打うなづ
 き 飛」其方逆も知る通り劔難の相有る某刃で死すと覺悟の致せと出家と成らば存命を致す
 事も有らんかと未練成れ忍びく〜良き師を探せと其師を得ず根來寺には予が知音の智識
 の僧もかわすれば翌は發足致さんと存じ居つた所じやわい 權「ヤレ〜嬉しやコレ御らう
 じて被下升せ是非お供を致す心で聊か成れと路用の金子お立祝ひの御酒迄も整へて置き升
 た」ト以前の包金と徳利を出す」飛「何うら何迄其方の才覺然らば今宵は打くつろぎ 權」此
 頃中のお氣詰りを 飛「うちが情で晴さうか 權」ヤレ勿体ない〇ドレ拵らへを致し升せうか
 淨「氣も軽々と權四郎奥の一間へ行く跡を飛驒守打見やり 飛」よ、〇我短慮に依て秀吉が謀
 略に備へを碎かれ味方盡く討死せしが何卒して信長と討つて宗旨の災ひを除かん者と敵の
 勢に引添ふて此都に身を忍び日々伺へども秀吉が下知嚴重にて今に本意を達せぬ無念さ

某生てある時は信長本願寺を憎む事前の如くに相違なし切腹成して相果んと 淨「刃の柄に
 手は掛けしがイヤ〜假令死すとも信長が馬前に於て討死せば少しは耻辱も雪がんかと
 飛」夫故隠れ忍ぶと知らず出家の望みを誠と思ひ古主をかばふ志し 淨「嬉しいぞよ 飛」我は
 覺悟の上なれども權四郎に難義を掛けんも不便の至り翌は此家を發足なし 淨「假令野山に
 伏す逆も信長が他出を待て 飛」切死なすが身の覺悟〇とはいへ思案の相違なし佛神三寶如
 來に迄見放され武運の末と思へば無念口惜しやなア 淨「流石勇氣の重幸も身の薄命を悔み
 泣き斯く共知らず權四郎奥の一間を立出で」ト奥より權四郎ふちの取れたる盆の上に盥
 を盛りし皿と茶碗を乗せ持ち出て來り」 權「且那樣お旅立をさつと祝ふて盥盥お頭附さで
 ムリ升る 飛」チ、盥盥とは好ましい 權」ろこで燭をする徳利はなしいつろ酒の丸焚きと致
 し升せうかい 淨「といひつゝ徳利を圍爐裏に突込み 權」先づか盃はあなた様から」ト茶碗
 を前へ置く」 飛「チ、忝ない 權」然し乍ら且那樣七ツの鐘がゴンと鳴つたらお起し申手積
 りで辨當も二人前詰めて置き升た 飛「イヤ何權四郎一所に行んは如何おれば某一人根來へ
 立越へ紙面を以て其方をも呼び寄すれば先づ夫迄は便りを待ちやれ 權」成程お供致して若
 しひよつと追手が掛れば足手がらみお詞に隨ひ升るが却つてお爲と申もの」ト酒の吹たる
 思入有つて」 權「チット且那樣酒が吹て参り升た 淨」然らば一つついでくりやれ 淨」と茶

腕を取て差し出せば權四郎涙みくづき 權「ナト羨へ過ぎては居り升せぬか 飛「左様でない様じや○コリヤ良い酒じやの 權「ハイ善いか悪いか其酒は○アノ鳥居前の養賢屋で買ふて参り升たが口には合ひ升まい 飛「イヤ余程美酒じやアレそちが手製の美酒○香と賞翫致すで有らう 權「と箸を附るを 權「ア、モン夫は首が取れてきまんの悪いそちらの方に被成升せ 權「と何氣なき詞も胸に釘打つ重幸 飛「何れ一度は取られる首 權「エ、 飛「イヤ是は佛敵信長の首と思へば心地善し」ト一答喚ひ 飛「イヤ結構な肴じやのう 權「と聞くに涙をはら／＼と流し 權「上りも附けぬ體圖と數の珍味と思召と其心根がお傷はしうムり升る何事も皆時節でムり升るをア 飛「よ、時節じや此魚のさのふは千尋の大海に快く遊びしにけふは漁夫の敵故に首と成りしも是時節人間萬事時節と思へば是が別れに相成ることも必ず悔ひな權四郎そちも祝ふて一つ過せ 權「と置きし茶碗に酒つげは 權「有難うはムり升るが其様な忌はしい事かつしやり升ると若しもの事でも有りこそぬわと○ア、私迄が同じ様に鶴龜く 權「と涙と共にぐつと呑込み 權「且那樣お目出度うムり升るな 飛「チ、目出度い 權「あなた様にも私にも常にハ香ぬ酒成れど今宵はお上り下さり升せ 權「差し出す茶碗を飛驒守受けては于し受けてこそす酒は熱湯熱鉄を呑む苦るしさは身を焦がし悶へ観やめる下戸の口 飛「百萬騎の大敵も物の數とは致さぬぞも此酒計りにこそ降参じや○其方

も今一つの過せ 權「又も茶碗に涙々どつぎし酒より氣を呑まれ 權「モン此様にかつぎ遊ばしては權四郎は死に升るシタガあなたのお酌を呑ぬは主へ御不禮此酒りと討死とやらかし升せうか 權「顔を志がめて無理に傾け 權「ヤレせつなやア、酔ふた／＼ 權「今は世に有る甲斐もなき身を捨てしせめては君が慰めにせん 權「且那は目出度い門出の盃 權「翌はお立かお名残り惜しや 權「アハ、ハ、面白いぞく／＼ア、アレく／＼且那様の顔が七ツに見へ升るアハ、ハ、ハ、飛「ハ、アコリヤ酔ふたなく○身共も酔ふた 權「其儘そこに眩枕」ト飛驒守横に成る時の鐘に成り」 權「ありやモウ夜中モン暫くお休み被成升せぬか 飛「イヤ身は是で苦るしうない 權「でもお風を召しては成り升せぬ 權「いひつゝ立つる弓取りも酒に他愛のなき主をいたはり連るゝ間所は昔の錦引替へて筵屏風に破蒲團見るもいふせき有様なり」ト權四郎飛驒守を介抱なし上手の家体を明ると筵屏風を建て破れし木綿布團を敷き有り此上へ飛驒守寐る」 權「サア御寛りとお休み被成升せモン且那樣 權「といへ共最早高野 權「ア、此頃中のお疲れが出てコリヤモウお寐被成たさうな○昔のお顔は何所へやら此マアおやつれ被成た事わいさうも有らうか長の御苦勞遊ばした其甲斐もさく今の御難儀お可愛さうやらお氣の毒やら涙ばつかり胸に詰つて飯も咽へは通り升せぬわい」ト下手の敷疊を押分け又九郎手拭をひらうに唐薙子冠をよしていくじかく尻をからげ道中差を差し出て來り

様子伺ひ橋掛りへ礮を打つ橋掛りより繩禪の百姓二人竹鎗を持ち出て来るを又九郎咄く
 兩人はうなづき引返して這入る又九郎松の木に登り家根へ上り煙出しを破り掛ける權四郎
 此音に恟りして障子を建切り「權誰じや〜」又九郎「ニヤアエ」ト猫の鳴聲をする「權ヤ
 ヲ嬉しやひよつと捕手の者でも来たかとおれを恟りさせ居つた猫なら安心畜生〜」ト追
 ふ事有つて「權僅か二盃の酒じゃけれと天窓はぐわん〜」目はくら〜トちつとの間
 寐そべらうか「ト着物を脱いで下に敷き襦袢一つにて筵を着て寐る此内又九郎様子を伺ひ
 煙出しを破り破風の内へ這入り自在竹を傳はり震へながら漸う下り四つ這に成り權四郎の
 寐息を伺ひ又家体の内の寐息を考へホット思入有つて油さしの油を敷居へ流し込み障子を
 そつと明ると内に飛驒守寐て居る又九郎我刀を抜き臺を切て見て是ではあかねといふ思入
 れ有つて飛驒守の枕元の刀を取り抜て見て思入有つて飛驒守に跨り咽元を突うとして突兼
 るこゝし色々有つて下の方へ來り振りかぶつて首を討つ是にて飛驒守の本首は枕を越して
 落る又九郎跡へ飛退く此拍子に權四郎に躓く權四郎目を覺し「權ヤ又九郎殿か」ト起上ら
 うとするを又九郎恟りして刀を權四郎の咽へ突立て「又權四郎赦してくれ大名じや〜」
 トるぐる權四郎苦しみ落入る又九郎刀を抜くと一所に尻餅を搦り權四郎の死骸を後ろへは
 かし飛驒守の首の傍へ這つて行き氣味悪るさうに飛驒守を起して敷居の上へ乗せ「又サ

ア落たぞ首が落たぞ大名じやぞ〇然し飛驒守にしては強うも何でもないわろンタガアノ庄
 家さんは何して居るかコイヤいつろかれが方から首を持って羽柴の旅館へサ、夫がよい〜
 「ト納戸口の暖簾を引切り首をこは〜包む事有つて」又「サア是からが大名じやアノ村の
 家來りも何をして居る事やら又九郎の守様のお立じや〜」ト首を抱へ行に掛る後ろにて
 本鐵炮の音して又九郎首を落し立身に苦しみはつたり落入る奥より權四郎二役鈴木孫市素
 網黒綸子の着附野袴大小切緒の草鞋を穿き小筒を提げ出て來り又九郎の死骸を蹴退け「
 二役孫市」我飛驒守殿の遺言を守り敵へ降參致さんと今日當地へ參つて見れば重幸殿には合
 戦を逃れ當所に忍びおわする噂さ參つて見れば此有様「ト切首を取出し思入有つて」孫是
 が石山本願寺の軍師飛驒守重幸殿の御最期成るか艱難の相愛に留り斯る非業の死を成し玉
 ふと思へば猶更此孫市お痛はしう存じ升る「ト橋掛りより飛驒守二役奎右衛門着附へり附
 のふん込み袴石持の羽織庄屋の拵らへにて以前の百姓二人付添ひ出て來り」奎右衛門「ら
 いやつじや〜能く取た〜」〇「モンお庄家様鼠を取た猫では有るまいし」△「相手は鈴木
 飛驒守滅多に油断は成り升せぬぞや」奎置てくれ鱸で有らうが鯉で有らうがこはい事はな
 いのじや最前又九郎の使に貴様達が來たよつて早速秀吉様の御旅館へ知らして來たれ
 ば追附お役人の來る時分モウ首に成つたじやあらうちやつとそこを明けてくれ」ト〇門口

を明けて見て」○「庄屋様、明き升せぬぞや 李、エ、ペつてなら蹴破れ」△「マアお前さんから蹴破つて這入り被成れ 李、扱は飛驒守がこはいのじやな ○「さういふお前が 兩人、こはがる癖に 李、何の犬が吠へても逃げぬ庄屋じやこはい事はなけれど氣味が悪るいじや 案内は小前の役碎かぬかい 兩人、マアお前さんから碎き被成れ」ト李右衛門を突やる此はづみに門口の格子碎けて内へころげ込み孫市を見て」李、ワア、飛驒守じや」ト悔りしてひつくり返る」孫、コリヤ鹿相申な某事は鈴木の一族孫市といへる者秀吉殿に用事有り羽柴の旅館へ案内致せ 李、誠相な鈴木の一族と有るからは矢つぱり強いわろじやあらうお救るしく」孫、詞を背かばぶつばなすぞ」ト刃を抜て目先へ突出す」李、ハア、参り升く」ト橋掛りより又九郎二役片桐助作野袴鞭先大小にて家來五三の桐の紋附し箱提灯を持ち先に立ち跡より家來一人首桶を持ち出て來り居て」助作、アイヤ案内に及ばぬ秀吉が家臣片桐助作飛驒守を討取つたりとの知せに依て推參せり 孫、誠に貴殿は戰場にて毎度劔を交へたる片桐殿にて有りしよな 助、左いふ御邊は孫市殿、我主君秀吉公へ用事とは 孫、飛驒守を討取たるは斯くいふ孫市 助、何ぞ 孫、イヤお受取り被下れ」ト首を置く」李、ハア、首じや」ト又ひつくり返る助作首を取り」助、誠に疑ひもなき飛驒守が首級○スワヤそこ元が此首を 孫、如何にも只今討取りし仔細は庄屋方へ參つて」ト助作首桶に首を納め」助、左様ムら

百十四

は孫市殿 孫、片桐氏 助、孫、庄屋案内 李、ハアイ」ト立ちうとして腰の抜けたるをかしにて尻餅を突く兩人は顔を見合はせ氣味合あつて孫市は刀を鞘に納め助作は首を抱へる是と一時の木の頭」李、抜けた」ト此仕組宜しく合方にて拍子幕

大 詰 紀州 鷲の森 御坊の場

一 頭	如 上 人	一 富	島 頼 母
一 鈴	木 孫 市	一 栗	津 右 近
一 下	間 頼 廉	一 鈴	木 孫 六
一 片	桐 助 作	一 籙	中 光 姫
一 杉	浦 民 部 太 夫	一 丹	羽 五 郎 左 衛 門
一 籙	中 春 日 の 前	一 瀧	川 左 近 少 監
一 教	如 上 人	一 軍	勢 大 勢
一 下	間 仲 之	一 僧	侶 大 勢
一 志	摩 與 四 郎	竹 本	連 中
一 河	嶋 水 之 助		

造物平舞臺上方瓦屋根附の門是に續き下の方畝に破られし寺の塀尤破れし跡を楯の板な
 ぎにて塞ぎし書割所々に矢の立し詭へ都て紀州鷲の森御坊の模様丹羽五郎左衛門鎧陣立大
 將分の拵らへにて采配を持ち指揮をなし惣出の士卒鉄炮鎗長刀を持ち塀を崩して居る本鉄
 炮の音烈しく床の淨瑠璃にて幕明く 淨るり「一人の強盛に當つては山河をも坂さんづべし
 一朝嵐縮すれば人情萬端なりとかや神戸信孝の軍兵二萬餘騎不意に寄せたる御堂の八方矢
 叫びの音闕の聲山も崩るゝ計りなり 丹羽如何に者共此度信長公の仰せと蒙り神戸侍從信
 孝公四國征伐を名となして不意に寄せたる鷲の森早ヤ一攻めに踏潰ふせ 皆々「心得升た淨
 息をも繼がす攻めかれば塀の内より栗津右近富島頼母大音聲「ト塀の内より右近頼母陣
 立にて半身出て」頼母「ヤア偽り表裏の信長の軍兵共 右近「今我々が申す事 兩人「能つく聞
 け 丹羽「何が 皆々「何と 右「信長多年の間當寺を攻抜く事能とす終に都へ頼んで和睦を
 調へ頼如御親子に退去なさしめ 頼「誓紙の墨も乾かぬ内當鷲の森を攻る條身法未練の信長
 が振舞 右「假令當寺無勢と雖ども死を誓つたる門徒の我々 頼「討たば討て鬼となつて人面
 獸心の信長親子何安穩に 兩人「置く可さや 淨「無念に凝つたる怒りの悪言聞くと齊しく
 せ笑ひ 丹「ヤア頼如を始め迂奴等迄今端の際の難言過言コトヤ能く聞けよ信長公和睦と偽
 り頼如親子に石山を退去させしは油断をさして多年の恨みを散せん謀計宗旨と共に頼如の

が命も風の前の灯火願つた通り今日こそ念佛往生さしてくれうは 右「ヤア今當御堂に籠る
 もの二百に足らぬ小勢と雖ども 頼「佛恩報謝の其爲よ味方なしたる門徒の面々 右「ヤア
 〱何れも門外へ出て出で 頼「味方の手並みと 兩人「見せられよ 淨「二人が下知に志摩河
 島大門開ひて出て出「ト上手の門を開き内より志摩與四郎河島水之助陣立の形りにて太刀
 を抜き出て來り」志摩「仰せにや及ぶべき覺悟極めし味方の面々 河島「神戸信孝と刺違へ花
 やしく討死遂げん 丹「何を〇ッレ者共 淨「指揮に隨ふ軍兵共爰を先途と寄せ手の粉骨門徒
 も必死の碎身に雌雄を争ふ龍虎の勢ひ「ト此内右近頼母は塀の内へ這入る立廻り宜敷あつ
 て丹羽三人揃んだる見得にて返し

造物平舞臺見附真中三間の間佛壇此前打敷を掛けたる須彌壇正面立像の阿彌陀如来此前の
 長押に親鸞聖人直筆の御影を掛け須彌壇の左右に鶴龜香爐花立惣じて門徒宗の佛具都て鷲
 の森本堂の体真中に頼如上人懺立衣七條の袈裟を掛け二疊臺の上に裏向に住居回向のこな
 し上の方に春日の前襦衣装下の方に教如上人懺立衣七條の袈裟を掛け住居次に光姫襦衣装
 上手に下間頼廉同仲之小手脚袴上下の拵へ下手に杉浦民部太夫同じ拵へにて拵へ左右に
 鈴木孫六鎧成り富島頼母栗津右近拵へ居る床の送り返しにて道具納る 淨「挑み合ふ既に天
 正十年水無月上人始め御臺若君一族門徒の末々迄鷲の森の御堂に集り今ど最期の御供と覺

悟の体ぞ傷はしく中にも勇氣の下間仲之 仲之「スリヤ敵の爲に外舞もアノ大半 皆々破られしとな 右近 如何にも我々昨朝より必死を極めて働け共不意に寄せたる敵の大軍 頼母「味方は僅かの小勢にて一日一夜の難戦なれば今は一同身体疲れ 右「敵は大軍の其上に神戸信孝の軍勢も馳せ加はりしと相見へたり 頼母「此軍兵攻寄せせば最早半時と防ぐ事は 兩人「能ふまじ 頼母「返屈したる一言に御臺を始め涙聲 春日前「スリヤ當宗門の滅亡も 教如「早近づきしか 光顯「民部 民部「何れも 皆々「ハア、 頼母「ハット計りに僧俗一同聲を放つて歎きしは理りせめて道理なり下間頼廉是を勵まし 頼廉「ヤア卑怯なり方々佛恩を思ひなば討死を遂げ彌陀の利劍を授りて再び此土へ信長を誅罰に來たらん事我々が本望ならずや 民部「何れも早く討死遂げ佛の御加勢願ふべし 仲之「勇めや方々 頼母「骨に肉を附たる詞に門徒の面々氣を取り直し 孫六「我一族たる鈴木孫市敵へ降りし不信に依つて當城滅亡なすと思へばお詫びの爲戦死は某一番に仕らん 右近「イデ我々も 頼母「共に切死 兩人「仕らん 頼母「勢ひ込んだる血氣の若武者上人念佛を止めさせ玉ひ 頼母「ヤレ早まるな門徒の方々 三人「ハア、〔ト顯如前を向き〕顯「今末期に臨み罪造りに敵を防いで何かせん寄せ手門内に込み入らば我は元より教如にも生害すべき間本堂に火を掛けて焼捨られよ南無阿彌陀佛く 頼母「早生害の御用意なり又他事亦くも見へたるは尋くも亦哀れなり教如も御袖絞らせ玉ひ 教如「

スリヤ父上には御生害の 皆々「お覺悟とさ○ハア、 頼母「御痛はしき成行きやと互に見合はす御目には涙計りぞ先立てり鈴木孫六謹で 孫六「上人を刃に殺し斯く歎きを掛け奉るも 右「謀計なりと歎きて降参なしたる鈴木孫市 頼母「戰場を遁れ玉ひし軍師を討しも彼れなるよし死す共恨みを 三人「晴さで置るか 頼母「無念の怒り天を衝き拳を握る人々を顯如上人制し玉ひ 顯「ヤレ人々軍師には最期を遂げ大將我を見限りしも皆顯如が不徳と思へば此期に及び誰をか恨みん○左は去り乍ら祖師聖人より數百歳の今日迄化益を蒙る門徒數知れず信心は失なりねと今信長が妨難に依て宗門斷絶に及ぶ事宗祖には本意なく思え玉はん 頼母「不徳の者よと眞影を伏拜みくさめくぐと歎くれし御心根を傷はしし折柄門内騒がしく敵を除きし志摩河島立戻つて大息つき 與四郎「上人始め何れも方 水之助「早御最期の 兩人「御用意く 頼母「早御用意とぞ呼ばいつたり 仲之「コハ心得難き兩所の詞 頼廉「最期の用意致せとは 兵最早敵勢門内へ 皆々「這入りしよな 與「さん候手痛く働さ候へ共早門内へ込み入られは今は防ぐに手立なし 水「上人始め何れも方御最期の御用意あつて 兩人「然るべし 頼母「息を切て述べければ下間仲之突ッ立上り 仲之「此上は某防ぎ矢仕れば其間に上人御親子にはお心靜かに御生害 頼廉「出かされたり仲之殿 皆々「片時も早く 仲之「何れも冥途で御意得申さん 頼母「袴の股立取るより早く庭上さして走り行く 頼母「跡には御臺光姫君聞くも悲しく取

漣り 齊「スリヤ我夫」顯如上人始め 光「教如様にも御生寄遊ばさねば 阿人」成らぬかいな
 ア「御痛はしやと身を打伏し流涕こがれ泣玉ふ人々も涙を拂ひ 兵」お敷き去る事には候
 へ共事急に臨みし上は當本堂にて御自害あれ御介錯の仕らん 顯「御覺悟の上とはいへど御
 最期の場を同うせん事」御臨終の妨げ成るべし某顯如御夫婦を別間へ御供仕り御介錯の致
 し申さん 與「我々ども 水」死出の御供 皆々「仕らん 齊」死を極めたる人々の詞を上人聞
 玉ひ 顯「顯如を見限り敵方へ降参なせし者ある中に我故盡せし戦勇も今は一水の泡と消へ
 共に最期を遂げさせん事本意ならねど是非もなし祖師聖人は隔てなく皆同行とは宣玉ひし
 ど未來は必ず同行たるべし 齊「仰せは堅き石山の戦死成佛疑ひはアヲ有難やと堂上堂下思
 はず聲を發せしは鬨の聲かと怪しまる 阿」皆々「隨喜の涙に咽ふこなし是と一所に所々に泣
 悲む聲をさせる事」 齊「上人重ねて宣玉はく 顯「去り乍ら願ふ所は一向専修念佛往生とは
 申なり 〇南無阿彌陀ア 皆々「南無阿彌陀ア」ト所々にて同音に念佛の聲をさせる」 齊「念佛
 の聲と諸共に立せ玉へば姫御臺是が此世のお別れかと漣る衣の御袖を拂ひ兼たる御涙教如
 の君も御親子の名残りを惜む門徒の面々拂へば跡に取纏る愛別離苦の悲しとは嬰子の父母
 を慕ふが如く御尊顔を見上げば上人御目を半眼に閉させ玉ひし相貌は實に佛身を具足せし
 親鸞聖人十六世本寺の柱礎と稱へたる顯如の徳ぞ 阿」此内皆々名残を惜むこなしあつて前

左右より顯如上人の顔を見上し見得三重にて返し

造物元の道具爰に丹羽五郎左衛門陣床机にかゝり下知をなし惣出の軍兵得物を携へ門の内
 へ息込んで入るぞんちやんにて道具納る 齊「類ひなき勝に乗つたる寄せ手の軍勢息をも繼
 かず攻たるは目覺しゝりける次第なり 丹「ヤア言甲斐なき諸卒の面々只一人の防ぎ矢の爲
 に此門外へ退きしは後日の沙汰も憚りあり死ねや者共進めや方々 齊「進め」くと下知なす
 折柄京地に止まる瀧川左近汗島に鞭うち駈け來り 阿」向ふより瀧川左近將監鎧陣立にて馬
 に乗り走り出て來り」 瀧川「ヤア方々」一大事ころ出來せり急ぎ京地へ引歸されよ 齊「早く
 くと呼ば」つたり五郎左衛門打見やり 丹「貴殿は瀧川左近殿心得難き御邊の注進シテ一
 大事とは何事にて候ぞや 齊「左ればお聞あれ昨日明智日向守謀反を起し信長公御父子を
 討奉り既に京都は大乱なり 齊「聞く」とひとしく寄せ手の軍勢青葉に盡の青息吐息 丹「スリ
 ヤ信長公には御最期を遂げられしとぞ 皆々「ヤア」 齊「餘りの事に呆れ果て腰を抜さぬ
 計りなり 齊「夫故此事告げんが爲め駈け参つたる瀧川左近何れもお去らば 齊「言ひ捨て、
 こぞ引返す五郎左衛門あつげに取られ茫然として居たりしが稍あつて心附き 丹「如何に者
 共此上長居なさば退き口が氣遣ひ早く當所を引拂へ 皆々「心得升た 齊「急を告げたる注進
 に寄せ手の惣軍二万餘騎うるたへ廻つて引揚げしは天變不思議の事共なり斯くと見るより

下間仲之阿外へ走り出せ弓杖突て飽度見違り 仲之「ハア心得ぬ今遠野山に充滿せし敵の軍勢勝ち軍を捨て俄に退きしは味方をおびき出さん手立か何にもせよ誇しき事共じやなア」

「邊なりと睨んで」ト仲之弓を突て飽度思入れ床の三重にて返し

遺物元の本堂の道具真中に教如上人光姫上の方に杉浦民部志摩與四郎河島水之助富島頼母栗津右近三實に土器長柄の銚子を置き最期の盃として居る床の送り返しにて道具納る 手束弓矢竹心のはやり男も今は頼みの柱も切れ武器に替へたる長柄の銚子逆に廻らす最期の酒宴哀れにも又涙よしト教如盃を納る 民部「未來は同行れるべしとの誓ひの爲のお盃與門下の末の我々迄」水「下し玉はる新門跡 頼母、教如の君の末期の盃 右近門徒の者共有難く 民部流れ頂戴 皆々仕つてムリ升るト後ろにてりんの音する」教如「聞れし父上人にも早御最期の際と見へ念佛のお聲も絶へしぞや 光姫、父上人に先達つ不孝の罪には似たれ共時刻を移し憂き死耻を見んよりは 教如、父に先達ち最期を遂げ寂光浄土の御案内 民部覺悟よくば教如上人 與「イデ我々も 皆々死出の御供 教如、未來は必らず同行あるぞよ皆々」ハア、 既に斯うよと見へたる折りしも取て返せし下間仲之斯くと見るよと聲を掛けト教如光姫は懐劍四人は太刀を抜き咽へ突立てやうとする民部は刀を教如の目先へ差し出す向ふより下間仲之走り出て来り」仲之「ヤレ何れも方教如の君にも御最期を留まり下

さり升せう 淨」と言ひつゝ来る仲之が詞を一同聞答め 民部「誰かと思へば仲之殿 水「何故留め 皆々召さるゝぞ 仲之「されば某防ぎ矢にて敵を喰ひ留め候所敵の大軍引揚げしは何とも 以て訝しく此事お知らせ申さん爲駆け參つてムリ升る 淨」と聞くに人々顔見合せ 民部「スリヤ攻め入りし敵の大軍 皆々引揚げしとな 仲之「夫故今は御堂の八方敵一人も候はず此段顯如上人へ御披露」 淨「奥へ通する大音に御臺下間走り出ト上手の襖の内より春日の前は抜たる懐劍を持ち頼母は下緒の襷掛け抜刀を持ち走り出で来り」頼母、上人始め御臺にも既に御白刃の咽元へ至りし折柄 春日、俄に敵の引揚しとはそりやマア本か 頼母、誠でふるか 淨「訝しさと門徒の面々半は疑ふ其時しも遙か向ふに聲あつてト向ふにて」 孫市「アイヤ何れも偽りならぬ其仔細鈴木孫市言上致さん 皆々ヤ、何と 淨「呼ばゝる聲と諸共に息を切つて駆け来る孫市座中の面々見るよりもト向ふより顯如上人二役鈴木孫市好みの鎧陣羽織にて走り出て来る」 與「ヤア敵方へ降参なしたる 四人、人非人 頼母「貴殿は鈴木孫市殿よな 淨」と詞も未だ終らぬ内筒音高く覗ひの一發ト後ろにて本鉄炮の音して孫市左の股を打抜かれまこなしにて花道にぞうと居て」孫市「ヤア卑怯にも孫市を飛道具にて討たるは敵か味方か何奴なるぞ 淨」ト苦痛をこらへし一言にト上手の内にて」 孫市「今放つたる鉄砲の主しハ一族鈴木孫市 淨」といひつゝ一間を躍り出 孫市「珍らしや鈴木孫

ア、ヲ目出度や法敵亡び宗門の末廣がりに御紫昌と三度ひ返して立舞ひし餘風残りて今の世に跋踊りと毎年六月鷲の森にて行ひる踊れは斯くと知られける人々始めて悦びの眉を開きし扇を上げ「イヤ〜」と聲々に響たる聲の止まざりしは勇ましくこそ聞へけれ時に侍走り出 侍ハッ申上る勿榮筑前守殿の家臣片桐助作顯如上人へ目通り致し度とあつて早馬にて駈参つてムリ升る「トいひ捨て引返して這入る」民「何片桐助作上人へ對面致さんとらは今枝葉の遺恨も是迄先づ其趣意を聞たる上〇孫市殿には疵養生のお手當ながら此段顯如上人へ「孫」何さま一旦歎きし片桐に對面なすも何とやら然らば拙者は「孫」片時も早う皆々上人へ「孫」各後刻御意得申さん「孫」並居る門徒に目禮し奥殿さして入にける程もあらせず片桐助作智勇を僅か三寸の胸に疊みのさはりさへ禮法乱さず入り來れば頼廉は威儀を繕ひ「ト孫市は上手へ這入る向ふより片桐助作麻上下にて出て來る」頼廉「是ハ〜片桐殿には毎度のお使者御苦勞千万 皆々先づ〜是へ 片桐御免下され「孫」速べる禮儀も柔和の片桐本堂へ打通れば 民「シテ使者の 皆々趣はな 片教如上人渡らせ玉へば主人の口上申述ふべし〇此度信長公不慮の儀は定めて聞も及ばれんが光秀の逆罪天地共に容れざる所去り乍ら信長公には本願寺の法敵といへども明智が爲には主君なれば光秀が振舞天下の人

憎まざらんや彼信長の子息老臣等を防がん爲顯如上人を欺き奉り門徒の助勢を乞ふは必定若し上人誤つて光秀に同心なれば逆臣に組し玉ふ其罪遁れ玉ふまじ光秀如何様に申越す共道を守り秀吉主君の吊ひ軍に力を添へ玉はらば上人の誠心を感じ逆賊明智光秀を亡し天下平定の後には當本願寺の檀越と相成り長く一向眞宗の信者たるべしとの旨片桐助作承り中國より早馬にて駈け付候使者の趣き斯くの通りにムリ升る「孫」身をへりくだつて述べければ教如上人うなづき玉ひ 教「遠路の所太義にこそあれ此由父上人へ下間頼廉申傳へよ 頼「ハア、畏つてムリ升る「孫」と立んとせま其折しも顯如上人御聲高く「ト上手の襖の内にて」頼如「アイヤ頼廉知らせに及ばぬ使者の口上聞侍へりぬ「孫」一間の襖押開かせ立出玉ふ顯如上人「ト顯如上人跡より黒衣の僧侶大勢附添ひ出て來り顯如二疊臺の上に住う」顯「我悪人の衆生を濟度し善を勧めてこそ釋門の徒たるべきに何とて逆臣光秀に組すべきやまのふの敵も一朝の霜と消にし信長が非業の最期を痛まし、未來は顯如佛果を得させん此由秀吉へ申傳へよ「孫」仇を仇とし玉はぬ顯如の仰せぞ有難き助作頭へを疊に摺り附け 片「ハ、ッ御身を苦め奉りし信長を恨みとせず斯く有難き仰せをば蒙りし段主人は元より泉下にましましを信長公にも曝や悦び玉ふらん今日より某始め主君羽柴秀吉にも當宗歸依の信者と相成り都に於て地を撰み一字の本寺を建立なすべし 頼廉「ヌイヤ秀吉殿には檀越と相成られ「孫」

都に於て一字の本寺を 皆々「建立せんとす 願 既に祖師の眞影も顯如と共に亡び失せ 驚
一向宗門斷絶の危急に臨み信長殿 春「明智が爲に最期を遂げしも 光「行跡非道の事多く
結願 神護不退の叡山を燒失ひ 仲「當本願寺をも無体に乞取り顯如上人御親子を 兵「害せん
とせしのみならず高野山をも攻潰ぶさんと 與「軍馬を向けし非道の振舞天地神明其罪を
水「如何で憎み玉はざらんや光秀主人を害せしも 右「汝に出て、汝に歸る 願母「自業自得の
信長が積惡 孫六「臣下の爲に親子諸共非業の最期を遂けたるも 願「前世の怨敵現在に君臣
の因みを結び過去の仇を報するものなり能くく 一世の行跡を慎み候へ人々よ南無阿彌陀
佛く 片「實に尊むべきは眞宗の 願「奇瑞の目前 皆々「佛敵滅亡 願「是も偏へに宗祖上
人「ト正面に掛けたる親鸞聖人眞影の掛地をとる」 敢「弘め玉ひし一向専念 願「皆念佛の
皆々「ハ、ア、願「功力じやわへ 淨「宗祖聖人眞筆の御影の威徳を尊けれ 一ト顯如上人は眞
中にて親鸞聖人の眞影を開く皆々是を拜すこなし此見得宜しく段切にて目出度事

演劇 御文章石山軍記 大尾

明治廿八年二月七日印刷
明治廿八年二月十三日發行

(定價金拾三錢)

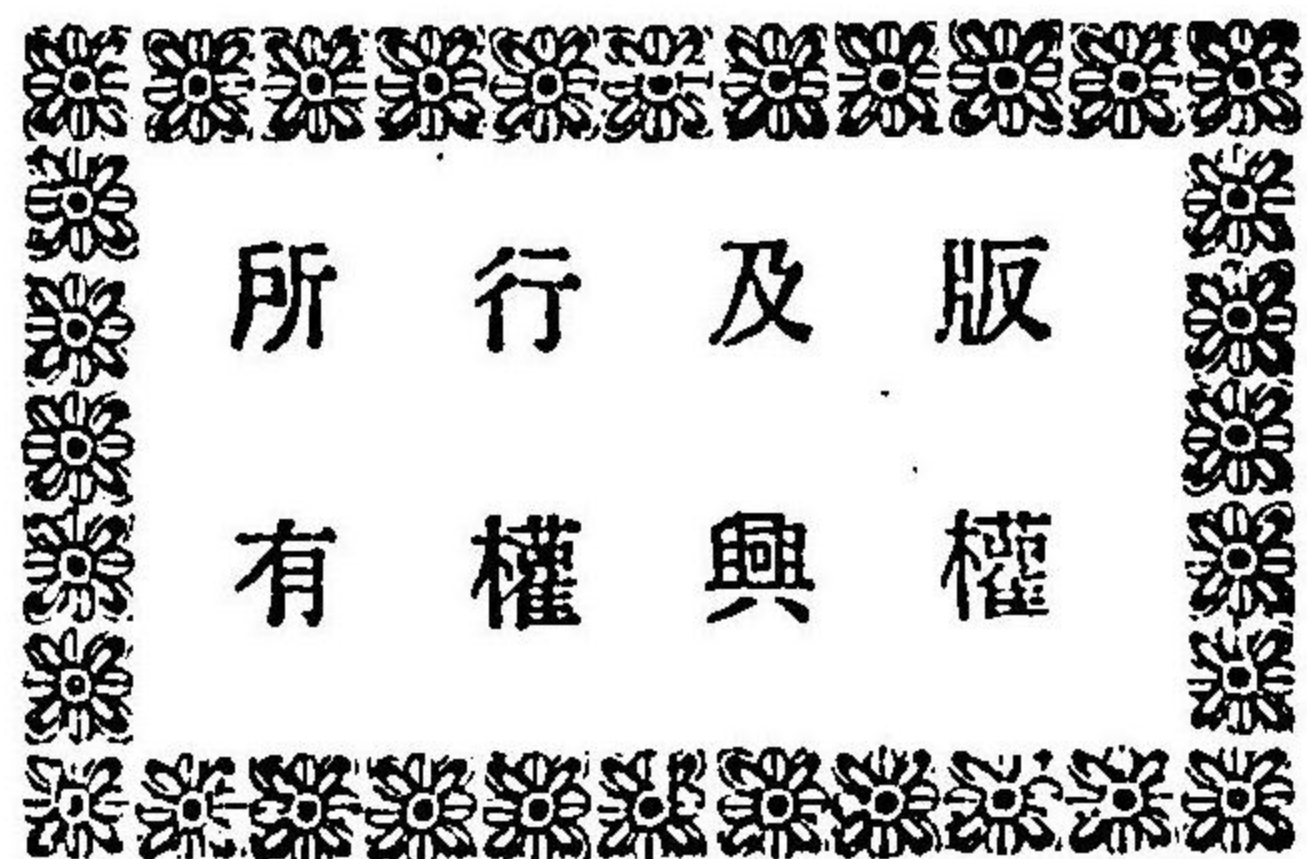
大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷
勝 諺藏事

著作 勝 彦兵衛

大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷
版權所有者 兼發行者 中西 貞行

大阪市東區内本町橋詰町六十八番屋敷
周擴社

印刷者 前田 菊松



版及發行所 權興有

不許謄寫

